

飯山市埋蔵文化財調査報告 第44集

柳町遺跡

YANAGI

MACHI

SITE

1995・2

長野県飯山市教育委員会

柳町遺跡

YANAGI

MACHI

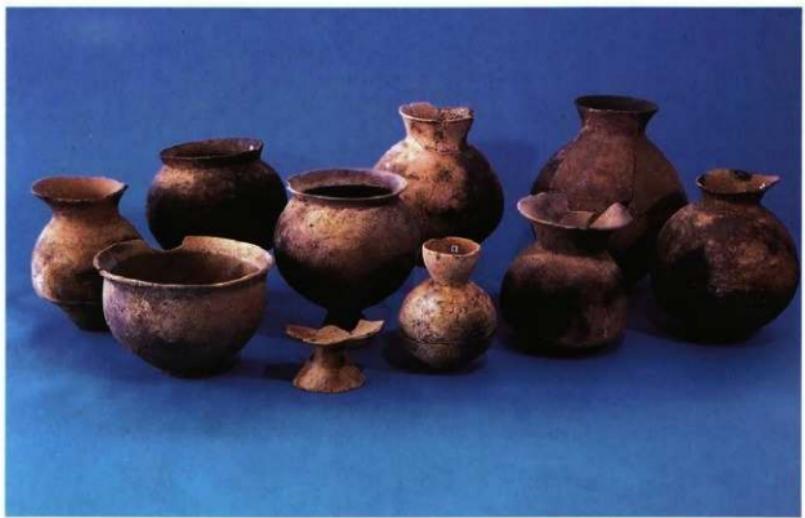
SITE

1995・2

長野県飯山市教育委員会



▲ 遺跡遠景



▲ 1号構圧出土土器

序

飯山市は長野県の北部に位置し、多雪地帯ではありますが、古くからの遺跡が多く遺されております。

この度、農村総合モデル事業にともない学史的にも著名である柳町遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査には、飯山北高等学校教諭で市の文化財保護審議会長でもある高橋桂先生に団長を、調査主任には田村滉城氏、調査員に桃井伊都子氏をそれぞれ委嘱して実施しました。調査の結果本報告書に掲載いたしました多くの成果が挙がりましたが、とくに古墳時代初期の溝址は、その性格や出土土器について多くの知見を私たちに与えてくれました。

今後さらに研究を進めると共に、当市の埋蔵文化財保護行政をますます推し進めたいと考えております。

最後に、本調査にあたりご指導・ご協力をいただいた尾崎区はじめ、参加いただいた作業員各位に厚く御礼申し上げ序といたします。

平成7年2月2日

飯山市教育委員会教育長 岩崎 弼

例　　言

- 1 本書は、長野県飯山市大字赤字柳町425-1ほかに所在する柳町遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、農村総合モデル事業に伴い飯山市より委託され、市教育委員会が調査会を設立して、平成6年6月10日より同年7月25日まで、現地において発掘調査を実施した。
- 3 今回の調査で検出されたものは、弥生時代・古墳時代・平安時代の住居址等で、古墳時代の溝址および内部より出土した遺物が特に注目される。
- 4 発掘調査にかかる組織は以下のとおりである。

飯山市遺跡調査会

顧　　問	小山 邦武	市長
会　　長	滝沢藤三郎	市教育委員長
副 会　長	水野 光男	市社会教育委員長
委　　員	高橋 桂	文化財保護審議会長
	田中 広司	市議会総務文教委員長（平成6年12月11日退任）
	藤巻 泰雄	市議会総務文教委員長（平成6年12月12日就任）
	中村 敏	市公民館長
	小川 幹夫	市教育委員長職務代理
	岩崎 彌彌	市教育長
事務局長	月岡 保男	市教育教育委員会次長
事務局次長	町井 和夫	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月 静雄	市教育委員会社会教育係
"	川口 学実	

調査団

団　　長	高橋 桂	飯山北高等学校教諭
担　　当	望月 静雄	
調査主任	田村 規城	市埋蔵文化財センター調査員
調査員	桃井伊都子	市埋蔵文化財センター調査員
調査員	常盤井智行	市埋蔵文化財センター調査員
調査員	小林 新治	市埋蔵文化財センター調査員

作業参加者

種山巖・土屋久栄・齊藤和子・宮本鈴子・北原清子・阿部けさ子・中条忠治

シルバーパートナーフェスティバル

高橋一二・宇田隆・竹井正光・渡辺金治・服部福夫・丸山十四・阿部えい・植中高見・風巻泰助

清水国治・高原弘一・町井まつ・岸田志づこ・岸田昇・石沢悦次

整理参加者

小林みさを・川口学実・藤沢和枝・小川ちか子

- 5 報告書の作成は、高橋桂調査団長の指導のもと調査主任田村規城と調査員桃井伊都子が中心となり、調査員全員が補佐した。

遺構図・石器図は小川ちか子、遺物土器図は桃井伊都子が中心となって行った。

執筆については、目次に文責を明記した。

なお、桐原健先生には「回想・柳町遺跡の調査」と題して玉稿を賜った。

- 6 調査から報告書作成においては、以下の諸氏・諸機関よりご指導・ご協力を賜った。記して御礼申し上げる（順不同・敬称略）。

桐原健・中島庄一・赤塙仁・黒岩隆・服部乙彦・服部一郎・服部栄八郎・外様公民館・尾崎区（酒井宰治区長）・区道路委員会（宮本廣委員長）・福沢建設・市役所農林課

- 7 本調査にかかる書類・図面・遺物等は、飯山市埋蔵文化財センターで保管している。

- 8 発掘調査時における遺構番号と、今報告における遺構番号が相違するものを以下に掲げる。

豎穴住居址（昭和26年・32年に1～6号住居址まで報告されているため番号を改称）

土坑（各グリット毎に付番していたため通し番号とする）

豎穴住居址

地 区	発掘時遺構番号	報告書遺構番号	時 期
I	S I 1	S I 7	平安時代
I	S I 2	S I 8	弥生時代中期
I	S I 3	S I 9	平安時代
II	S I 4	S I 10	弥生時代後期～
II	S I 5	S I 11	弥生時代後期～古墳時代前期
II	S I 6	S I 12	古墳時代前期？
II	S I 7	S I 13	不明
II	S I 8	S I 14	平安時代
II	S I 9	S I 15	古墳時代前期
III	S I 10	S I 16	平安時代

土 坑

地 区	発掘時遺構番号	報告書遺構番号
I	B-3 SK1	SK1
II	S-7 SK1	SK2
II	S-8 SK1	SK3
II	R-14 SK1	SK4
II	S-14 SK1	SK5
II	R-16 SK1	SK6
II	Q-20 SK1	SK7
II	P-49	SK8
III	C-21 SK1	SK9
III	E-22 SK1	SK10
III	M-24 SK1	SK11

- 9 本書で使用した遺構の略号は次のとおりである。

SI=豎穴住居址、SB=掘立柱建物址、SK=土坑、SKB=本棺墓、SD=溝址、TP=溝状土坑、

SE=井戸址

目 次

序

例 言

第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	(望月静雄) 1
2 調査経過	(田村滉城) 1
A 発掘調査	1
B 調査日誌抄	2
第2章 遺跡の概要	7
1 遺跡の位置と環境	7
A 地理的環境	(望月静雄) 7
B 歴史的環境	7
2 柳町遺跡の調査概要	(田村滉城) 12
A 過去の調査	12
B 調査概要	12
C 略序	25
第3章 弥生・古墳時代の遺構と遺物	26
1 遺構	26
A 竪穴住居址	26
B 溝 址	26
C 木棺墓	27
D 掘立柱建物址	28
E 井戸址	36
2 遺物	(桃井伊都子) 38
A 土 器	38
B 土製品	43
第4章 平安時代の遺構と遺物	49
1 遺構	(田村滉城) 49
A 竪穴住居址	49
B 土 坑	49
2 遺物	53
A 土 器	(桃井伊都子) 53
B 鉄製品・石製品	(田村滉城) 59
第5章 繩文時代・中世の遺構と遺物	62
1 繩文時代	62
A 遺構	62
B 遺物	63
2 中 世	65

第6章 回想・柳町遺跡の調査	（桐原 健）	66
第7章 補遺—古墳時代前期の土器について	（望月静雄）	71
第8章 まとめ	（高橋 桂）	74

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

平成5年10月22日、市役所農林課より柳町遺跡の照会を受けた。農林課の計画によれば、農村総合モデル事業の一環として農道の整備を実施したいとのことであった。

早速担当の望月と農林課担当の村田技師・鷺尾主事と現地踏査を行った。現場は、周知の埋蔵文化財包蔵地「柳町遺跡」の範囲内にあるものと認められ、周囲の畑には土器片が散在していた。

農林課では県と協議の上、当初予定していた5年度実施を繰り延べ、平成6年度当初に発掘調査を実施し、終了後ただちに工事を進めたいとされた。市教委では、他地区で調査も予定されていたが、地元の農業にとって重要な道路であり、早急に対処する必要があった。また、府内で埋蔵文化財の取り扱いについて充分な協議をしていかなかった経過もあり、雪解けを待って至急行うこととした。

平成6年4月21日 尾崎公民館において、尾崎地区の役職員及び地権者・工事関係者・市農林課を交えて、発掘調査の説明会を実施した。幸いにも区および地権者の全面的な協力をいただくことができ、現場での調査は7月31日までに終了することで了承された。また作業員の確保についても、地元区で最大限の協力をいただくことも確認いただいた。

なお、調査団の組織については、高橋桂飯市文化財保護審議会長に委嘱し、調査員については他でも調査が予定されていたために4名の市埋蔵文化財センター調査員のうち、田村・桃井の2名があたることにし、田村を調査主任として行うことになった。

2 調査経過

A 発掘調査

今回の発掘対象となった遺跡は、柳町遺跡である。開発事業県農村総合モデル事業（農道拡幅）に伴い、発掘総面積約1,500m²を発掘調査した。調査期間は4月初から7月末の予定であったが、雪消えが遅れたため5月10日からの調査となり、終了は7月25日であった。期間中、過去にない晴天が続き、記録にない猛暑に苦しめられながらも、調査開始が遅れたにもかかわらず、予定通りに発掘調査が完了できたことは大変幸いであった。

今回の調査にあたっては、調査地が農道によって遺跡が壊されているかも知れないとの懸念があったが、轍などで撹乱された部分には、比較的遺構が無く幸いした。

また調査対象地は、約6m幅と狭くまた長いことから、残土処理に頭を痛めたが幸い隣接地の所有者のご理解を得て、それぞれ残土置場が確保できたことに対してお礼申し上げたい。

調査グリットの設定は、農林課丈量図の境界杭1・境界杭2を結ぶ線をX軸とし直角に交わる線をY軸として3m方眼を引き、X軸にはアルファベットA・B・C・・・を、Y軸には数字1・2・3・・・を付した。また、調査地が南北に長いため便宜上Y軸を150m毎に区切り、南からI・II・III区に地区割りをした（図1）。

調査方法は調査期間の制約もあり、表土はすべて重機により除去した。そのあと精査、写真撮影、遺構掘り、測量、遺物取り上げの順で行ない、工事予定の関係からI区からII区、III区と南から北へ調査を進めた。整理作業は市埋蔵文化財センターで行ない、接合・復元等は11月より行なったが、遺物の洗浄、ネ

ーミングは、発掘作業と並行して行なった。

耕作土以下に含まれる遺物はグリット毎に取り上げ、遺構内出土遺物は平板実測し、レベルを記録することとし、集中出土遺物については微細図を作成した。ナンバリングは遺構外出土遺物はグリットナンバーを、遺構内は略記号を付けて取り上げた。

B 調査日誌抄

1994(平成6)年

4月

11日(月) 午前 事業窓口の市農林課と事前協議。

雪消え状態を見て調査に入り7月中に完了して欲しい旨依頼される。

午後 地元尾崎地区の酒井区長、宮本道路委員長と調査予定計画、地元説明会の日程など話し合い。

14日(木) 午前 現地下見。発掘方法・コンテナハウス設置場所の検討。

作業員募集チラシ尾崎地区配布。

15日(金) 法寺地区へ作業員募集チラシ配布。農林課と現地打ち合わせ。

18日(月) 農林課と現地打ち合わせ。月末より表土剥ぎ等開始すべく予定提示。

21日(木) 地元説明会(尾崎公会堂)。遺跡の概要、調査日程・方法の説明。調査協力等の依頼。

25日(月) 調査会・調査団合同会議 遺跡の概要、調査日程等を協議する。

5月

6日(金) 重機による表土除去。II区34~1方向へ現農道碎石除去撤出。

コンテナハウス設置完了。

7日(土) 重機による表土除去。(昨日の続き・I区43~21まで終了)道具点検、搬入。

9日(月) 調査区内基準杭打ち。

10日(火) 調査開始式。関係者出席。

I区A・B-1~6手作業にて表土除去。
作業開始。

H-J-22~30 ジョレン精査。

11日(水) A・B-1~6 遺構確認。掘り下げ。

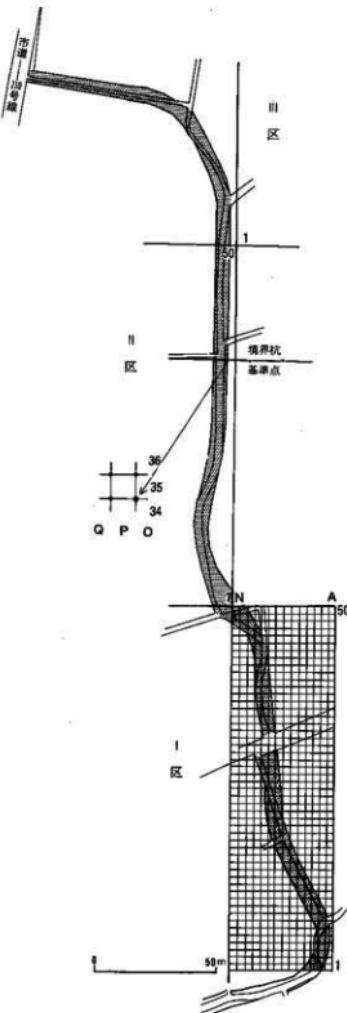


図1 グリット設定図(1:2,000)

- H～J－22～30ジョレン精査。
- 13日（金） H－26より銭貨3枚出土。かわら版1号発行。
- 16日（月） H－26より銭貨2枚出土。
- 17日（火） B－3、SK1より浅碗1ヶ検出（鉄製麻皮削器出土） I J－26～29より複合遺構検出。
I・J－28～29にSD1検出。I－23～25に円形周溝SD2検出。I－27銭貨1枚検出。
- 18日（水） A・B－1～6 遺物検出精査・写真、遺構掘り下げ完了。I～K－33～43ジョレン精査。
J－30ピット内より銭貨2枚検出。
- 19日（木） A・B－1～6 平板実測。SK1微細図作成。H～J－22～30遺構確認。I・J－22～30ジョレン精査。
- 20日（金） A－1KBMレベルを確認する。
I・J－23～29セクションを残し遺構を掘り下げる。
I・J－33～ジョレン精査続行。
- 23日（月） SD1より土器出土。計6個体－古墳時代前期のものか。
I・J－23～29遺構掘り下げ続行。SI1より陶製鋸鉗車出土
I・J－33～40住居址確認。
- 24日（火） SD1よりさらに土器出土。計9個体。
見学者 外様公民館関係。
- 25日（水） SI1掘り下げ。遺物ナンバリング、写真。
SD1掘り下げ。團長現地指導。
見学者 教育委員会次長・係長、上野遺跡発掘作業員。
かわら版2号発行。
- 26日（木） SI1平板実測、レベル。遺物取り上げ。
I・J－27～28遺構掘り下げ。
I・J－38～41ジョレン精査。
桐原健氏、高橋桂園現地指導。SD1について一出土土器から古墳時代の前期に違いないが、溝状遺構から土器の出土例はあるが、幅35cmの狭い遺構から大量の土器の出土例は初めてのことである性格は不明とのこと。読売新聞社取材。
見学者 木島平村理文関係者、地元住民。
- 27日（金） SD1遺物分布微細図。SI7精査。SI8、SI2完掘写真撮影。
- 30日（月） SD1遺物分布微細図。SI8精査。SI8・SD2平板実測。SI8、SI9重複、SI9が新しい。
読売新聞、28日（土）に柳町遺跡発掘記事掲載される。
- 31日（火） SD1遺物分布微細図。I－11遺物分布、平板実測。
見学者 尾崎区長、副区長。教育委員会係長。
- 6月**
- 1日（水） SD1遺物分布微細図。
I・J－34～41遺構確認。写真撮影。遺構掘り下げ。
- 2日（木） I・J－37～41平板実測。26～28仕上げ。
SD1土器取り上げ。SD1調査のため側面調査地拡張。
- 3日（金） SD1実測、土器取り上げ。拡張部ジョレン精査。H～J－25～29掘り下げ。
J・K－38、39（SB1）柱穴掘り下げ。K－40、41（SB2）柱穴掘り下げ。

- A・B-1~6調査完了。杭抜き。II区調査杭打ち。
- 6日(月) 拡張部SD1遺構確認、掘り下げ。SI7掘り下げ。SB1柱穴掘り下げ。
II区P、Q、R、S-16~21ジョレン精査。
見学者 尾崎副区長、教育委員会係長。工事担当者発掘予定を聞きに来歴。
- 7日(火) 拡張部SD1土器3個体出土。SI7仕上げ。SB1、2写真、レベル。
II区16~22遺物僅か出土。P-22にS I 4確認。
かわら版3号発行。
- 8日(水) SD1拡張部土器分布微細図。SI7カマド微細図。
SB1、2平板実測。
- 9日(木) H・I-23~30平板実測。SD1土器取り上げ、掘り下げ。SD1土層微細図。
I~K-34~42調査完了。写真撮影。
II区P・Q-22~29ジョレン精査。P・Q-22~25にSD6、P-25~26にSD5確認。北信濃新聞社取材に来歴。
- 10日(金) H・I-20~23平板実測、レベル終了。G~Q-23~30仕上げ写真完了。
SD1微細図済み。土器取り上げ、完了。I区調査完了。
II区P・Q-26~34ジョレン精査。
- 13日(月) 雨のため現場休み。センターにてSD1出土遺物整理、洗浄。図面整理。
- 14日(火) 同上。
- 15日(水) P・Q-16~34 ジョレン精査。遺構確認面まで。Q・S-14~15ジョレン精査。
- 16日(木) P・Q-16~34 遺構確認終了。写真。R~T-15~10ジョレン精査。
見学者 市議会総務文教委員会現地視察。午後3:30夕立あり。
- 17日(金) Q~T-7~14 ジョレン精査。R・S-12、13にSD7遺構確認。
- 20日(月) 6~14区表土・搅乱土層部機械除去。
午後、上野遺跡現地説明会へ参加。
- 21日(火) R~T-7~12搅乱土層厚く、スコップにて除去。
Q-4~6トレンチ掘り。
- 22日(水) 1~7東側トレンチ掘り。1~7は包含層搅乱された模様。下部黒色土層中にも遺物出土
ほとんど無し。
S-8にSK3確認。坏2個体出土。(平安)
- 23日(木) O~Q-3~6に焼土らが点在するが遺物出土無し。
R-19、20にSI6確認。P・Q-26~34遺構掘り下げ。
外様公民館飯沢専門部員、現地学習会の日程打ち合わせに来歴。
市農林課、教育委員会、工事関係者と現地打ち合わせ。
- 24日(金) Q~S-7~8 ジョレン精査。P・Q-25~34柱穴掘り下げ。
- 27日(月) P・Q-21~34 遺構掘り下げ。SI4、5、6・SD5、6、7確認。
- 28日(火) P・Q、R-19~26遺構、柱穴掘り下げ。P・Q-29~34平板にて遺構図
SI4、5、6写真撮影。SD5完掘、写真撮影。SD5セクション。
- 29日(水) P・Q-25~34レベル終了。
SD5、6遺構掘り下げ。SI6完掘、写真撮影。R-16にSK6、4分割掘り下げ。土層中間
にワラ灰焼土あり。サンプル採取。

S-18にSI8確認。

30日（木）写真撮影—SD5完掘、SD6全体写真・遺物出土状況。SI7、8遺構上面、遺物。

SI10、SD6遺物平板実測。P・Q-29~34遺物取り上げ。

R・S-10~15 ジョレン精査。

7月

1日（金）III区重機により現農道コンクリート剥ぎ。

2日（土）III区重機により現農道コンクリート剥ぎ。昨日の続き。

4日（月）III区重機により現農道コンクリート剥ぎ。昨日の続き。

SI10、SD6 遺物平板実測図にレベル。

S-16の土坑は井戸か？掘り下げ。SE1確認。

R・S-10~14遺構掘り下げ。R・S-11、12にSI14、15重複。SI14が新しい。かわら版4号発行。

5日（火）P～R-16～28出土遺構平板実測。

SK5、6ともに遺物無し。SD6掘り下げ。

6日（水）P～R-16～28 遺構平板実測。

Q～S-7～13 遺構探査。SD7に遺物出土無し。

7日（木）P～R-16～28 ピット内遺物取り上げ。遺構掘り下げ。

P～S-2～5 ジョレン精査。

III区調査杭打ち。P-2より北側 ジョレン精査。

8日（金）Q～S-7～13、SI8、9 遺構平板実測。写真撮影。

III区P-2～9、S-U-15～19 ジョレン精査。

午後4：30より中間慰労会。

11日（月）II区 P、Q-30～34のS B検討、SB3、4、5、6確認。

R・S-7～12、Q～S-15～17 遺構平板実測、レベル。SI14、15遺物取り上げ。掘り下げ。

III区 P-2～9、P～V-10～20 ジョレン精査、遺構確認。P-2にSD8確認。

P・Q2～3 遺構掘り下げ。SD8より土器出土。

12日（火）II区 N～R-1～6、R・S-10～15 遺構平板実測、レベル。SI14、15完掘。

III区 P～R-2～12 遺構掘り下げ。SD8 遺物写真。

本日梅雨明け。

13日（水）II区 R・S-10～15 遺構平板実測、レベル。

III区 P～T-2～15 遺構掘り下げ。P・Q-10のSI16より鉄製麻皮削器出土。

SD8 土器集中地点微細図。

現地説明会は外様公民館・遺跡調査団主催で、7月20日PM3：30より実施予定。

14日（木）II区 R・S-10～15 遺構平板実測、SB3～6 ピット再測量。

III区 P-1～9 平板実測。SD8 遺構図。

Q～V-2～21 遺構掘り下げ。溝状土坑に難行する。注目すべき出土遺物特に無し。

15日（金）P・Q-6～9 レベル。P～S-9～13 遺構平板実測。SI10 遺物分布図。

S～V-16～18 遺構掘り下げ。V-20～ジョレン精査、遺構確認。

18日（月）II区 P・Q-37～50、III区。Q-1～6 重機により表土再除去。調査杭打ち。

- II区 Q～S-13～17 平板実測。
III区 Q-1～7、W～Z・A～Q-21～24 ジョレン精査、遺構確認。
- 19日（火） II区 P・Q-38～50 ジョレン精査。
III区 Q～U-13～17 レベル。T～V-17～21平板実測。Z以西遺構掘り下げ。SK9、10、11確認。
- 20日（水） II区P・Q-37～50 ジョレン精査。遺構面写真撮影。Q～S-14～17 レベル。
P-47のSE2、1m60cm掘り下げ。出土遺物無し。以下2mのポールを打ち込み推察するに地山までおよそ2mであった。従ってSE2の深さは、確認面より3m60cmと思われる。
III区 Y-21以西 平板実測。P・Q-1～7 遺構掘り下げ。
【現地説明会】 午後3:30より。主にSD1より出土土器を展示し、II区の遺構説明をする。参集者 44名。
- 21日（木） II区 P・Q-37～50 遺構掘り下げ。P-47に木棺墓検出。
III区 L～Q 平板実測。E～Q レベル。Q-1～7 測量を残して調査完了。
- 22日（金） II区 P・Q-38～50 遺構検出無し。搅乱（農道轍）トレンチ掘り。
III区 Z以西調査完了。
午後 調査地周辺片づけ。コンテナハウス内片づけ。道具類を市埋蔵文化財センターへ移送。
平板実測を残し作業終了。4:00より、尾崎公民館にて打ち上げ。
- 25日（月） II区 P、Q-38～50 平板実測。
III区 Q-1～7 レベル。SE2 セクション。残留遺物取り上げ。調査作業終了。

第2章 遺跡の概要

1 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

柳町遺跡は、長野県飯山市大字寿字柳町ほかに所在する。

甲信国境に源を発する千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると、千曲川は信越国境の峡谷地帯（通称市川谷）を下り曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南河岸段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ（図1）。

飯山盆地は、南北8km、東西4kmの紡錘形を呈しており、そのほぼ中央を千曲川が北流している。河西域はさらに南北に延びる長峰丘陵によって、東側を常盤平、西側を外様平と呼称している。常盤平は千曲川広い氾濫原とわずかな自然堤防が認められる。一方、外様平は広井川が形成した肥沃な低湿地を形成し、かつては春先に雪解け水を集めた広井川があふれ、一面湖沼のようになったという。

飯山盆地は、第三紀生成層を基盤とし、褶曲構造によって形成されたといわれている。すなわち、西縁を画す関田山脈、盆地中央の長峰丘陵が背斜部に相当し、常盤平・外様平が向斜部に相当する。ただし、断層線も部分的に横走しているため、山地縁辺には断層崖による扇状地や、丘陵の平行移動など複雑な地貌を呈している。

柳町遺跡は、前記した長峰丘陵上に位置する。長峰丘陵は、飯山市街地北部の有尾から戸狩まで約6km続く丘陵で、盆地底との比高差は約100mである。常盤平に面する東側は比較的急斜面であるが、西側はなだらかに外様平の低湿地に接する。

柳町遺跡は、長峰丘陵が中途で分岐し尾崎で終わる支脈の先端に位置している。地形は北に向かって収束しているが、東・北・西に向かってそれぞれ緩やかに低地に移行している。遺跡の中心地帯は、このうち西側に面した部分で、総面積は100,000m²に及ぶものと思われる。標高は約330mで、外様平との比高差は15mである。

長峰丘陵の支脈の分岐点には弥生時代の集落である小泉遺跡や、それに接して東長峰遺跡など弥生・古墳時代の遺跡が密集する場所もある。さらに、外様平をはさんだ西の関田山脈の山麓沿いには、弥生・古墳時代の遺跡が密集している。

B 歴史的環境

飯山盆地の中心部に位置する柳町遺跡周辺の遺跡分布は、古くからの調査によって密集していることが判明している（図2）。

旧石器時代の遺跡としては、千曲川の段丘や丘陵に立地する日焼（12）・屋株（14）・上野（15）・瀬付遺跡（18）や長峰丘陵上の大塚遺跡（19）がある。日焼は黒曜石製のナイフ形石器や搔器に代表される石器群で、ナイフ形石器を指標とする時期の末期に位置付けられている。屋株では安山岩製の横倉型ポイントと製作に伴う剥片類が小範囲より発掘されている（飯山市教委1989）。上野では玉髓製の搔器が多量に発見されこれにポイントが伴うものと考えられており、類例の少ない注目すべき石器群であるといえる。このような遺跡の石器群は、ナイフ形石器終末期から旧石器時代末期の石器群と考えられるが、各方面からの文化的影響を受けながら変遷していったことが特徴といえるのではないか。

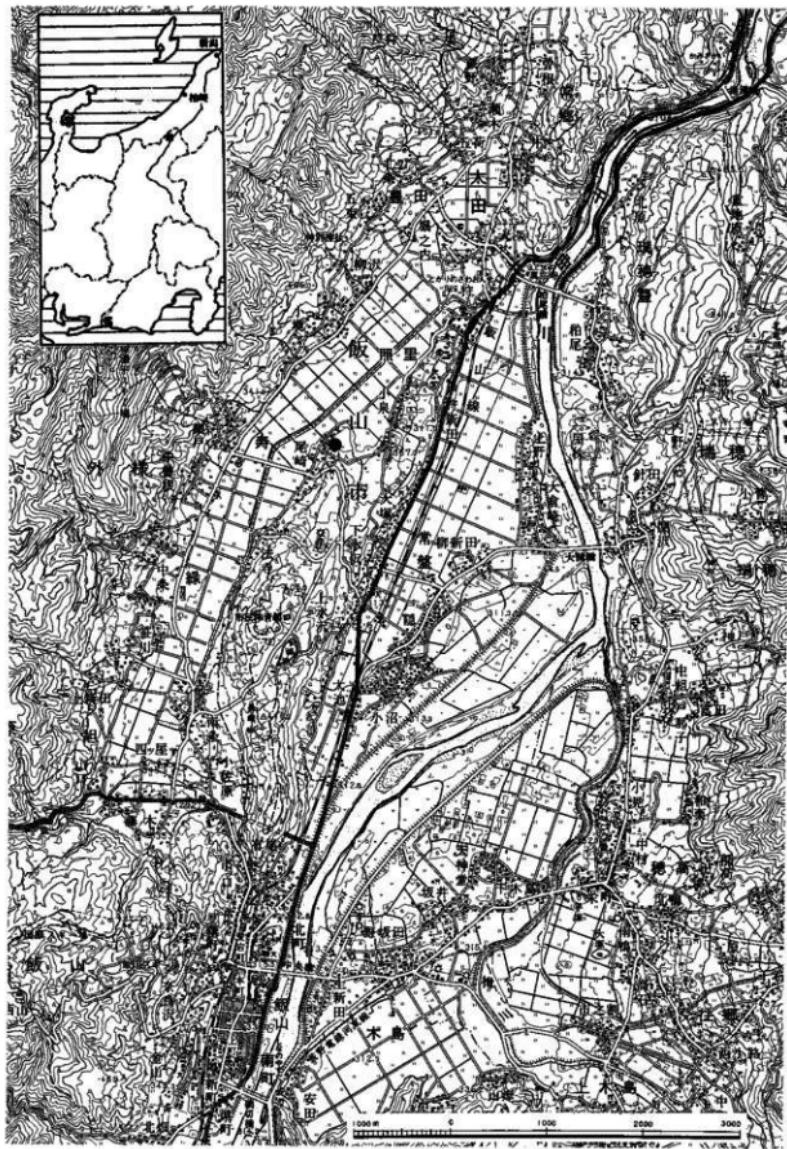


図2 柳町遺跡の位置（1:50,000）

縄文時代になっても、千曲川沿いに分布する遺跡が多い。南原・屋株・大倉崎・有尾・須多ヶ峯遺跡などが著名である。南原では前期諸磯C式期の一群が発掘されている(飯山市教委1994)。また、大倉崎では諸磯B式期後半に比定した良好な土器群を検出している(高橋・中島・金井1976)。有尾遺跡は、有尾式土器の標式遺跡として著名である。須多ヶ峯遺跡は全体が明らかにされていないが、中期前葉に位置付けられる土器がまとまっている(飯山市1993)。

柳町遺跡を中心とした長峰丘陵の北半部には、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺跡が密集していることで知られている。調査された遺跡では、柳町遺跡に隣接する東長峰(24)、小泉(20)、照丘(11)の各遺跡がある。

この丘陵上には弥生時代の遺跡として小泉・尾崎・東長峰・照里・下林などの遺跡が知られている。古くは北沢量平・栗岩英治両氏によって弥生式土器・石器が長峰丘陵の尾崎や法守から採集されていた。藤森栄一氏はこのうちの石器を『千曲川下流長峰・高丘の弥生式石器』と題して報告している(藤森1937)。戦後、飯山北高等学校郷土研究会により次々に発掘調査が実施され、弥生期の住居址も多く発見された(森山 1950、清水 1950、森山 1951、東・清水・森山・寺崎 1951、飯沢 1954)。こうした一連の報告により長峰丘陵上の弥生遺跡が注目されるようになり、宮坂英式氏(宮坂 1954)や桐原健氏(桐原 1955)によってその重要性が指摘された。昭和三十年代にはいって、桐原健氏や高橋桂によって精力的に調査や踏査が行われた。その成果は、柳町遺跡の発掘調査(桐原 1957 1959)、照丘遺跡(高橋1962 1968)などの調査報告で示されている。

近年に至り、開発に伴う緊急発掘調査が増加し、再び柳町遺跡の周辺の発掘調査が行われるようになってきた。昭和62年、農村総合モデル事業に伴う釜淵遺跡の発掘調査では住居址が発見され、岡田山麓に多くの弥生時代遺跡が点在することを改めて証明した。とくに、昭和63年より発掘調査が行われた小泉遺跡では、弥生集落が広範囲に発見されている。また、平成元年に行われた上野遺跡の発掘調査では、弥生時代中期・後期の堅穴住居址が発見されたとともに、平成5年の調査では約40基の木棺墓群が発見されている。数次の発掘調査で、上野遺跡は大規模な弥生集落であることが判明してきた。さらに、照丘遺跡は平成2年に発掘調査が実施され、中期の堅穴住居址群が発見された。

統いて古墳時代の遺跡や古墳も多い。上野遺跡では、前期の住居址が1軒発見され、北陸・新潟系の土器が一括して検出されている。また、方形周溝墓も4基発見されている。柳町遺跡では(21)前期住居址、須多ヶ峯遺跡でも同様に住居址が発見されている。一方、古墳は照里古墳群(53)や大塚古墳(53)、大塚古墳群(55)、上野古墳(58)、有尾古墳(57)があるが、いずれも発掘調査はなされていない。なお、有尾古墳は帆立貝式古墳と考えられてきたが、最近では前方後方墳とする意見が強くなっている(松沢1983)。

奈良・平安時代の遺跡では、各所に遺跡が点在するようになるが、岡峰(2)、上野(15)、北原(40)が特に著名である。平安時代の鍛冶炉を多数検出した北原遺跡は、当時飯山地方が盛んに開拓されていった一端を語る資料として重要である。また、土壙墓(木棺墓)が岡峰、上野、小佐原(44)で発見されており、当時の墓制も明らかになりつつある。

中世では、集落遺跡として釜淵(34)がある。祭祀遺構より永仁四年の木簡が発見されている。また、城館跡としては尾崎館(28)、大倉崎館(59)がある。昭和63年に発掘調査を行った大倉崎館では、火災に遭ったと思われる館内より、青磁・白磁・越前系・珠洲系陶器、瓦器製火炉をはじめとする多くの遺物が発見されている。14世紀後半より15世紀前半の所産と考えられているが、館主については現在のところまだ明らかとなっていない。

以上、旧石器時代から平安時代までを簡単に触れてきた。縄文時代までは千曲川沿いの段丘や丘陵に占

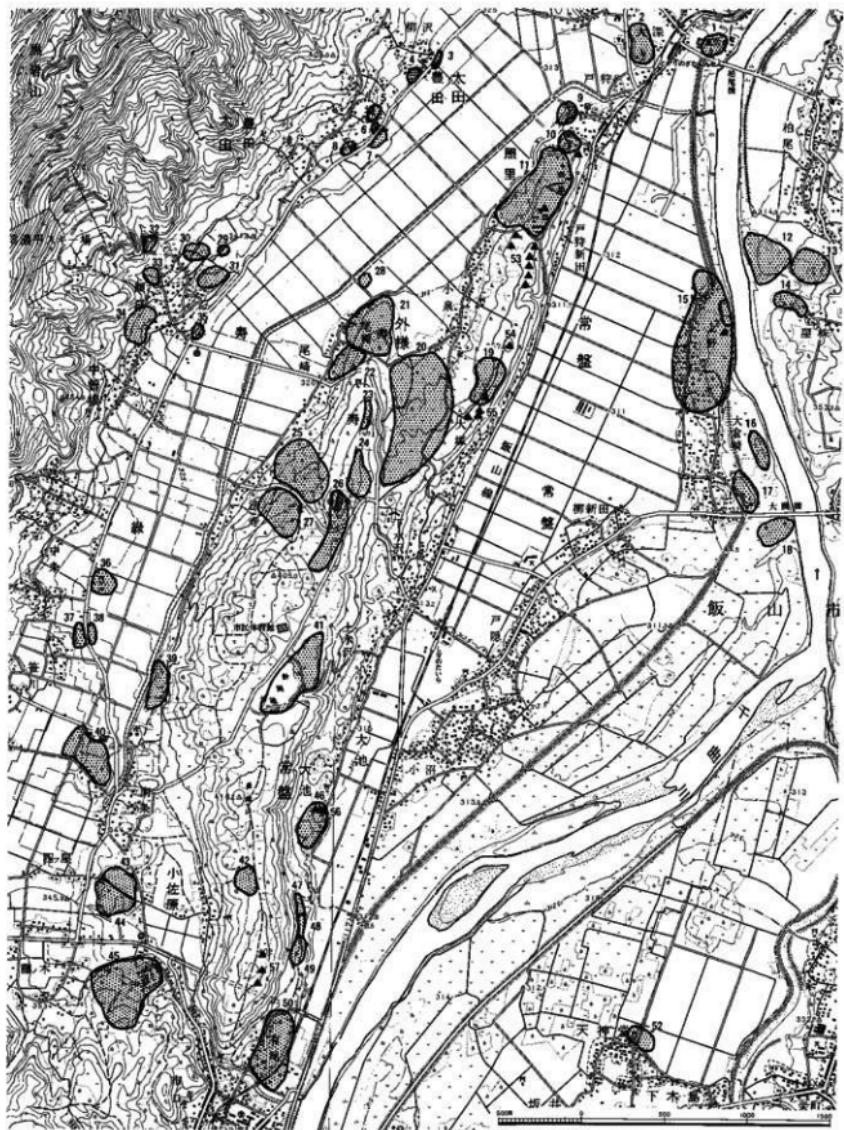


図3 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

換し、以降長峰丘陵や関田山麓、あるいは湧水帯の認められる上野の丘陵を中心として、低湿地に接した地域に占拠するようになる。このことは、飯山盆地が開拓されていった第一波は弥生時代中期後半に始まったが、極めて限定された区域にとどまった。飯山盆地が真に開拓されていったのは、平安時代に入って漸く広い区域が開拓されていったことを伺わせるのである。

引用・参考文献

- 飯沢澄男 1954 「長峰第12号住居埋蔵文化財発見届出書」
- 飯山市 1993 『飯山市誌』歴史編上巻
- 飯山市教育委員会 1989 『国道117号線小沼湯淹バイパス関係遺跡発掘調査報告書I』飯山市埋蔵文化財調査報告第19集
- 飯山市教育委員会 1990 『国道117号線小沼湯淹バイパス関係遺跡発掘調査報告書II』飯山市埋蔵文化財調査報告第21集
- 飯山市教育委員会 1994 『南原・深沢遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告 第37集
- 飯山市教育委員会 1988 『釜淵・北顧戸遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第16集
- 飯山市教育委員会 1991 『小佐原遺跡・関沢遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第25集
- 飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第14集
- 飯山市教育委員会 1980 『北原遺跡調査報告書』 飯山市埋蔵文化財調査報告第4集
- 桐原健 1955 「長峰尾崎遺跡の重要性」 若木考古38・39合併号
- 桐原健 1957 「北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報」 信濃9-12
- 桐原健 1959 「北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡」 考古学雑誌48-3
- 清水亨 1950 『外様村尾崎東長峰発掘調査報告(二)』 下水内郡遺跡発掘調査報告書
- 高橋桂 1962 『飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について』 信濃14-11
- 高橋桂 1968 『長野県飯山市照里環状周溝遺跡調査略報』 信濃20-4
- 高橋桂・中島庄一・金井正三 1976 『北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告』 信濃28-4
- 東道雄・清水亨・森山茂夫・寺崎昭夫 1951 『下水内郡外様村東長峰遺跡3・4・5・6・7号住居址』 下水内郡遺跡調査報告2
- 藤森栄一 1937 『千曲川下流長峰、高丘の弥生式石器』 考古学8-8
- 松沢芳弘 1983 『飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題』 信濃35-3
- 宮坂英式 1955 『長野県下水内郡長峰遺跡』 日本考古学年報3
- 森山茂夫 1950 『外様村尾崎東長峰発掘調査報告(一)』 下水内郡遺跡発掘調査報告書
- 森山茂夫 1951 『外様村尾崎長峰遺跡第7号住居址』 下水内会会報

2 柳町遺跡の調査概要

A 過去の調査

柳町遺跡調査の経緯については桐原健氏により、本書第6章に『回想・柳町遺跡の調査』と題して掲載されているので、ここでは簡単に触れる事とする。

柳町遺跡が初めて発掘調査がなされたのは、昭和26年に付近の外様中学校生徒が主体となって行ったものであるらしい。この時発見された長峰8・9号住居址は、その後東長峰遺跡の住居址番号から除外して柳町1・2号址と桐原健氏によって変更された。ただし、この時の調査成果は報告されなかったために、桐原氏も当時の関係者からの聞き取りによる造構報告と中学校に保管されていた2号住居址の資料を図化しての報告にとどまっている（桐原 1958）。

その後、昭和32年に林檎植栽時に遺物が検出されたことを契機として、桐原氏等によって発掘調査が行われた。地点は大字寿字柳町354・357番地である（図4）。この時に4軒の竪穴住居址が発見され、これを3～6号住居址とした。桐原氏は3～6号住居址出土土器と2号住居址出土土器を分類して柳町一類、二類土器を設定した。そして、このうち2～4号出土土器で構成される柳町二類土器をもって「柳町式土器」を設定したのである。

柳町遺跡の調査地については、最近まで確実な場所が判明していなかった。今回の調査を報告するにあたり、桐原氏より当時の実測図が見つかって送付されてきたので、かなりの精度で調査地点を特定することができた。その結果、私たちが以前より遺跡の中心地と推定していた場所よりかなり西側の集落内にかかる標高の低い場所であることが明らかとなった。私たちは、今回の調査の経過となつた農道より東側の高位を想定していたのである。ただし、推定していた地点にもかなりの土器の散布を認めるので、実際に柳町遺跡の範囲がより大きなものとなつたことといえる。現在の推定範囲はおよそ100,000m²と考えられる。

B 調査概要

調査対象地は、およそ南北に続く長峰丘陵の西側で、稜線から外様盆地へ緩やかに傾斜している斜面の中ほどに位置し、稜線にはほぼ平行して計画された開発事業県農村総合モデル事業（農道拡幅）にともなう、幅5～6m、総延長約500mで、そのうち道路等で破壊されているところを調査対象から除いたので、面積は約1500m²である。現況は農道（幅約2m）及びその両側の畠地である。

次に各区毎の概要を記してみたい。

I区 当区の調査地は、A・B1～6、G～J-22～30、I～K-34～41の3ブロックに分かれるが、他は道路などによって壊滅している。

A・B-1～6においては、平安時代の土坑（SK1）1基が検出され、土坑内より环が2個体出土している。その他土器片が散在して出土しているが、他に特筆すべき造構は検出されなかつた。これより北7～21にかけては落ち込んで沢があり、この間は住宅及び坪庭作りによって、大きく削り取られているため調査しないこととした。

G～J-22～30は、沢を越え丘になる所で、西側斜面の下方は農道によって削り取られている。弥生時代の住居址1軒、平安時代の住居址2軒、溝址4基が検出された。出土遺物は、錢貨・陶製の紡錘車・鉄製の麻皮削器（SI7）などがある。特記すべきは、1号溝址で、幅35～40cm・深さ60cm・長さおよそ9mの中に完形土器8個体、その外10余個体の土器が出土した。古墳時代の造構であるが性格は不明である。



図4 調査区および周辺地形図 (1:2,000)
(図中 昭和32年調査地は相原健氏測量図をもとに位置を示したものである)

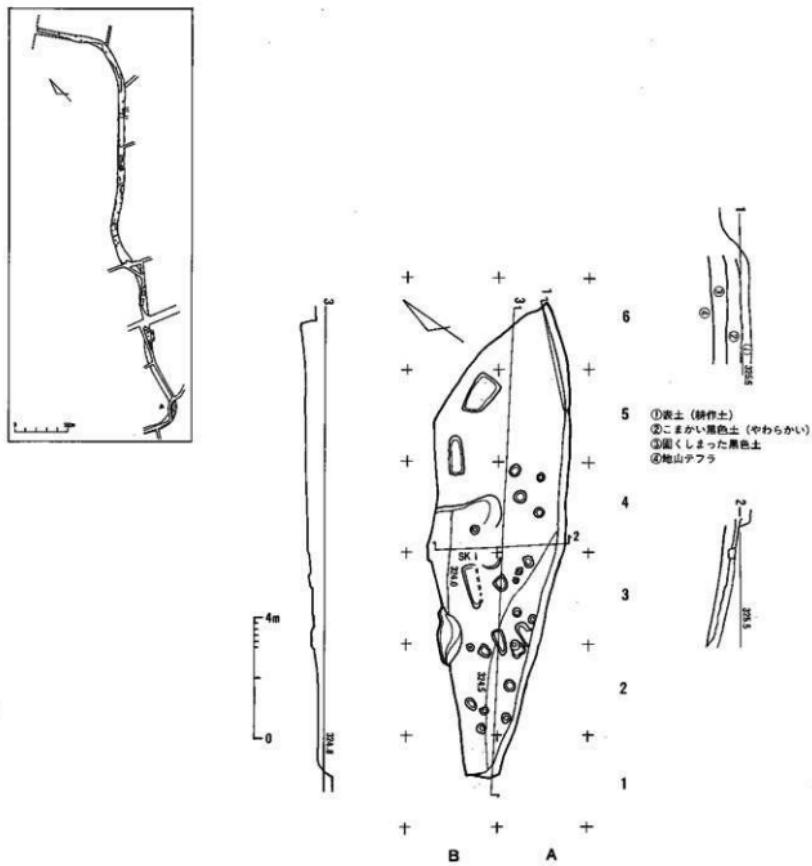


図5 I区遺構分布図(1) (1 : 160)

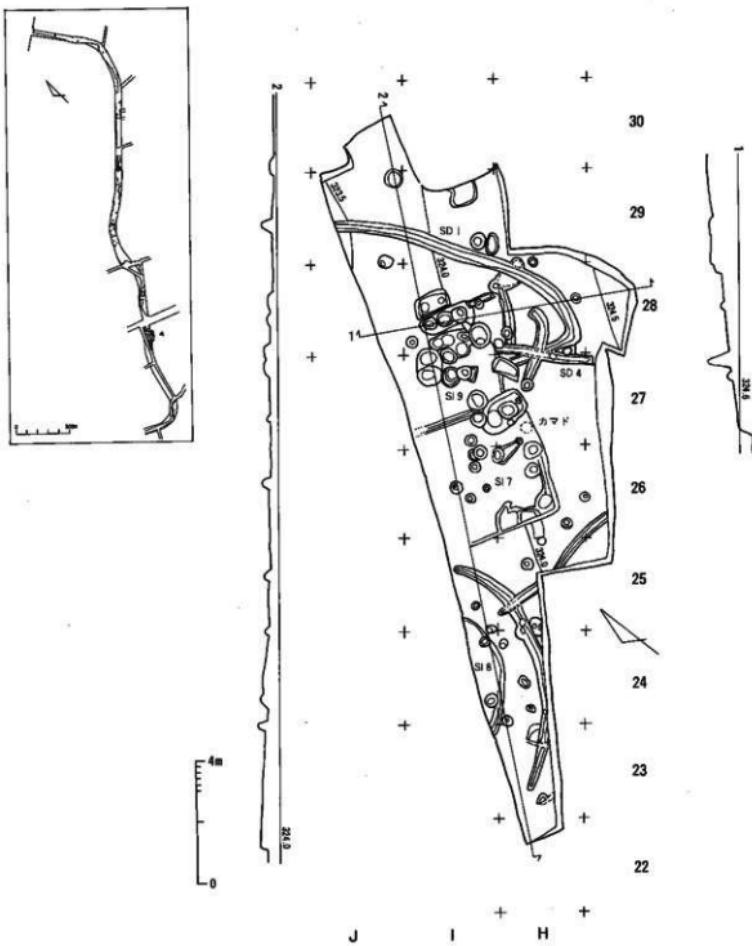


図6 I区構造分布図(2) (1:160)

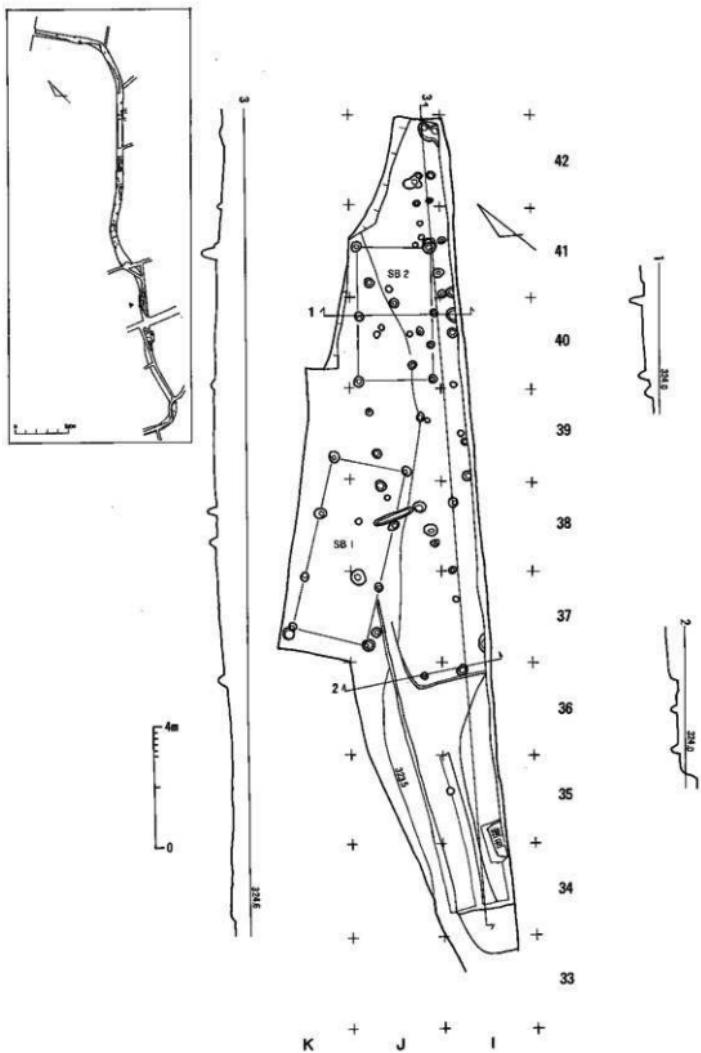


图 7 I 区遗構分布圖(3) (1 : 160)

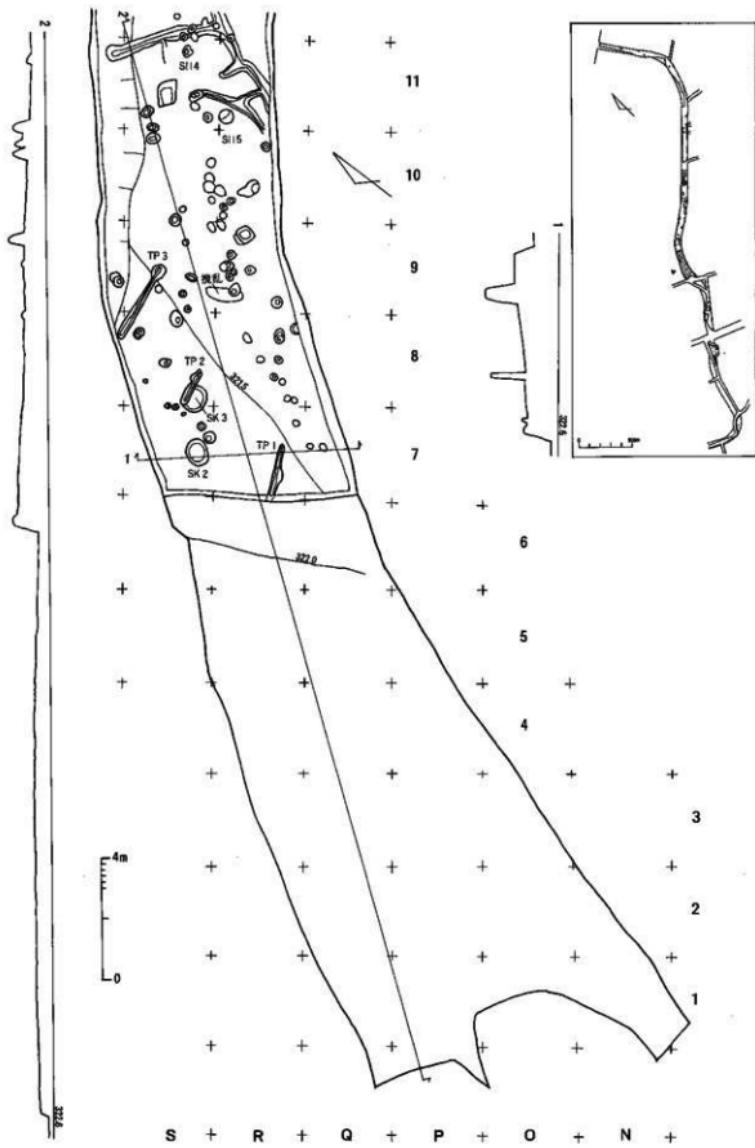


图8 II区造構分布図(1) (1 : 160)

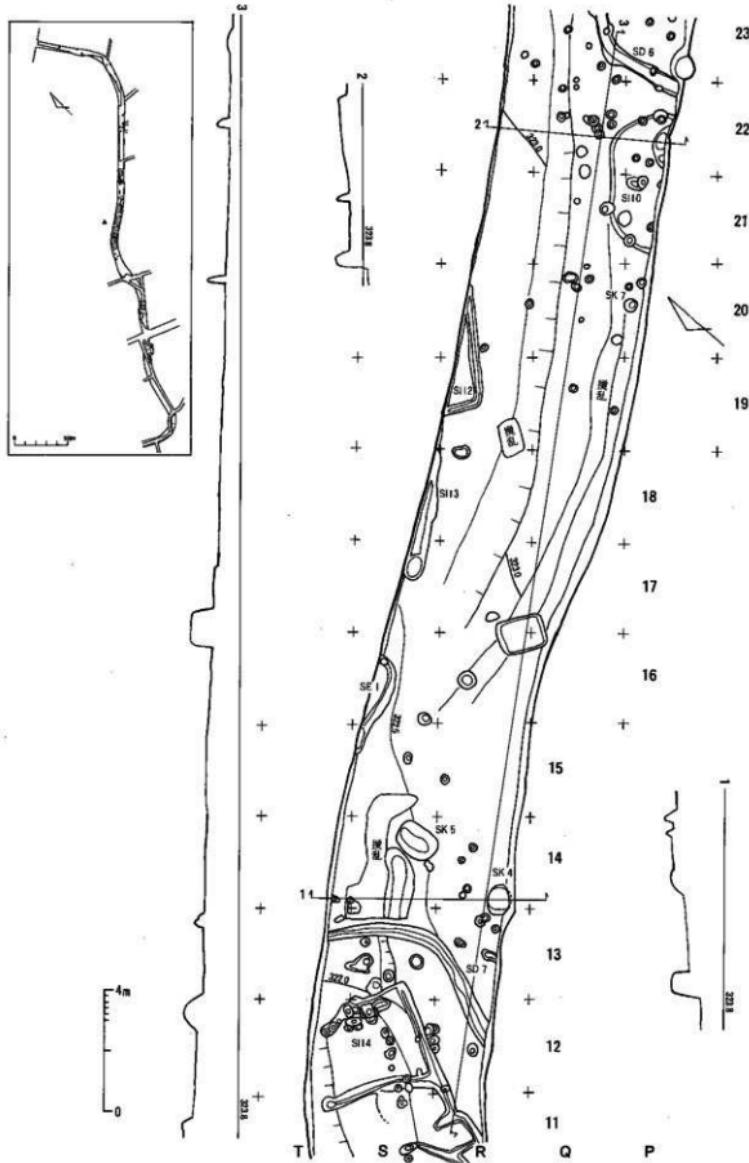


図9 II区造構分布図(2) (1 : 160)

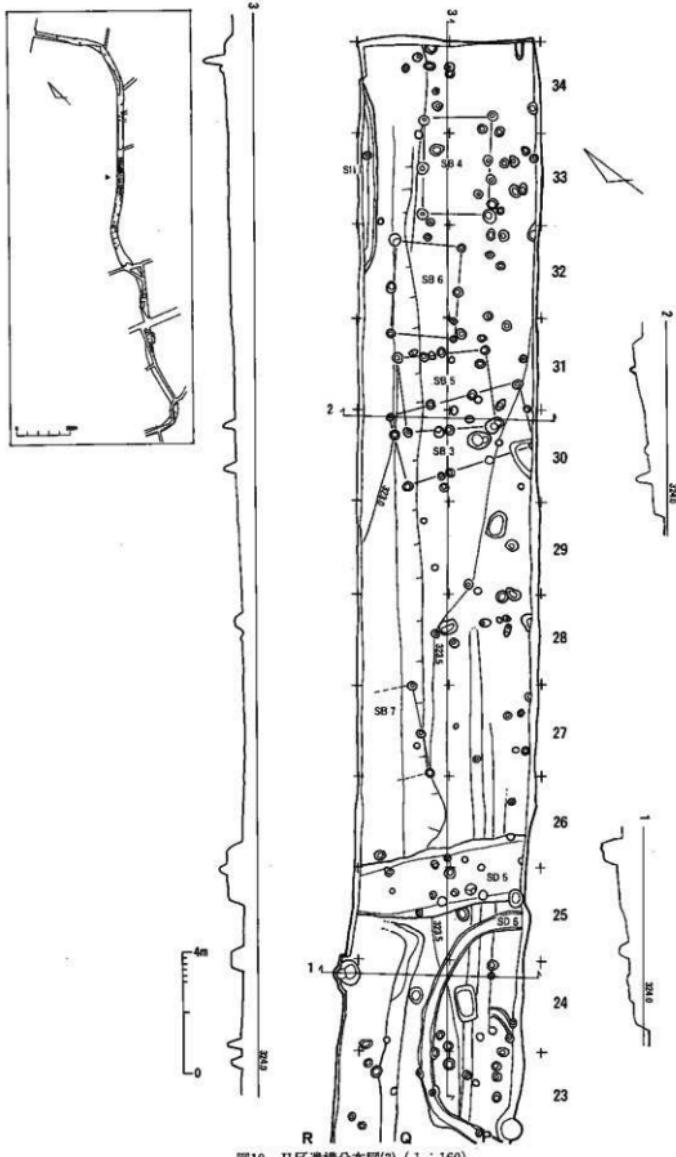


図10 II区遺構分布図(3) (1 : 160)

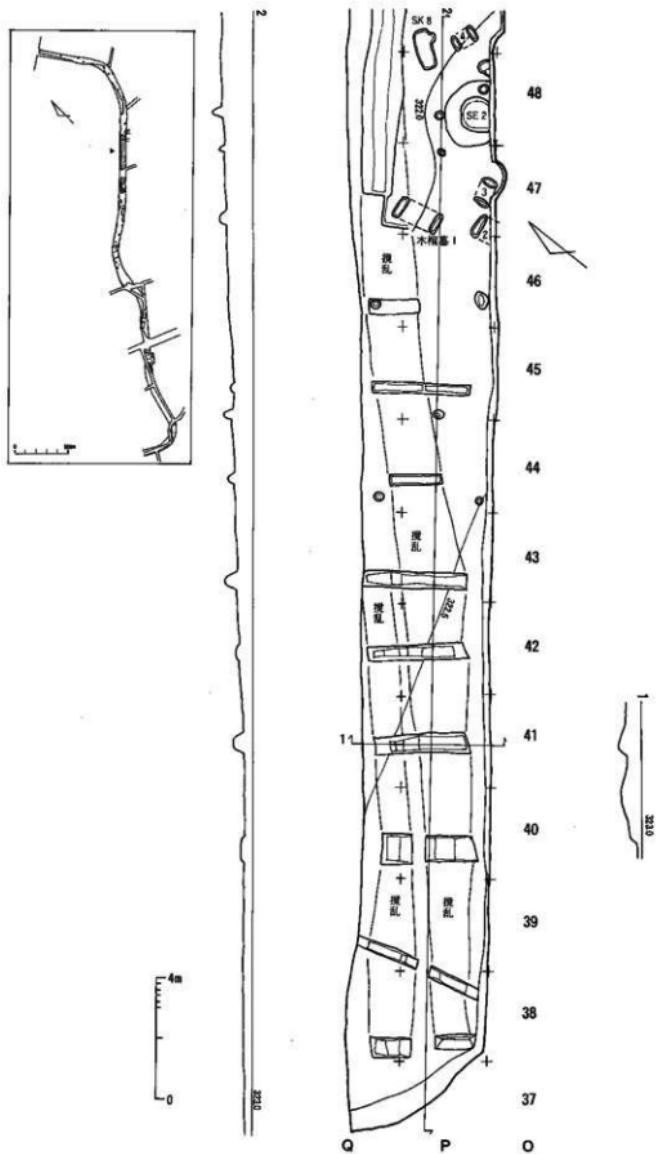


图11 II区遗构分布图(3) (1:160)

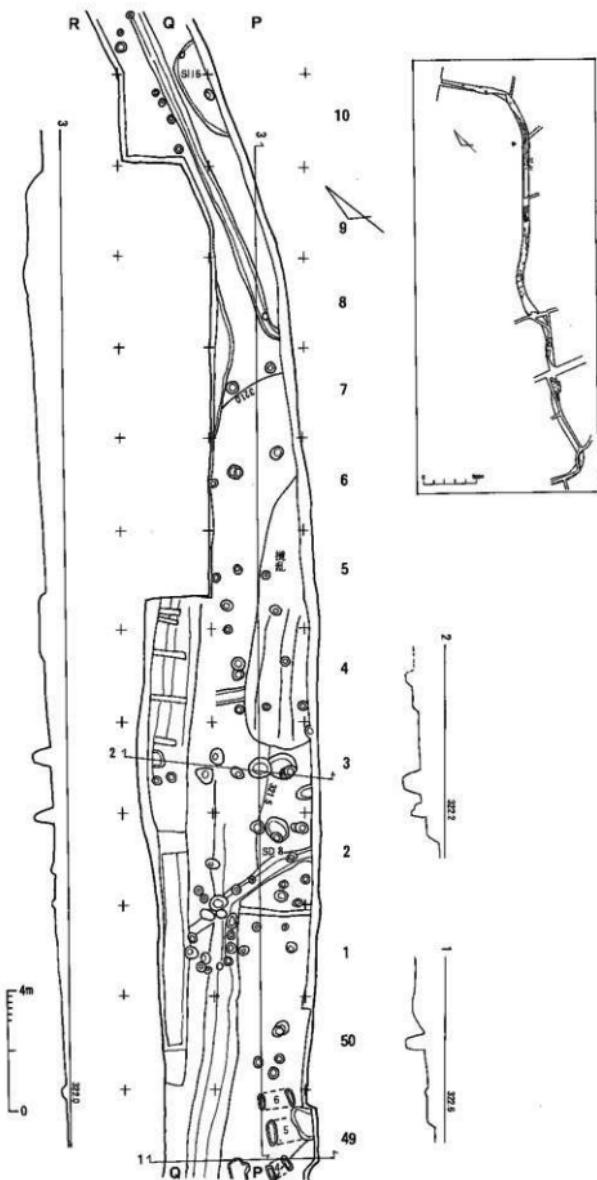


図12 II・III区造構分布図(1) (1 : 160)

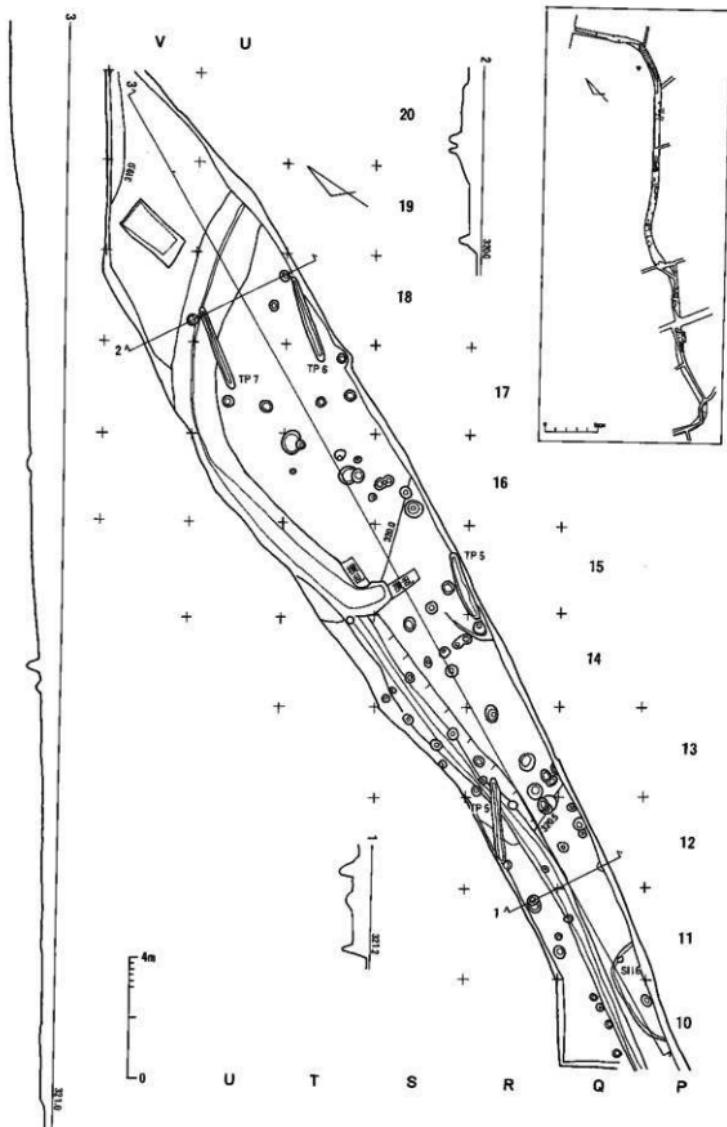


図13 III区造林分布図(2) (1 : 160)

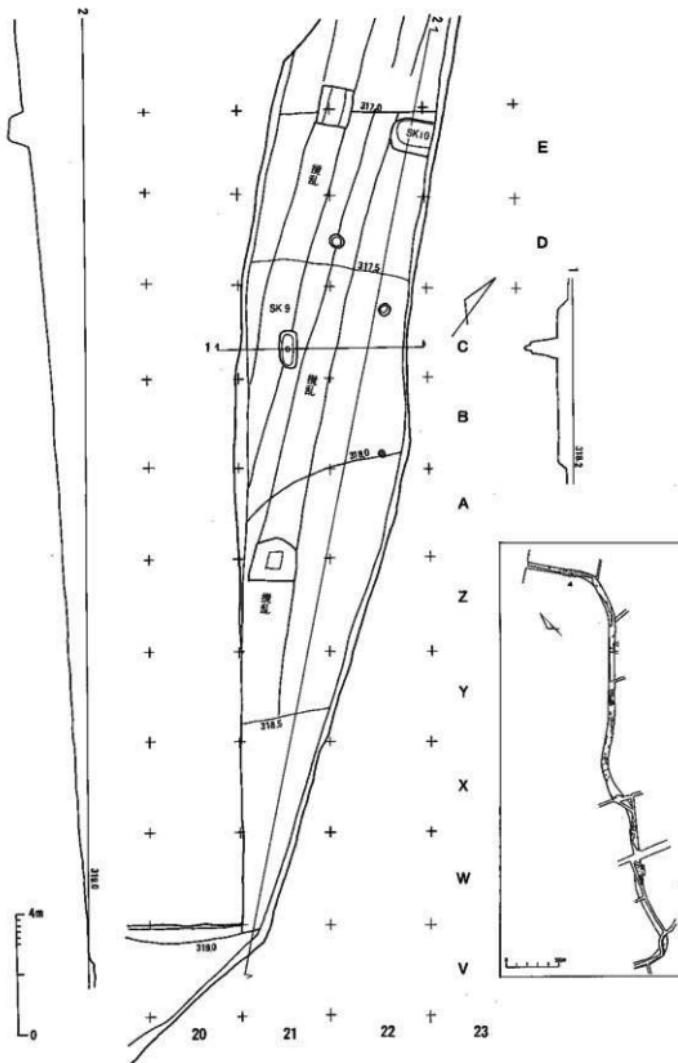
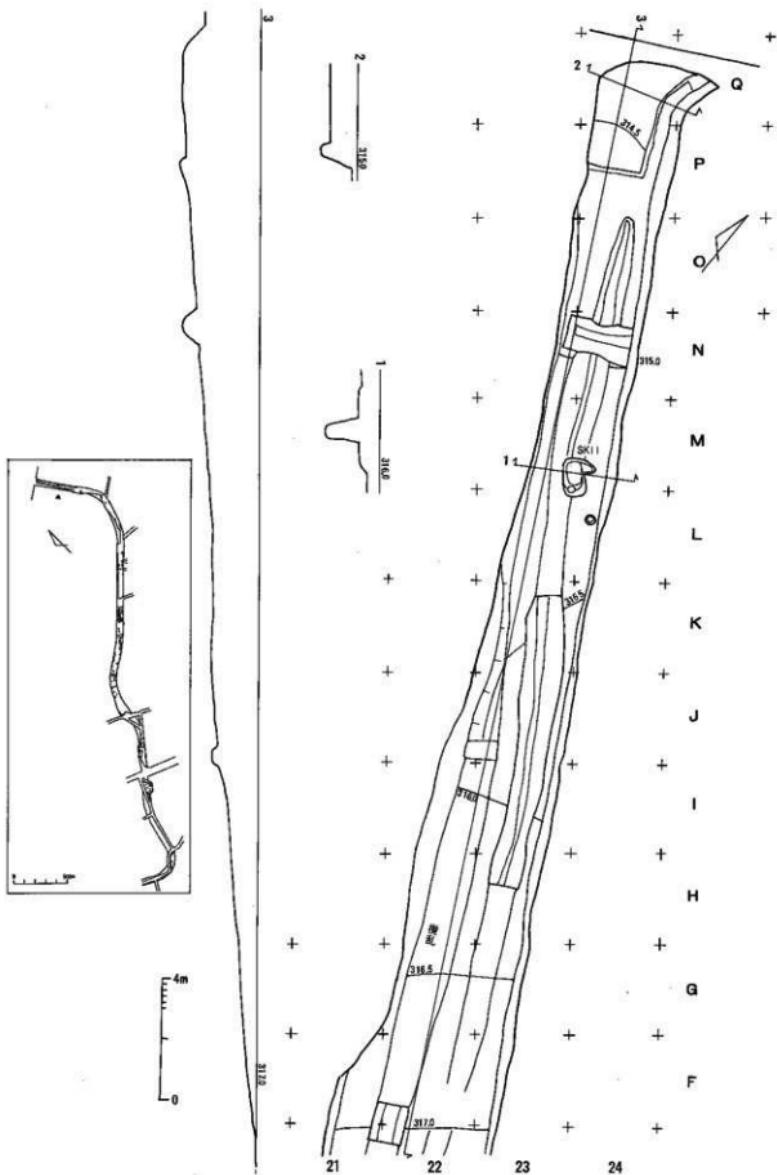


図14 III区遺構分布図(3) (1 : 160)



第15 四区造構分布図(4) (1 : 160)

H～J-31～33の間は道路によって削除されている。

I～K-34～42は、G～J-22～30と同じ丘の北方に位置するが、次の沢の手前に位置する所である。ここでは、掘立柱建物が2棟検出された（SB1・2）。I区I～J-34～41からII区P・Q-7までの間は沢部分で、深い落ち込みを見せてている。畑地整備・道路・井戸・水道管理設などで破壊されている。

II区 長峰丘陵が尾崎と小泉の間で2つに分かれ、尾崎側は終わっているが、その尾崎側の最後の部分にあたる丘である。南側の沢部分を除いて表土が浅く、また農道で破壊されていた（P・Q-37～46）が、Q・R-7からP・Q-50までの区間ににおいて、土坑7基（SK2～8）・豊穴住居址6軒（SI10～15）・溝址3基（SD5～7）・掘立柱建物5棟（SB3～7）・溝状土坑3基（TP1～3）・井戸址2基（SE1～2）・木棺墓6基（SKB1～6）が、検出された。

III区 II区の丘からさらに北へ進み途中から西にカーブして、外様平の低湿地へ下る部分であり、検出された遺構は土坑3基（SK9～11）・豊穴住居址1軒（SI16）・溝址1基（SD8）・溝状土坑4基（TP4～9）がある。

C 層序 (図16)

柳町遺跡の基本層序については、図16に示したが、これは谷地形の場所であったために層厚があるのであって、調査区全体の傾向では極めて薄い部分もあり、一様ではなかった。これは、調査区が道路とその周辺の畑であったため、道路部分においては大半の地区でV層上面まで削土されていた。畑の部分については、包含層が残っている地点もあったが、耕作土20～30cmでV層の上部となるのが一般的であった。以下に各地区的層序の概要を述べる。

I区 本地区は、平安時代の土壙墓（SK1）が出土した地点と1号溝址に代表される地点がある。いずれも約25cmの黒色土があり、比較的の包含層は残っていた。遺構確認は、V層テフラ層の上面である。平安時代の遺物は耕作土直下の黒色土である。

II区 図示した谷状地に14・15住居址や土坑があり、IV層中で遺構確認をした。北に進むにしたがって丘状となり、V層上部まで破壊されていた。

III区 II区からの続きの丘部分については、大半が道路敷きとも重なりV層上部まで破壊されている。畑の部分についても、耕作土20cmの下位がV層上面であった。III区北側の斜面においても同様であった。

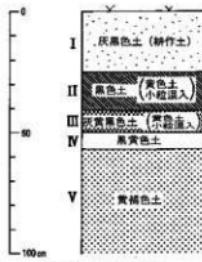


図16 土層模式図

第3章 弥生・古墳時代の遺構と遺物

1 遺構

弥生時代および古墳時代に所属する遺構は、竪穴住居址7軒（SI8・10～13・15）、溝址8基、掘立柱建物址6棟等である。ただし、所属時期が不明な遺構が多く、本稿では当該時期に含めたが、平安時代の遺構も含まれるものも存在するかもしれない。土坑については所属時期が不明なものについては一括して平安時代に含めた。なおSK7は弥生時代の土坑であるが、便宜的に平安時代の項で説明している。また、SK9～SK11は明らかに縄文時代の土坑と思われるので、第5章で触れている。

A 竪穴住居址

8号竪穴住居址（図17-SI8）

I区H・I-23～26に位置する。東側は調査対象外となり、西側は道路切通しで破壊されているため、一部のみの検出となっている。形態は円形プランと思われる。溝が西側を取り巻くようにめぐるが、これは斜面上部に構築された排水溝と思われる。内側に掘り込まれた円形プランが住居址と考えられる。周溝が認められるが、浅いために検出できない部分もある。床面は堅緻である。床面より弥生中期土器が潰れた状態で出土しており、本住居址の所属時期も中期と考えられる。

10号竪穴住居址（図17-SI10）

II区P・Q-21・22区に位置する。東側が調査区外となるため全形は不明である。プランは隅丸長方形プランないし方形プランを呈するものと思われる。焼土は西隅にあるが、炉とするには端すぎている。弥生後期の土器が出土しており、本住居址の所属時期も後期としてよいだろう。

11号竪穴住居址（図17-SI11）

II区Q-32～34に位置する。大半が調査区外に伸びるため詳細は不明である。形態は隅丸長方形プランを呈するものと思われ、壁下には周溝がめぐる。床面はやや軟弱である。本住居址からは遺物の出土はないが、形態から古墳時代として考えておきたい。

12号竪穴住居址（図17-SI12）

II区S-19・20に位置する。調査区外に伸びているため南側コーナーの一部のみの検出となっている。形態は長方形ないし方形プランであろうと思われる。壁下を周溝がめぐる。出土遺物はないが、SI11号住居址と類似しており、古墳時代の住居址としておきたい。

13号竪穴住居址（図17-SI13）

SI12号住居址の西側、II区S-17・18に位置する。わずかな部分のみの検出で、大半が調査区外であるため、形態等については不明である。南側コーナーに土坑がある以外詳細は不明である。

15号竪穴住居址（図18-SI15）

II区R-11に位置する。平安時代住居址等が付近にあり、形態は不明である。東側のコーナーのみが明らかであるので、炉等は検出はされなかつたが住居址として報告する。

B 溝 址

1号溝址（図19-SD1）

I区H～I-27～29において検出された。東南側は調査対象地区外であったが、重要な遺構であると思

われたため、地権者の服部乙彦氏に承諾を得て拡張した（Hライン）。

溝は確認し得た全長約11m、幅35~45cm、深さ75cmを測る。形状は、確認し得た部分ではやや湾曲しながら伸びた溝がほぼ直角に曲がって150cm程で収束している。北側が道路の切通しによってカッティングされているため、どのくらい伸びていたか不明である。もう一方の端部は、平安時代の遺構等によって破壊されているが、溝自体は切れるらしい。

遺物は、壺・台付甕・甕・鉢・高杯が出土している。溝の中へ無作意に入れたと思われるような出土状態であり、割れて飛び散ったような状態で出土したものもある。なお、溝の幅が狭いため、底面までつかりに壁によって浮いたような状態で出土した遺物も多く認められる。

3号溝址（図20-SD 3）

I区G・H-25・26に位置する。中間が調査できなかったために同一の溝址であるのか不明である。なお、西側のSI2を切って伸びているが中途で切れている。

出土遺物はない。

4号溝址（図20-SD 4）

I区H-27・28に位置する。SD 1と切りあっているが、新旧関係は不明である。

出土遺物はない。

5号溝址（図20-SD 5）

II区Q・P-25・26に位置する。斜面に直行する溝で、幅1.8~2.2m、深さは50cmを測る。調査区の幅が限られているため、どのくらい続いているか不明であるが、幅から考えて周溝墓等の遺構ではなさそうである。底面は平坦で、浅いピットがいくつか構築されている。出土遺物はなく、所属時期については不明である。

6号溝址（図21-SD 6）

II区P・Q-23~25に位置する。円形周溝状の形態で、約半分を検出した。幅は約40cm、深さも40cmを測る。周溝の削まれた内部にもピット・土坑が検出されているが、本遺構に伴うものであるか不明である。

遺物は、周溝内より壺・甕・鉢・器台などが破損した状態で出土している。遺物から古墳時代前期初頭に位置付けられる。

7号溝址（図20-SD 7）

II区R-T-12・13に位置する。平安時代の8号竪穴住居址の東側に構築されている。確認された範囲では「く」の字状に曲がる箇所があり、全体は不明であるが1号溝址に似る。幅は約60cm、深さ50cmを測るが、北側は道路敷で削土されているために浅い。

遺物は南側の深いところより古墳時代前期の器台等が出土しているので、当該時期に位置付けられる。

8号溝址（図22-SD 8）

III区P・Q-1・2に位置する。検出された範囲では、やや湾曲する部分があるが全体的には直線的な溝である。幅は40cm、深さ20cmと浅いが、これは耕作や道路敷のため破壊されているためである。

遺物は完全な形の蓋や高杯の坏部が出土している。古墳時代前期に位置付けられる。

C 木棺墓

今回の調査で検出された木棺墓は、木口痕のみであり、遺物の出土も認められなかった。これは、耕作土直下で検出されたとの道路敷であったため多くが破壊されていたためである。遺物はないが、周囲より弥生中期土器片も検出されており、飯山地方で後期に下る木棺墓も検出されていないことから、弥生時代中期の所産と位置付けておきたい。

1号木棺墓（図18-1）

II区P-47に位置する。道路敷であったため北側が削土されている。木口痕は長軸75cm、短軸25cm、深さは22cmを測る。間隔はそれぞれの中心より120cmを測る。方位はN15°Wである。

2号木棺墓（図18-2）

II区P-46・47に位置し、1号木棺墓の南側に近接している。調査区外に延びるため木口痕1本のみの調査にとどまっている。方位はN8°Wである。

3号木棺墓（図18-3）

II区P-47に位置し、2号木棺墓の東側に直行して接している。木口痕の間隔は70cmと狭い。方位はN72°Eである。

4号木棺墓（図18-4）

II区P-49に位置する。木口痕の間隔は約60cmで、3号木棺墓同様に狭い。方位はN62°Wである。

5号木棺墓（図18-5）

II区P-49に位置し、4号木棺墓の北東に近接する。木口痕は西側の1本が明瞭であるが、東側の木口痕は明確でない。方位はN56°Wである。

6号木棺墓（図18-6）

II区P-49に位置し、5号木棺墓の北東に近接して並列する。木口痕の間隔は約100cmで、深さは15cmを測る。方位はN48°Wである。

D 挖立柱建物址

合計6棟検出されているが、所属時期が判明しているものはない。本稿では一括して弥生・古墳時代の項で説明を加えるが、一部に平安時代の掘立柱建物址も存在するかもしれない。

1号掘立柱建物址（図23-SB1）

I区J・K-37~39に位置する。規模は3間×1間で、柱間寸法は5.8×2.5mを測る。桁行の柱間隔は1.8~2.1mである。柱穴の掘り方は円形で、径約30cm、深さは50cmである。弥生時代もしくは古墳時代の掘立柱建物址と思われる。

2号掘立柱建物址（図23-SB2）

I区J-40・41に位置する。規模は2間×1間で、柱間寸法は4.4×2.5mを測る。桁行の柱間隔は2.1~2.3mである。遺物は柱穴より弥生時代中期の遺物が出土している。柱穴の掘り方は円形で、径平均約30cm、深さは最大60cmである。弥生時代もしくは古墳時代の掘立柱建物址と思われる。

3号掘立柱建物址（図23-SB3）

II区Q・P-30・31に位置する。規模は3間×1間で、柱間寸法は4.4×2.4~2.2mを測る。桁行の柱間隔は1.4~1.5mである。出土遺物はない。柱穴の掘り方は円形で、径約30cm、深さは最大50cmである。弥生時代もしくは古墳時代の掘立柱建物址と思われる。

4号掘立柱建物址（図23-SB4）

II区Q・P-33・34に位置する。規模は2間×1間で、柱間寸法は3.1~3.2×2.2mを測る。桁行の柱間隔は1.5~1.8mである。出土遺物はない。柱穴の掘り方は円形で、径約30cm、深さは最大80cmである。弥生時代もしくは古墳時代の掘立柱建物址と思われる。

5号掘立柱建物址（図24-SB5）

II区Q・P-30・31に位置し、3号掘立柱建物址と切り合う。規模は2間×1間で、柱間寸法は2.9×2.5mを測る。桁行の柱間隔は1.32~1.5mである。出土遺物はない。柱穴の掘り方は円形で、径約30cm、深さ

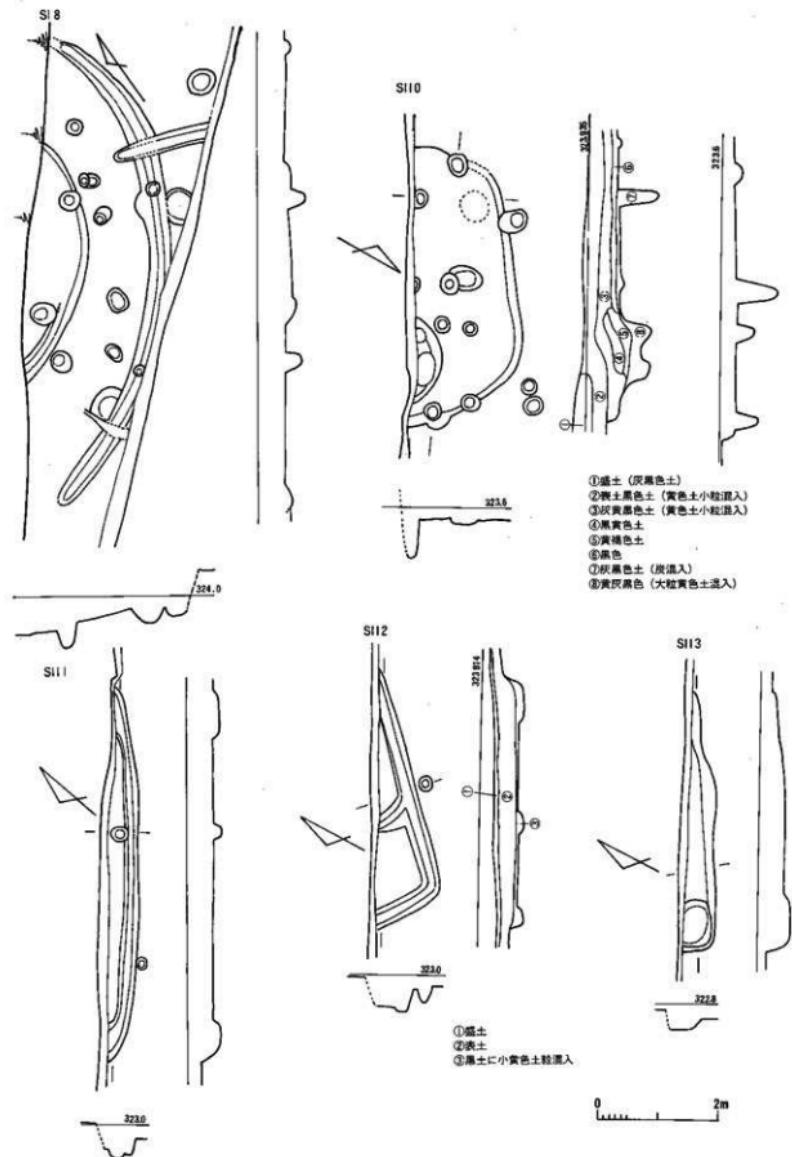


図17 弥生・古墳時代の住居址実測図(1) (1 : 80)

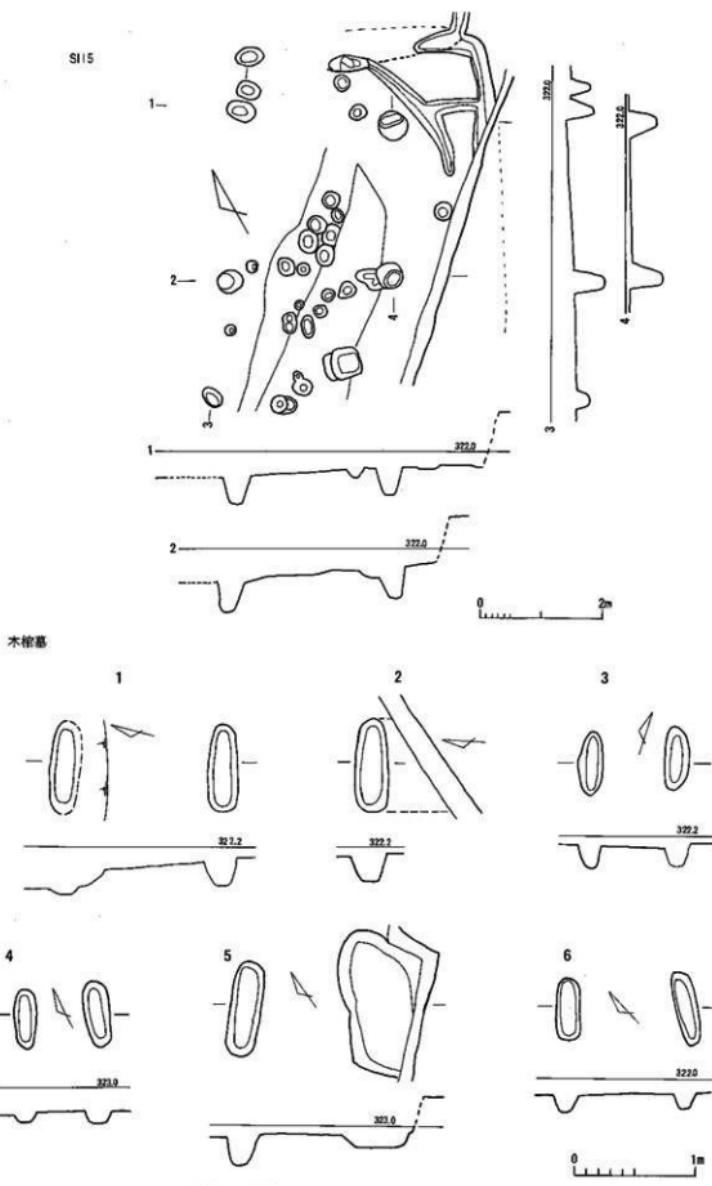


図18 弥生・古墳時代の住居址(2)、木棺墓実測図 (1:80, 1:40)

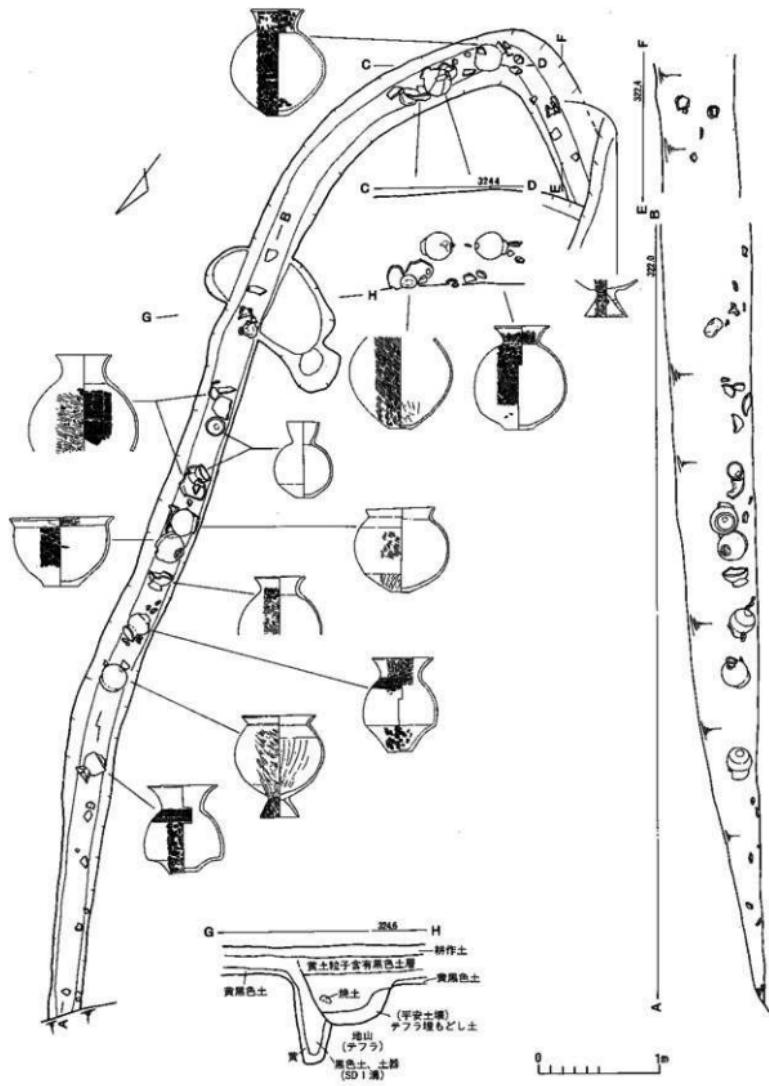


図19 古墳時代の溝跡(1) (1 : 40)

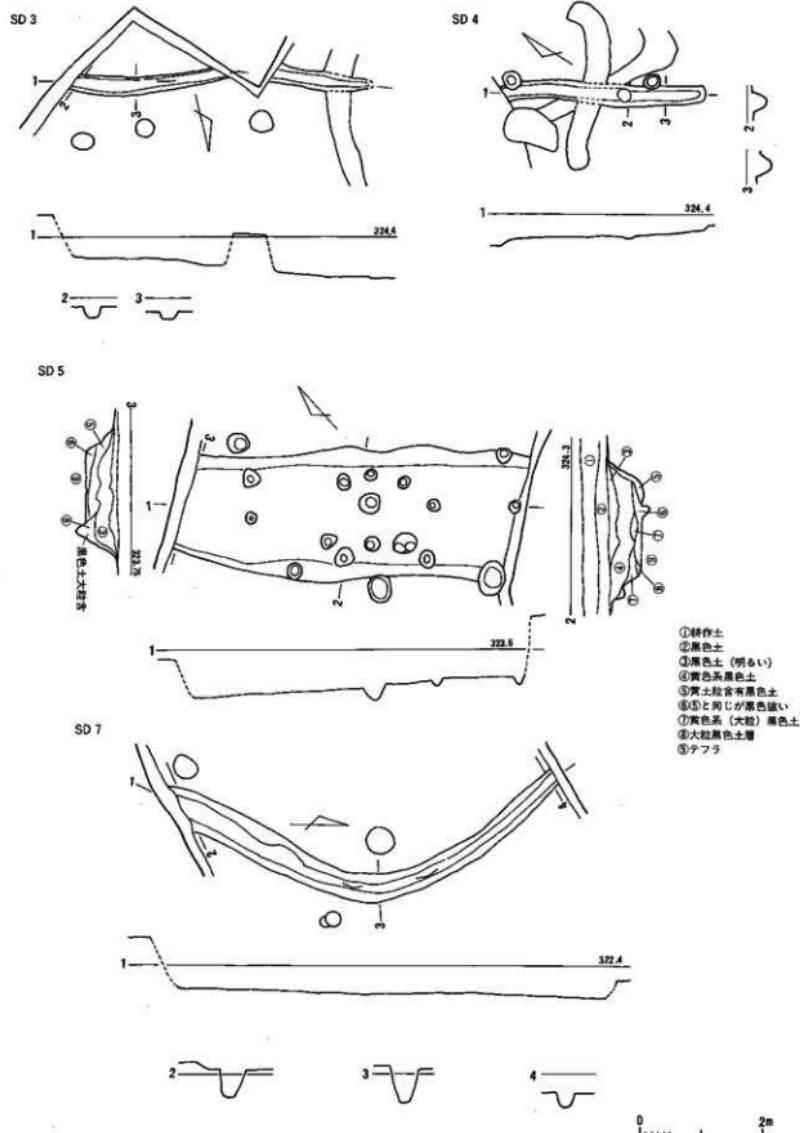


図20 弥生・古墳時代の溝(2) (1 : 80)

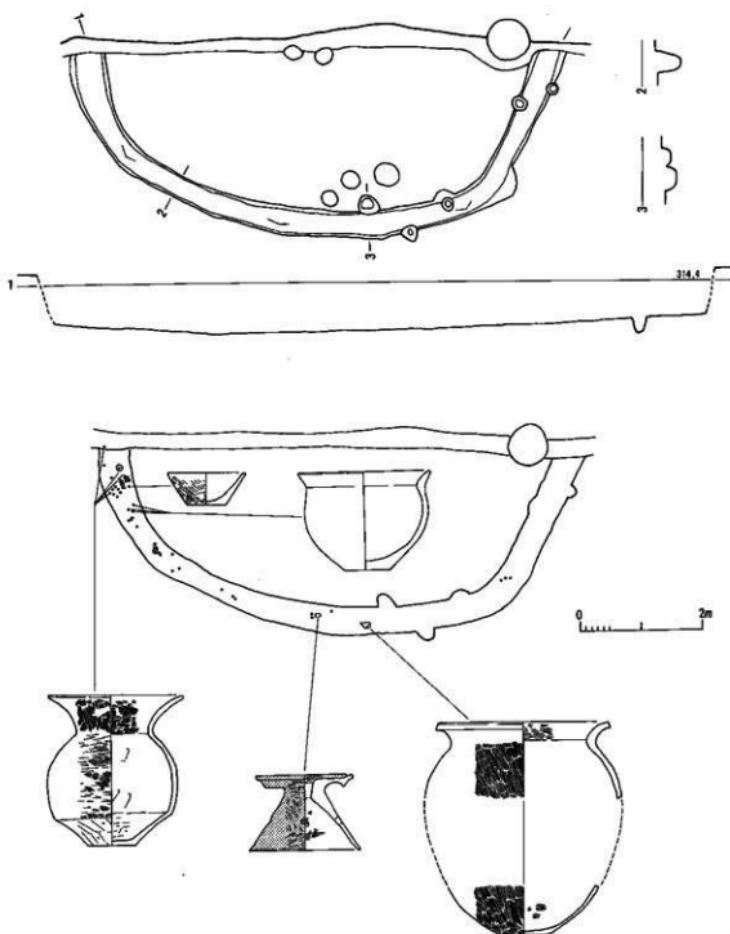


図21 古墳時代の溝跡(3) (1 : 80)

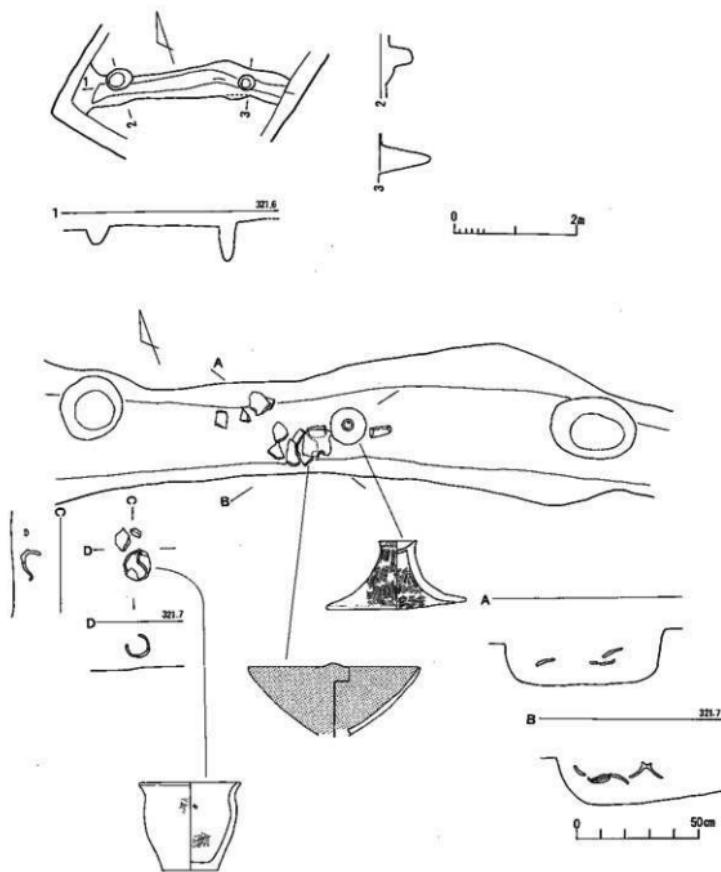
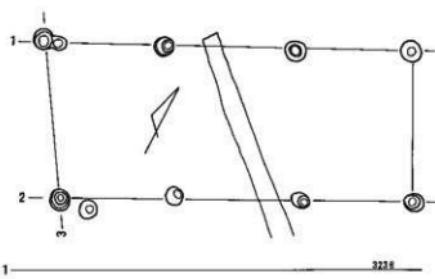


図22 古墳時代の溝跡(4) (1 : 80, 1 : 20)

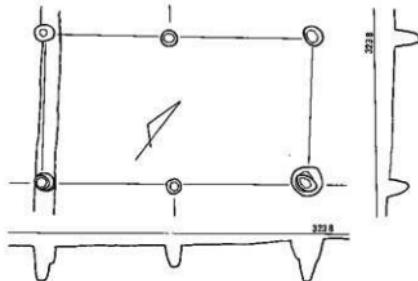
SB 1



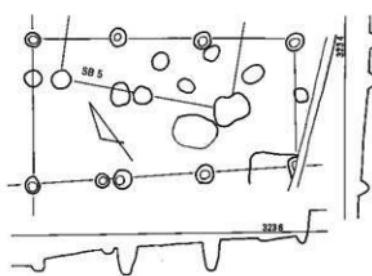
1 323.8

2 323.8

SB 2

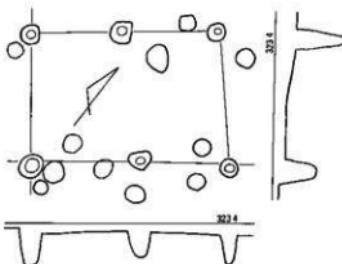
2m
0

SB 3



323.8

SB 4



323.8

図23 弥生・古墳時代の掘立柱建物址(1) (1 : 80)

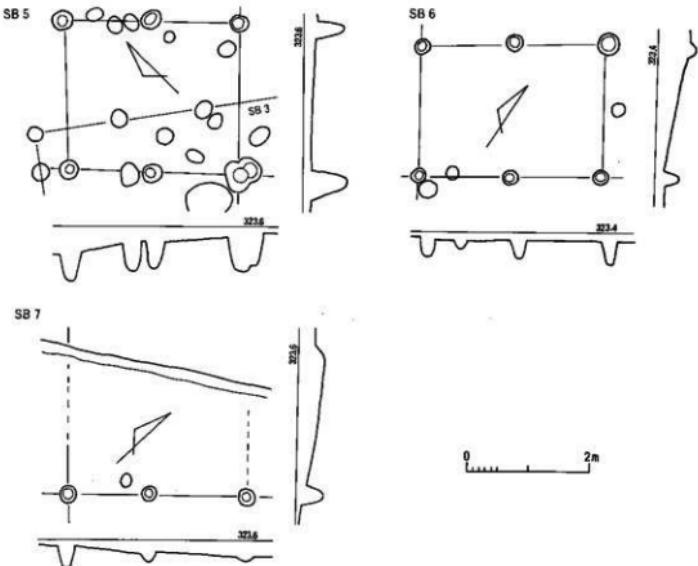


図24 弥生・古墳時代の掘立柱建物址(2) (1 : 80)

は最大60cmである。弥生時代もしくは古墳時代の掘立柱建物址と思われる。

6号掘立柱建物址 (図24-SB 6)

II区Q・P-31・32に位置し、4号掘立柱建物址の南側に並列する。規模は2間×1間で、柱間寸法は3.1×2.3mを測る。桁行の柱間隔は1.5mである。出土遺物はない。柱穴の掘り方は円形で、径約30cm、深さは最大40cmである。弥生時代もしくは古墳時代の掘立柱建物址と思われる。

7号掘立柱建物址 (図24-SB 7)

II区Q・P-31・32に位置する。掘立柱建物址となるかどうか明確ではないが、ここでは掘立柱建物址として報告する。桁行の一部のみの検出で、規模は2間×1間と思われる。桁行の柱間寸法は1.5m・柱間隔は0.7~0.8mである。出土遺物はない。

E 井戸址

1号井戸址 (図25-SE 1)

II区S-15・16に位置する。大半が調査区外に延びているために、形態や規模は不明である。80cmの深さまで調査したが、狭くそれ以上の調査を断念した。

出土遺物はない。

2号井戸址 (図25-SE 2)

II区P-48に位置する。調査区外に一部かかるが、推定220×200cmの椭円形を呈するものと思われる。上部はすり鉢状を呈し、深さ50cmのところより径約80cmの円形で垂直に掘り込まれる。調査は危険のため

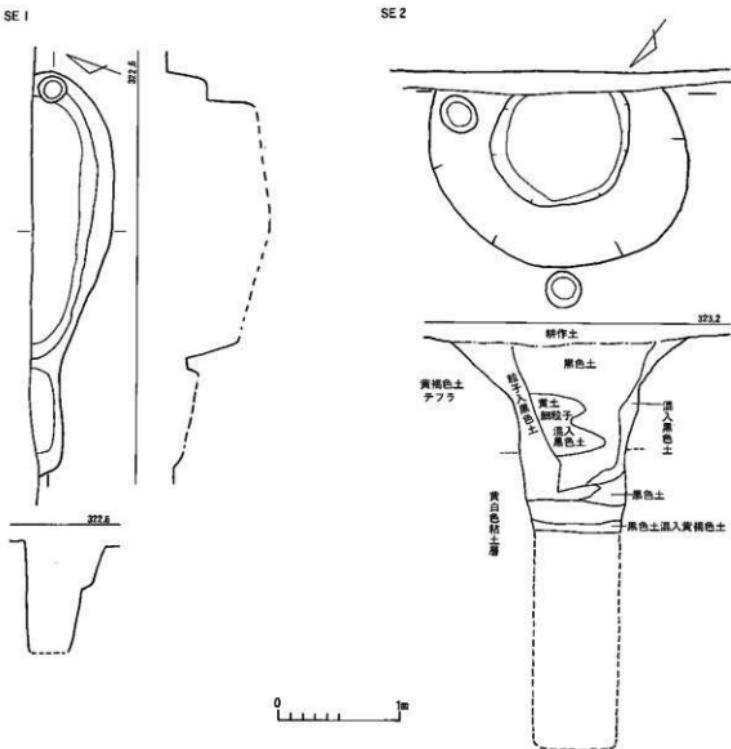


図25 弥生・古墳時代の井戸址 (1 : 40)

160cmの深度で中止したが、ボーリングステッキでは約340cmの深さと推定された。
遺物は弥生式土器小片や土師器片が若干出土している。古墳時代以降と考えられる。

2 遺 物

A 土 器 (図26~30)

(1) 8号竪穴住居址出土土器 (図26-1)

1は後合により完形に復元される甕である。住居址壁に近い床面にて横につぶれた状態で出土したもの。短く外方に屈曲する口縁部と倒卵形の胴部をもち、平底である。内外面をハケで整えたのち、胴上部外面に8本単位の横描波状文と継位横描文とを交互に施し、中位は刺突文がめぐる。小さな波状口縁の口唇部には繩文が施される。胎土に細かい砂粒を含み色調は暗茶色。外表面のところどころに煤の付着がみられる。口径16.5cm、高さ18.1cm。

(2) 10号竪穴住居址出土土器 (図26-2~5)

2は壺の口縁部である。内外面ともに赤彩されている。細かい砂粒を含む胎土で、口径26.2cm。

3は高坏の口縁部である。内外面とも横位ヘラミガキのち赤彩される。内面には炭化物の付着がみられる。砂粒を含む胎土で口径は22.4cm。

4は壺の胴下部~底部である。外面はハケのちていねいなヘラミガキ、内面はハケにて調整される。胎土は砂粒を含み、灰褐色。底部径10.6cm。

5は底部を欠く鉢である。口縁部残存1/4周に直系0.2cmの孔が1対ある。内外面ともにていねいな横位ヘラミガキのち赤彩される。細かい砂粒を含む胎土で口径は13.4cm。

(3) 11号竪穴住居址出土土器 (図27-36・37、図30-122・123)

36は壺の頸部片である。縦方向の横描直線文と懸垂文の組み合わせ。磨滅のため調整は定かでないが細かい砂粒を含む胎土で、色調は褐色。

37は壺の胴部片である。継位の横描直線文と横位の横描波状文が施される。内面ヘラミガキ。胎土は細かい砂粒を含み、素地は褐色だが外表面は黒い。

122は壺の口縁部~胴上部である。口縁部にハケによる斜め文様が施される。内面口縁部のハケは外面胴上部のものより目が荒い。ややきめの荒い砂粒を胎土に含み、外面は灰褐色、内面は暗褐色で外表面には煤がわずかに付着する。推定口径16.3cm。

123は高坏の脚部である。外面ていねいなヘラミガキ、内面は口縁部にナデ痕。細かい砂粒を胎土に含み、灰黒褐色。脚部径11.0cm。

(4) 15号竪穴住居址出土土器 (図26-6・7)

6は甕の口縁部~頸部である。口縁部は横描波状文、頸部は横位横描直線文。内面の調整は定かではない。胎土は細かい砂粒を多く含み、外面は灰褐色、内面は暗灰褐色。口径18.0cm。

7は完形の蓋と思われるもの。下部口縁が受け口状に開く器形。内外面ともていねいなヘラミガキのち赤彩される。砂粒を含む胎土で、底部口径は13.1cm。

(5) 1号清址出土土器 (図29・30-92~107)

甕・甌などの完形品が計8点、1部を欠損するものが計8点、その他土器片が少量出土している。

92~95はわずかに口縁の1部を欠く程度でほぼ完形の状態で出土した壺である。92・93は端部を丸くおさめる単純口縁であるが、94・95は若干壠部を面取る。92・93とも胴下部形態は明瞭な棱を有し、器壁もかなり厚手であるが92に比べ93はかなりいびつな成形。92の頸部文様は9~10本単位の横位横描直線状文が2段施文され、93は8本単位の横位横描直線文と継位の同文とが組み合わされ、さらに小刻みな横位横描直線状文がめぐる。胴下半から底部のみ赤色塗彩される。92は内外面ともハケで口縁部~頸部はさらにしてい

ねいなヘラミガキを施す。93は内外面ともほぼ全体にハケ。94・95は外面ハケ。内面は口縁部などにハケ痕。92・95それぞれ胎土に細かい砂粒を含み、92は全体に茶褐色、93・95は灰褐色、94は淡褐色。さらに全ての外表面に炭化物の付着が確認される。92は口径14.9cm、高さ23.2cm、底部径5.8cm。93は口径9.2cm、高さ21.4cm、底部径7.0cm。94は口径12.7cm、高さ26.4cm、底部径5.0cm。95は口径13.7cm、高さ25.5cm、底部径6.4cm。

96~100は口縁部~頸部あるいは底部等を欠く壺である。96は外面胴部ハケからヘラミガキ、口縁部~頸部は残在部が少なくはっきりしないがヘラミガキされているように思われる。内面は胴部に細かなハケ痕が残るがその他はよくわからない。97は外面の口縁部はナデ、頸部ハケ、胴部はハケからヘラミガキ。内面は全体にナデ。胴部と口縁部をつなぐ痕跡もはっきり残る。98~100は外面ハケ、内面は98の胴下位ハケからヘラケズリ、99は目の細かいハケ、100は目の荒いものから細かいものへと移行するハケ。96~100それぞれ胎土に細かい砂粒を含み、96外面は黄灰褐色、内面は灰褐色。97は内外面とも赤褐色で、98は外面が黒色で内面は白灰色。99は内外面とも赤褐色。96・100の外表面にわずかな炭化物、98・99は全面にわたり炭化物の付着がみられる。96は口径13.5cm、97は口径12.3cm、98は底部径5.2cm。

101は完形の壺である。内外面ともかなり磨滅しており、わずか外面に口縁部にヘラミガキと胴部にハケ痕がのこるのみである。やや粒の荒い砂粒をかなり胎土に含み、色調は全体に淡赤褐色を呈す。口径8.0cm、高さ18.8cm、底部径4.0cm。

102は完形の壺である。口縁部内外面ともナデ。外面胴部はハケで胴下半はケズリと思われる。胎土に砂粒をかなりたくさん含み、素地の色調は黄褐色だが外表面全体に炭化物（煤）が厚く付着するため黒色を呈す。口径17.1cm、高さ20.5cm、底部径4.4cm。

103は完形の台付壺である。口縁部~頸部は内外面ともナデ、外面胴部・脚部はハケだが、胴下部はケズリと思われる。胴部内面はケズリ。胎土には砂粒をかなりたくさん含み素地は灰褐色だが胴部外表面に炭化物（煤）が付着する。口径18.2cm、高さ25.0cm、台部径9.4cm。

104はほぼ完形の鉢である。水平に面取りが施される口縁をもち、口縁部の1ヶ所が半円形に欠損している人が的なものへの可能性もある。底部に「木の葉」文がある。外面胴部はハケ、内面口縁部はハケからヘラミガキ。胎土は砂粒をかなり含み、素地は赤味のある淡褐色だが、外表面と内面胴部に煤の付着がある。

105は壺の口縁部である。段を有す形態。内外面ともナデ。胎土に砂粒を多量に含み、黄褐色。外表面に煤付着。推定口径27.4cm。

106は壺の底部と推定される。底部内面にわずかなハケ痕がのこるが他はよく分からぬ。胎土に砂粒をかなり含み、黄褐色。外面の半分に黒斑が広がる。底部径4.8cm。

107は高壺の壺下部~脚部である。脚部中央1周に4ヶの孔を有する。孔の直径1.0cm。外面脚部の最もくびれた部位のみハケ痕がのこるが、壺下部・脚部はていねいなヘラミガキ。内面は磨滅のためよく分からぬ。胎土に砂粒をかなり含み、淡褐色。脚部外面に赤彩色。脚部径10.6cm。

(6) 2号溝址出土土器 (図27~38~40)

38は壺の口縁部片である。口唇部が折り返され櫛描波状文が施文される。砂粒を胎土に含み、色調は褐色。外面ハケ、内面ハケからヘラミガキ。

39は壺の胴部片である。横位櫛描文がヘラ描直線により画せられる文様。外面ハケからヘラミガキ、内面ハケ。砂粒を含む胎土で外面は赤味がかる褐色、内面は淡褐色。

40は壺の頸部片である。縦文・縦位櫛描直線文・刺突文の組み合わせ。調整は定かでないが、胎土に細かい砂粒を含み、灰白色を呈す。

(7) 4号溝址出土土器 (図26-8、図27-41)

8は甕の口縁部である。口唇部に繩文が施され、口縁部は構描によるゆるやかな波状文が施文される。胎土は細かい砂粒を含み、外面は暗灰色、内面は灰白色。口径18.4cm。

41は壺の口縁部～頸部片である。頸部に横位構描文がめぐる。磨滅が著しいが内外面ともに赤彩の痕跡がある。細かい砂粒をかなり胎土に含み、素地は黄褐色～暗褐色。

(8) 6号溝址出土土器 (図30-108～117)

壺・甕などが完形に復元できるものも含み出土している。

108は接合によりほぼ完形に復元される壺である。大きく聞く口縁部と明瞭な稜を有する胴下部形態。外面口縁部～頸部ハケ、胴部稜線以上はハケからヘラミガキ、稜線以下は底部も含めヘラケズリ。内面は口縁部から裏稜線の辺りまでハケ、それ以下はヘラケズリ。胎土は細かい砂粒をかなり含み、赤褐色。口径14.0cm、高さ15.5cm、底部径4.8cm。

109は接合によりほぼ完形に復元される小型の甕である。内外面ともかなり磨滅はげしく調整は定かでない。ごく細かい砂粒を胎土に含み、白灰褐色～黒灰褐色。口径13.7cm、高さ10.2cm、底部径4.1cm。

110は胴部を欠損する甕。口縁端部は面を有する。外面胴部および底部と内面口縁部はハケ。細かい砂粒をかなり胎土に含み、素地は暗赤褐色だが外表面全体に煤が付着する。口径17.6cm、底部径4.6cm。

111・112は甕の口縁部である。111の端部はシャープな面取りが施され、112の端部も面を有する。111の外面はナデから1部ハケ、内面はナデからていねいなヘラミガキ、112は内外面ともナデからハケ。ともに細かい砂粒を胎土に含み、淡褐色だが112の外表面には煤の付着がみられる。推定口径111は22.0cm、112は17.6cm。

113は鉢の口縁部と思われる。内外面ともていねいなヘラミガキ、細かい砂粒を胎土に含み外面灰黒色、内面は淡褐色。推定口径12.2cm。

114・115は甕の底部である。114の外面はヘラケズリのちヘラミガキ、115は磨滅はげしく定かでない。ともに細かい砂粒を胎土に含み、淡褐色。推定底部径114は12.0cm、115は10.4cm。

116は接合によりほぼ完形に復元される器台である。脚部1周に直径0.8cmの孔が4ヶあけられる。外面全体と器を受ける皿の部分はていねいなヘラミガキのち赤彩される。脚部内面下半にナデ痕、ところどころにハケ痕。胎土はほとんど砂粒を含まず、淡褐色。台部直径10.0cm、脚部径11.5cm、高さ7.8cm。

117は全体の1/3程度を欠損する小型の鉢である。外面にのみハケ痕のこる。細砂を多量に含み、磨滅はげしく全体に灰黒にくすむ。口径8.0cm、高さ3.3cm、底部径3.8cm。

(9) 7号溝址出土土器 (図30-118～120)

118は壺の口縁部である。大きく外反する口縁部とわずかに受け口状に立ち上がる端部形態をもつ。外面は縦位および横位ヘラミガキ、内面は横位ヘラミガキ。わずかだが細かい砂粒を胎土に含み、淡赤褐色。推定口径21.0cm。

119は高環の脚部と思われる。直径0.3cmの孔が1周に3ヶあけられる。内面ハケ痕、外面は磨滅のためよく分からぬ。ごく細かい砂粒を胎土に含み、黄褐色。

120は台付甕の脚部。外面は目の細かいハケ、内面は目の大きいハケ。きめの荒い砂粒を胎土に含み、素地は暗赤褐色だが外表面は灰黒色にくすむ。脚部直径8.0cm。

(10) 8号溝址出土土器 (図26-9・10、図27-42)

9は高環の坏部である。わずかに丸味を帯びた体部をもち、口唇部に1ヶ所突起が見られるが欠損部があるため1周に1ヶ所のみかどうかはわからない。内外面とも細かな横位ヘラミガキのち赤彩される。細かい砂粒を含む胎土で、坏部口径17.6cm。

10は完形の蓋である。頂部につまみ状のくびれ、下に向かって笠状に開く器形である。内外面ともハケ調整。胎土は細かい砂粒を含み、全体に灰褐色だが底口縁部は黒ずむ。頂部直径4.0cm、底部口径14.4cm。

42は壺の口縁部片であろう。口唇部に繩文・刻み文が施される。内外面ともヘラミガキ調整と思われる。胎土は砂粒を含み、外面は赤褐色、内面は黒褐色。

(II) III区P-4出土土器 (図30-121)

121は底部を欠く鉢である。有段口縁をもち内外面ともいねいにヘラミガキのち赤彩される。胎土は細かい砂粒を含み、赤褐色。推定口径11.9cm。

(II) 1号掘立柱建物址出土土器 (図26-11)

11は壺もしくは甕の底部である。内面わずかにハケ痕、外面はハケのちヘラミガキ。細かい砂粒を含む胎土で、外面は黒褐色、内面は白灰褐色。底部径7.4cm。

(II) その他 (図26-12~23、図27・28-43~83、124~127)

12は壺の口縁部～頸部である。口唇部に繩文がめぐり、頸部は刺突文、ヘラ描平行線文・繩文が施文される。ヘラミガキによる調整で胎土は細かい砂粒を多量に含む。暗灰褐色で口径11.1cm。

13は壺の胴部である。上半部は繩文がヘラ描次線により、平行する帯状に区画され、中部は1周6単位の「工」字文風の文様が施文される。内外面ともハケ調整。胎土は直径0.2~0.4cmの大粒の砂をかなり含む。色調は淡褐色～茶褐色。最大径20.8cm。

14・15・16は甕の口縁部～胴部である。それぞれ口唇部に繩文がめぐる。15の口縁は圧痕による波状となっており、圧痕の凹部にも繩文が施文される。15の胴部文様は櫛描羽状文・刺突文、16は繩文。14は内外面ともハケからヘラミガキ、15は内面いねいなヘラミガキ、16は口縁部内面ヘラミガキ、頸部内面ハケ。14・15の胎土はきめの荒い砂粒を含み、16の胎土に含む砂はきめが細かい。14は内外面とも褐色、15は内面は白褐色、外面は灰黒色。16は全体に黒褐色。口径はそれぞれ14が18.1cm、15は19.2cm、16は13.6cm。

17・18は壺の口縁部であろう。17は内面ハケのちヘラミガキ、外面ハケ痕わずかに残る。磨滅しているが内外面とも赤彩痕が残る。18の外面は磨滅のため定かでないが内面はハケ痕が見られる。17・18ともに細かい砂粒を胎土にかなり含み、色調はともに淡褐色。口径17は23.4cm、18は19.0cm。

19は接合により完形に復元される小型の甕である。内外面ともにハケ痕。細かい砂粒を含む胎土で黒褐色。外表面とろどろに炭化物の付着。口径10.4cm、高さ9.2cm。

20~22は高坏の坏部ないし脚部である。21は口縁が水平に開くものであり、口唇部残存1/8周に1ヶ所2山の小突起が取り付けられる。20・21は内外面ともいねいなヘラミガキのち赤彩。22は外面ヘラミガキのち赤彩。それぞれ胎土に細かい砂粒を含み、口径20は18.0cm、21は22.0cm、22の脚部口径7.9cm。

23~27は甕の口縁部～胴部である。それぞれ外面全体に櫛描波状文が施される。24~27の頸部に6~10本単位の櫛描簾状文が施される。内面調整24はハケ、23・25~27は横位ヘラミガキ。それぞれ胎土に細かい砂粒を含み23は外面が黒褐色、内面は黄褐色。24は外面が褐色、内面は暗褐色。25は内外面とも黒褐色、26・27は内外面とも淡褐色。23・25・27の外表面には炭化物の付着。口径23は18.1cm、24は15.8cm、25は11.4cm、26は17.0cm、27は14.3cm。

28~33は壺または甕の底部である。28・29ともに外面ヘラミガキ、内面ハケ。30・32は外面ヘラミガキ。30はきめの荒い砂粒を胎土に含むが28・29・31~33はきめの細かい砂粒が胎土にかなり含まれる。28・29は内外面とも茶褐色、30は白褐色、31~33は褐色～茶褐色。底部径28は10.0cm、29は8.0cm、30は6.0cm、31は5.7cm、32は4.5cm、33は5.4cm。

34は台付甕の脚部だろうと思われる。胎土は細かい砂粒をわずかに含み、白褐色。脚部口径は4.6cm。

35はミニチュアの甕である。形はいびつだが底部は平らで安定している。細かい砂粒をかなり胎土に含み、全体に黄褐色。底部径2.3cm。

43は甕の口縁部片である。繩文地文に重山形文が施文される。内面ナデ。細かい砂粒を胎土に含み、褐色を呈す。

44は甕の口縁部片である。斜め方向のヘラ描沈線が施され、直径0.3cmの孔を有する耳状突起が取り付けられる。突起の腹部に繩文が施文される。内面ていねいなヘラミガキ。細かい砂粒を含む胎土で外面は褐色、内面は灰褐色。

45は甕の頸部片である。繩文地文に太いヘラ描平行線が施される。細かい砂粒を胎土に含み、灰褐色を呈す。

46~49は甕の胴上部片である。46はヘラ描直線文によって区画される文様帶内に繩文と山形文が施される。47は太いヘラ描直線とヘラ状具による刺突文・指頭による円文が施文される。48は繩文・縦位櫛描直線を囲む懸垂文・ヘラ状具による刺突文をはさむヘラ描平行線文の組み合わせ。49は繩文地文に縦位ヘラ描文とヘラ状具による刺突文が配されるもの。46は外面ヘラミガキ、大粒の砂を含む胎土で全体に淡褐色。47は内外面ともにハケ、砂粒を含む胎土で、褐色。48外面は文様の上からヘラミガキされる。細かい砂粒を胎土に含み、暗褐色。49の調整は削離のため分からぬが胎土に細かい砂粒をかなり含み、黄褐色。

50~62・64~67は甕の胴部片である。50は繩文または無文をはさみ横位ヘラ描直線文と同文による「工」字文が施されるもの。2ヶ1対の突起もある。51は細いヘラ描平行線文とヘラ描による複合鋸歯文。52~57は繩文・横位ヘラ描直線文・連孤文の組み合わせ。58~62は横位ヘラ描直線に画せられる櫛描直線文・ヘラ描曲線文に画せられる繩文帯・ヘラ状具による刺突文の組み合わせ。58に直径0.6cm、59に直径1.2cmの円形浮文が貼り付けられる。64~66は櫛描による直線文・刺突文がヘラ描直線により区画されるもの。67は櫛描による曲線文。50は内外面ともにハケ。51は外面がハケからヘラミガキ、内面はナデと思われる。外面の調整は52・55・57・59~61はハケからヘラミガキ、53・54・56・58・67はハケ。62・64~66は磨滅のためよく分からぬ。内面の調整は52・54・55・58~61・65はハケ、57はハケからヘラミガキだがその他のものは磨滅のためよく分からぬ。50~62・64~67それぞれ胎土に砂粒を含む。色調は50・51の外面は暗褐色、内面は褐色。52・55は全体に暗褐色、53は外面が暗褐色、内面は黄褐色。54は内外面とも白灰色で外表面に赤彩痕のこる。56は外面が暗赤褐色、内面は白灰色。57は外面が淡褐色、内面は赤褐色。58~59・61は外面が暗褐色、内面は淡褐色。60・64は内外面とも淡褐色。62は素地は赤褐色だが外表面は灰黒にくすむ。65の外面は赤茶色、内面は灰褐色。66は全体に灰褐色、67は全体に白黄褐色。

63は甕の胴部片である。繩文地文に「コ」を重ねた文様。同文様の中心部に直径0.6cmの円形浮文が貼り付けられる。調整はよく分からぬが、内外面とも暗褐色で外表面には炭化物の付着が見られる。

68~75は甕の口縁部片である。68~70は棒状具压痕による波状文もしくは刻目文。68はさらに櫛描直線文と横位櫛描波状文が胴部にかけ施文されるもの。71は受け口状に立ち上がる口縁に繩文とヘラ描鋸歯文が施される。69・72の口唇部に繩文がめぐる。73・74は折り返す口縁端部に櫛描波状文を施すもの。75は櫛描波状文のみ。外面の調整は68~71はナデ、72はハケ。その他は明瞭でない。色調は68・70・71は全体に暗褐色~黒褐色。69・72~75は全体に黄褐色~褐色。68~71・75の外表面にわずかな炭化物の付着がみられる。

76~83は甕の胴部・頸部片である。76は繩文、77~79は櫛描横走羽状文・櫛状工具の歯による刺突文の組み合わせ。80・81は縦位櫛描直線文と横位櫛描波状文の組み合わせ。82は日の細かい櫛描波状文。83は頸部に櫛描簾状文が走りその上下に櫛描波状文が施文されるもの。76~80・83は外面ハケ。内面は77・79はハケからヘラミガキ、78・83はていねいなヘラミガキ、80・81はハケ。その他は定かでない。76~78・

80・82・83それぞれ胎土に細かい砂粒を含むが76と82は他に比べその量が多い。79・81はややきめの荒い砂粒を含む。色調は、76は外面は黒褐色で内面は黒色、77・78・80・83は全体に灰褐色～黒褐色。79の外面は黒褐色で内面は赤茶色。81・82は外表面とも灰白色～灰褐色。76～78・80・83の外表面に炭化物の付着が見られる。

124～127は甕の口縁部～頸部である。124は口縁部を外反させたのち口唇部をつまみ上げ面取りを施したもの。125は受け口状口縁となっている。126・127は外反する口縁の口唇部を面取るもの。124は内外面ともかなり磨滅しているが、口縁部内外にナデ痕、頸部外面にハケ痕が残る。125は口縁部外面はナデ、口縁部内面・頸部外面はハケ。126・127は口縁部内外にナデ痕、126は外面側部ハケ、頸部内面の稜線以下はケズリとなる。127の頸部内面はハケ。124はきめの荒い砂を胎土に多量に含む。125～127もかなり砂粒を含む胎土であるが、127には直径0.1～0.2cmの大粒の砂も含まれる。124・127はともに褐色、125・126はともに黒褐色。推定口径124は15.2cm、125は16.4cm、126は15.6cm、127は13.1cm。出土地点はそれぞれ124はIII区R-13・P₂、125はIII区P-3・P₃、126はIII区Q-10、127はII区P-32。

B 土製品（図28-84～91）

土製品として弥生時代のものと思われる筋鍤車およびその未製品が計7点、古墳時代のものと思われる土鍤が一点出土している。

84～87は製品となっている筋鍤車である。84は弥生時代の竪穴住居址（SI2）から出土したもので、横描羽状文の甕の胴部片を用いており、中央の孔をあけるに両側からあけている。直径4.7cm、厚さ0.6cm、重さ17.0g。85は平安時代の竪穴住居址（SI8）から出土している。内外面ともていねいにヘラミガキされる土器片を用いており、両面穿孔と思われる。直径は最大のところで3.8cm、厚さ0.6cm、重さ8.7g。86・87も両面穿孔と思われるものであり、86は直径2.3cm、厚さ0.5cm、重さ2.6gを測り、87は直径3.1cm、厚さ0.6cm、重さ5.7gを測る。

88は未製品である。片側からのみ孔があけられるが厚味の半分程度でとどまっている。直径2.2cm、厚さ0.5cm、重さ3.1g。

89・90は半身を欠く製品である。ともに両面穿孔と思われる。90は外表面とも赤彩される土器片が用いられる。89は厚さ0.5cm、重さ5.8g。90は厚さ0.6cm、重さ2.2g。

91は製品となっている土鍤である。断面形はほぼ円形。直径1.8cm、長さ3.6cm、重さ10.8g。

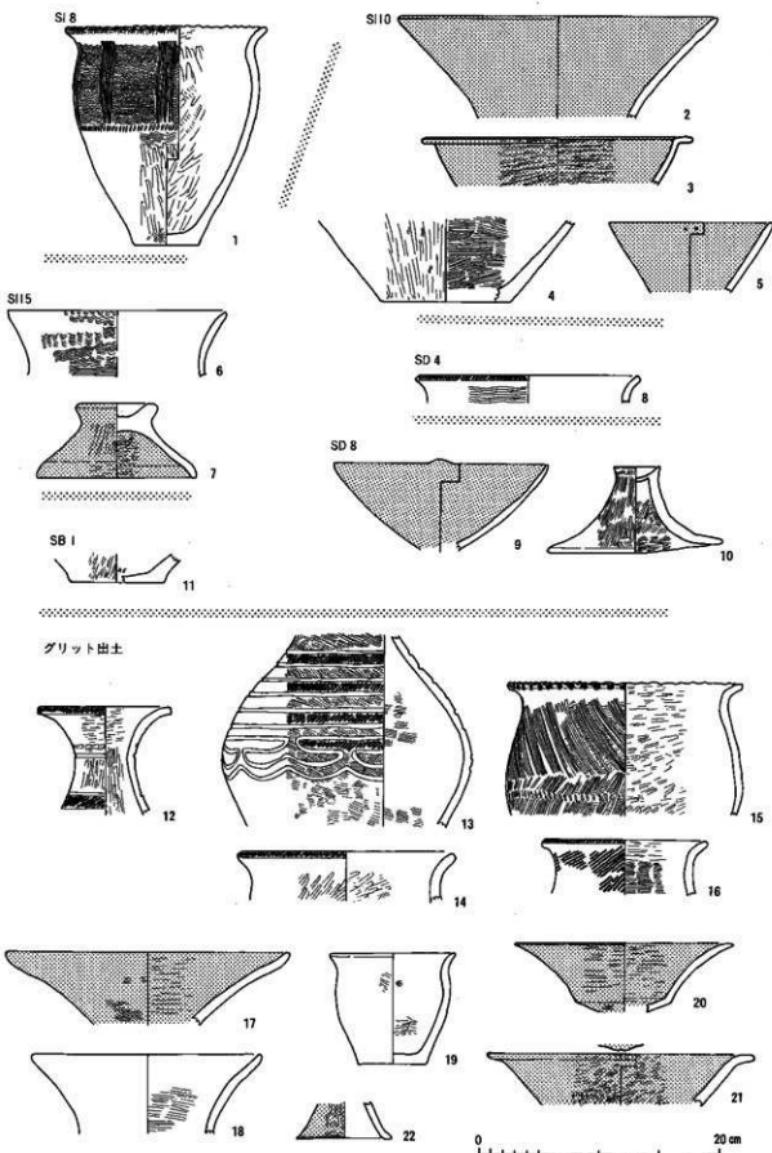
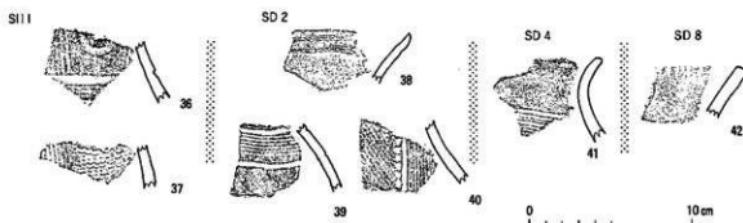
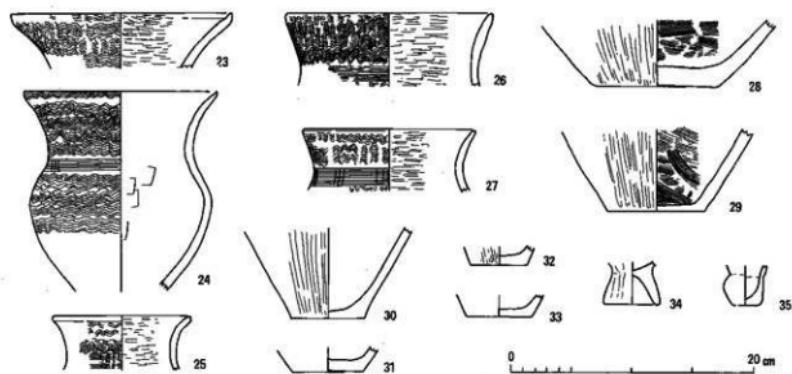


図26 弥生・古墳時代の土器(I) (1 : 4)



グリット出土

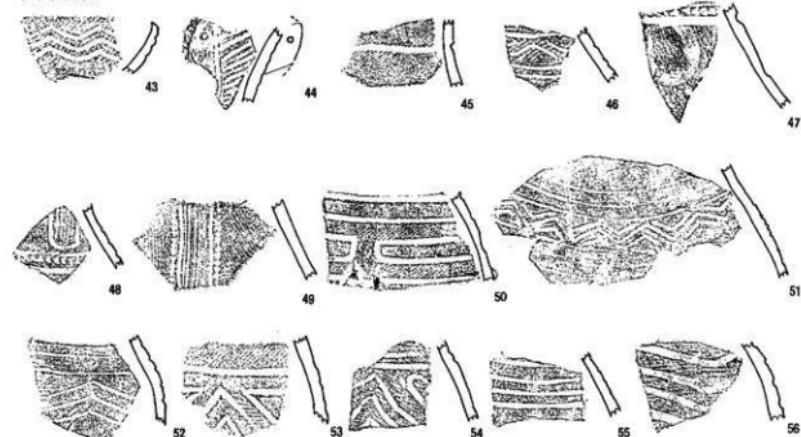


図27 弥生・古墳時代の土器(2) (1:4、1:3)

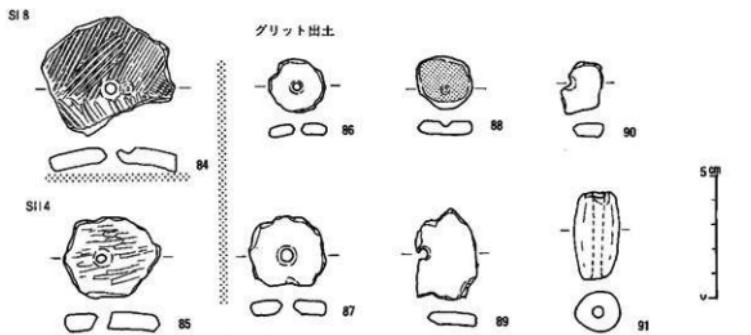
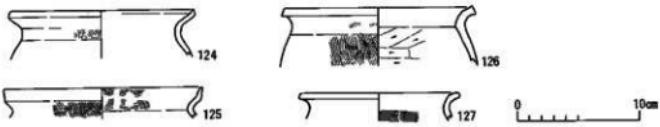
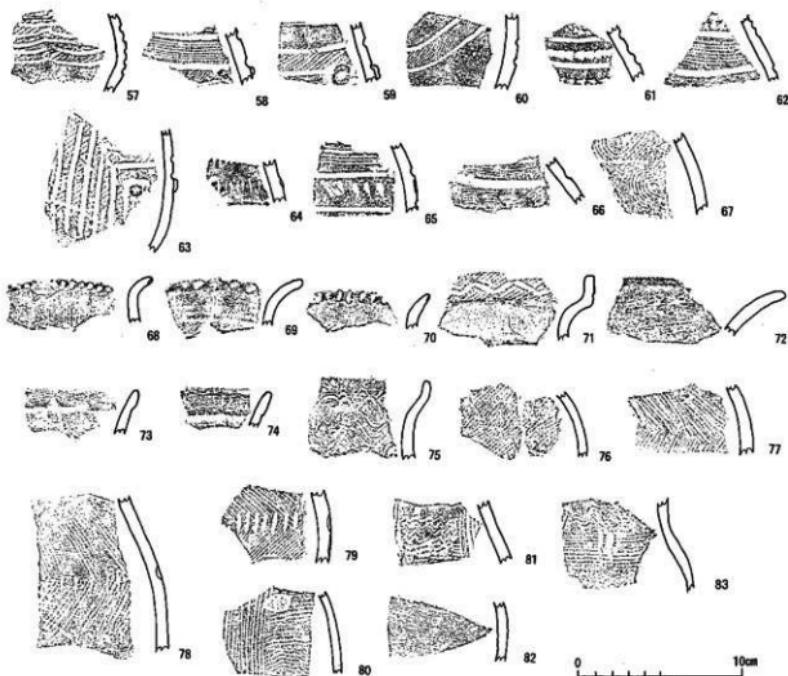


図28 弥生・古墳時代の土器(3) (1 : 3、1 : 4), 土製品 (1 : 2)

SD 1.

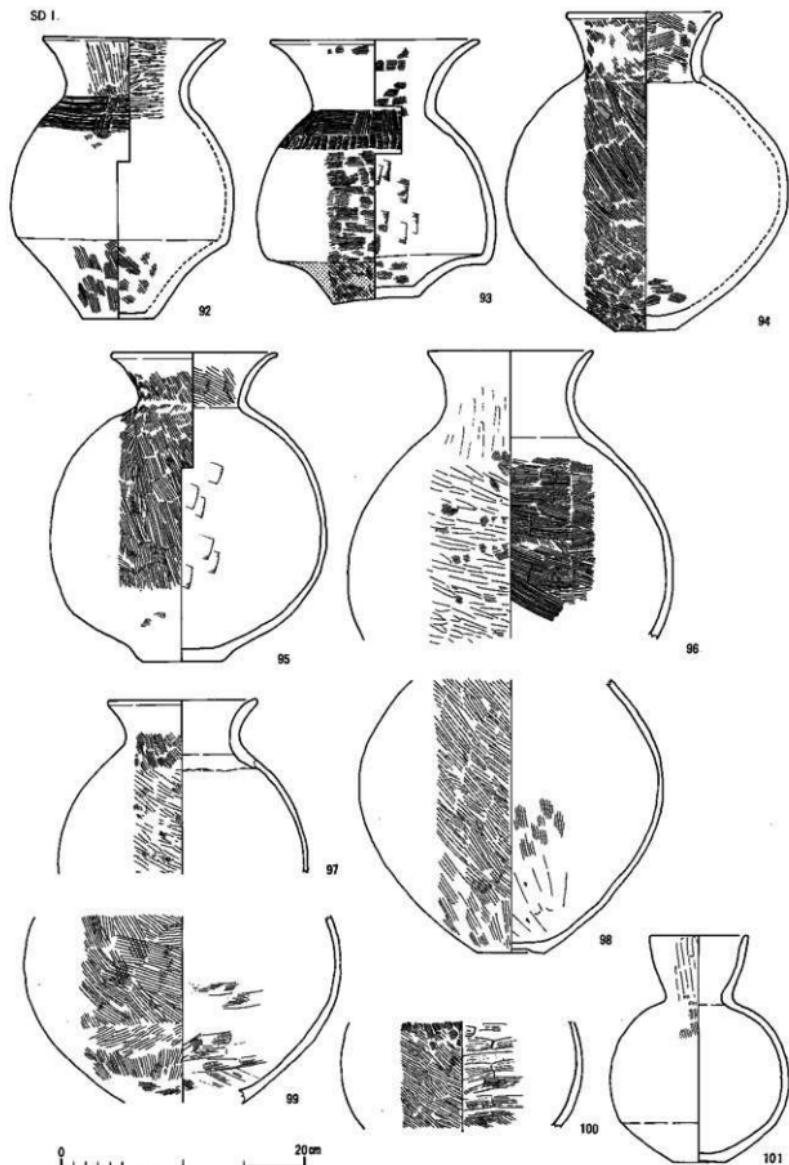


図29 弥生・古墳時代の土器(4) (1 : 4)

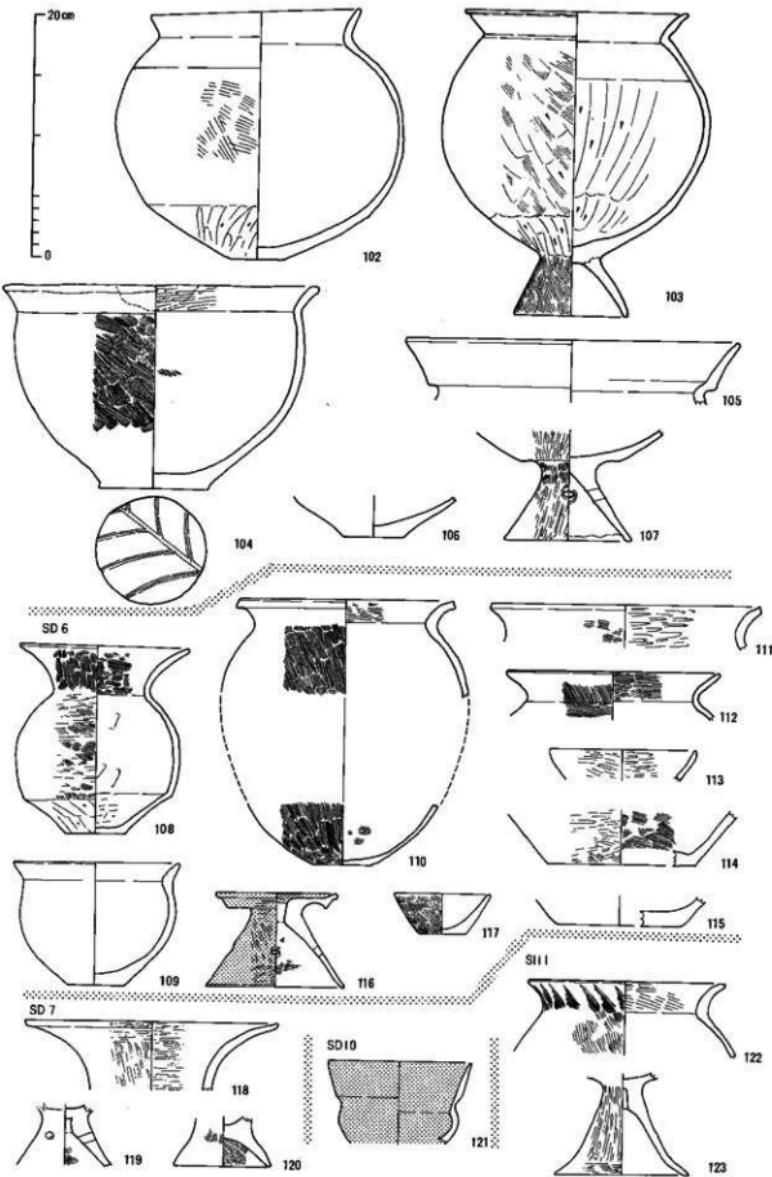


図30 背生・古墳時代の土器(5) (1 : 4)

第4章 平安時代の遺構と遺物

1 遺 構

A 穴住居址

7号竪穴住居址（図31-SI7）

I区H・I-26・27に位置する。北西側は道路切り通しにより不明となっている。本住居址の上部より古錢が数枚まとめて出土しており、中世の遺構も存在していたようであるが検出できなかった。規模は、長軸は不明であるが短軸は420cmを測る。床面は東側のみ平坦でしっかりしているが、北西側は削土されている。カマドは東コーナー側にあり、石組みで構築されている。遺存している部分は、壁の上の煙道に至る部分のみで、カマド本体の部分は失われている。床面には焼土が残る。また、床面上にはピットがあるが、中世の柱穴の可能性もある。

9号竪穴住居址（図31-SI9）

I区I-27・28を中心として検出される。上部より焼土と共に土師器・須恵器片がまとめて出土したが、プランは明確でない。いくつかの土坑が重複して構築されているために規模等ははっきりしない。

14号竪穴住居址（図31-SI14）

II区S-12に位置する。東側の壁は約40cmで、ほぼ垂直に掘り込まれており明確であるが、他ははっきりしない。東側の壁下には周溝がめぐる。また、その周溝より床のほぼ中央に延びるオンドル様の溝もある。カマドは、南コーナーに構築されている。構築物はほとんどないが、支柱と思われる角礫がほぼそのままの状態で出土している。また、カマドにかけていたと思われる甕も潰れた状態で出土している。

16号竪穴住居址（図32-SI16）

III区P-10・11に位置する。調査区端部での検出のため規模等については不明であるが、隅丸長方形プランを呈するものと思われる。壁は20cmを測り明瞭である。ピットは1本検出されている。本住居址からは、平安時代土師器等が出土している。

B 土 坑

1号土坑（土壤墓）（図33-SK1）

I区B-3に位置するホップ栽培の支柱を埋めた方形の穴によって東側が破壊されている。形態は隅丸長方形で、長軸が167cm、短軸が約50cmである。坑底はほぼ平坦である。坑内より底に接して完形の黒色土器2点が、一点は南西コーナーの壁際に、もう一点は坑底のほぼ中央の北寄りに正位の状態で出土している。

2号土坑（図33-SK2）

II区S-7に位置する。95×70cmの楕円形を呈し、深さは50cmを測る。坑底は平坦である。出土遺物はない。

3号土坑（図33-SK3）

II区S-8に位置する。径約80cmのほぼ円形を呈し、深さは15cmを測る。坑底は平坦である。坑内よりの出土遺物はないが、付近より平安時代土師器等が出土している。

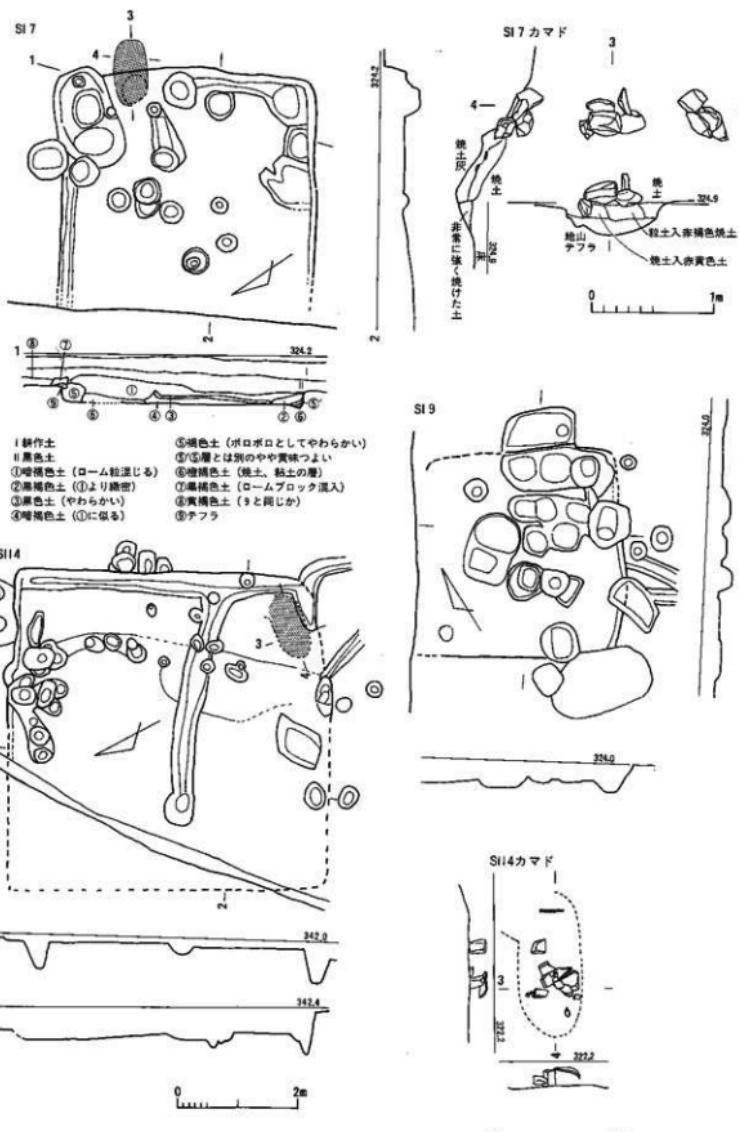


図31 平安時代の堅穴住居址実測図(1) (1:80、1:20)

4号土坑（図33-SK 4）

II区R-14に位置する。95×75cmの楕円形を呈し、深さは28cmを測る。坑底は平坦であるが南側壁が大きく内湾する。坑内よりの出土遺物はない。

5号土坑（図33-SK 5）

II区S-14に位置する。145×105cmの楕円形を呈し、深さは50cmを測る。坑底は平坦であるがなだらかに立ち上がる。坑内よりの出土遺物はない。

6号土坑（図33-SK 6）

II区R・Q-16・17に位置する。165×1110cmの隅丸長方形を呈し、深さは65cmを測る。坑底は平坦である。坑内よりの出土遺物はない。所属時期は不明であるが、断面等の観察によれば比較的新しいものと思われる。

7号土坑（図33-SK 7）

II区Q-20に位置する。径70cmのほぼ円形を呈し、深さは15cmを測る。坑底はなだらかである。坑内より弥生時代の高坏の坏部が出土している。焼土も混じっており、炉体土器のようにも思われる。本遺構は弥生時代に所属する。

8号土坑（図33-SK 8）

II区P-48・49に位置する。130×50cmの長方形プランを呈し、深さは32cmを測る。坑底は平坦である。出土遺物はないが、形態から平安時代の土塙墓と考えられる。

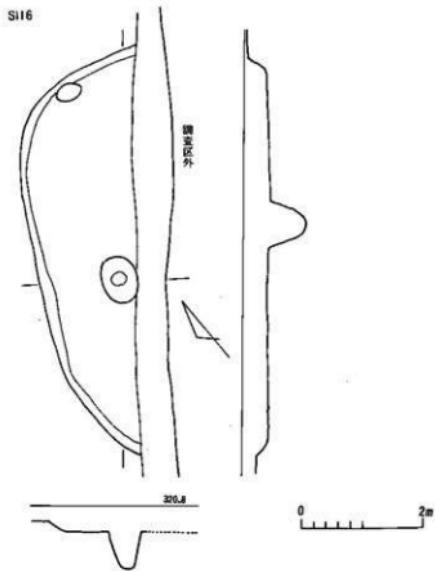


図32 平安時代の竪穴住居址実測図(2) (1 : 80)

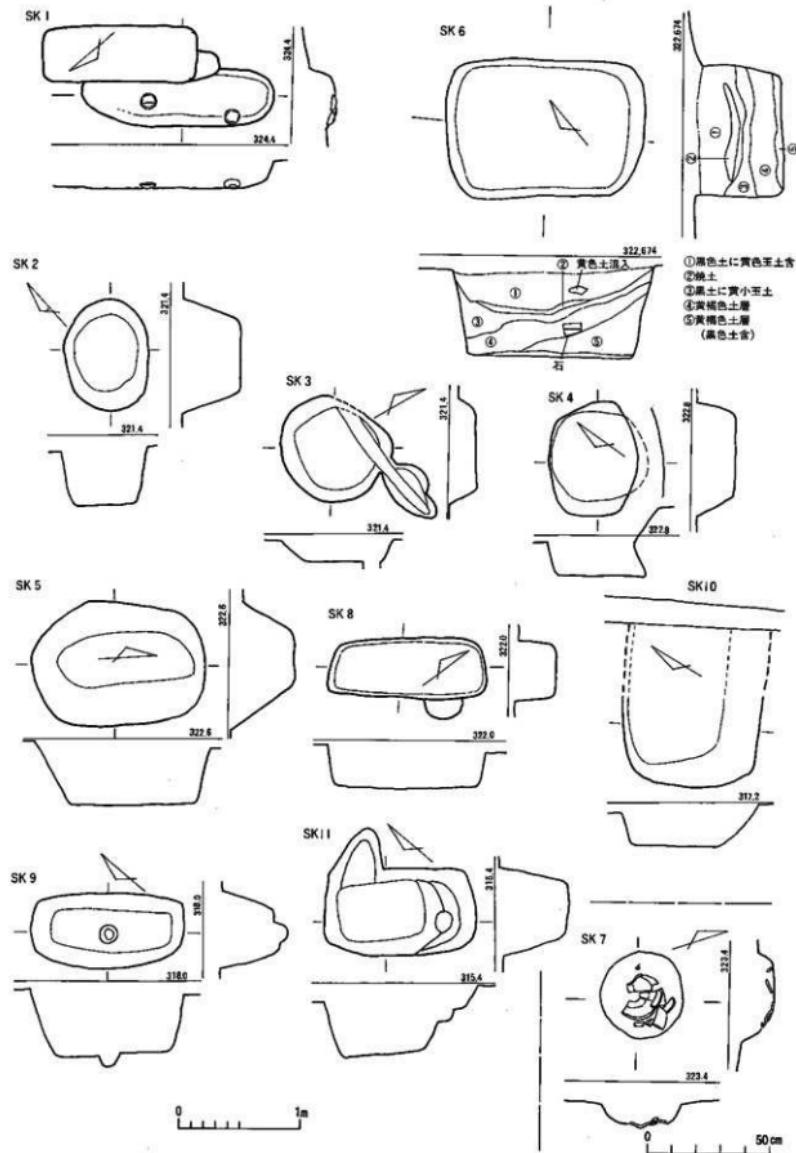


図33 土坑実測図 (1 : 40)

2 遺 物

A 土 器 (図34~36)

(1) 7号竪穴住居址出土土器 (図34-1~29)

黒色土器坏、土師器・甕、須恵器坏、転用硯、紡錘車などが出でている。

1~4は接合によりほぼ完形に復元される坏である。1はカマド付近から出土した土師器坏。内面ていねいなヘラミガキ、外面は底部も含めナデ痕。細かい砂粒とともに大粒の砂も含む胎土で基本的に赤茶色だが、ところどころに黒斑がある。口径16.4cm、高さ5.8cm、底部径6.0cm、残存90%。2は黒色土師器坏であるが、外面「千」の字の墨書きがある。外面ナデ、内面はていねいなヘラミガキで黒色は光沢を持つ。小石混じりの砂粒を胎土に含み、素地は淡褐色。口径14.8cm、高さ5.1cm、底部径6.1cm、残存80%。3・4は器形・色調とも類似する須恵器坏である。ともに底部に糸切り痕が残り、わずかに砂粒を含む胎土で灰色~灰褐色。3は口径12.7cm、高さ3.9cm、底部径6.5cmで残存40%。4は口径12.8cm、高さ3.8cm、底部径6.0cmで残存40%。

5・6・9・10は底部等を欠損する黒色土器坏である。みな外面ナデ、内面ていねいなヘラミガキ。6・10は特に光沢のある黒色。9の底部はヘラケズリ。それぞれ胎土に砂粒を含み、5は黒褐色、6・9・10は褐色を呈す。5は口径14.0cm、高さ3.9cm、底部径6.4cmと推定され、6は口径12.6cm、高さ4.4cm、底部径5.8cmと推定される。9は口径12.4cm、高さ4.1cm、底部径5.7cmと推定され、10は推定口径11.5cm。

7・8・11・12・15は底部等を欠損する須恵器坏である。7の底部は糸切り痕のこる。胎土はごく細かい砂粒をそれぞれ含み、7・11・15は灰色、8・12はやや黄味をおびた灰色を呈す。7は推定される口径11.7cm、高さ3.4cm、底部径6.2cm。8は推定口径11.8cm、11は12.5cm、12は13.6cm、15は13.5cm。

13は底部を欠損する土師器坏である。外面ナデ、内面ていねいなヘラミガキ。胎土に細かい砂粒を含み、赤茶色。推定口径13.3cm。

14は口縁部を欠損する土師器坏である。底部に糸切り痕がのこるが他は磨滅はげしく定かでない。胎土に細かい砂粒を含み、白褐色。推定底部径7.4cm。

16は須恵器長頸瓶の底部である。高台をもつ。内外面ともナデ。わずかに胎土に細砂を含み基本的に灰色だが、外表面に黒斑がある。底部径9.6cm。

17~25は土師器甕の口縁部~胴部である。17~19・23の端部は受け口状、20・24・25は面を有するものだが、21・22は丸くおさめるもの。17は胴部外面ハケからヘラケズリ、内面ハケ。24・25とも外面胴下半ヘラケズリ、内面ハケ。22は胴部外面は横位ヘラケズリ、その他は磨滅のためよくわからない。17は他に比べ器壁は薄く、22・23の小型のものはさらに薄手である。すべて胎土に砂粒を含むが17~20・23・24は多量に含む。22に含まれる砂はごく細かいもの。17~21・24・25は内外面とも褐色~赤褐色。22・23は暗褐色。推定口径17は22.7cm、18は23.4cm、19は20.4cm、20は21.5cm、21は11.5cm、22は14.8cm、23は13.2cm、24は19.7cm、25は21.8cm。

26・27は土師器甕の底部である。26の底は完全な丸底ではなく小さく平底を持つもので不安定ながら直立する。内面ナデ、外面ヘラケズリ。27内面ナデ、底部に糸切り痕がある。26はややきめの荒い砂粒を胎土にかなり含み暗赤褐色だが外表面に煤の付着が見られる。27は砂粒を含み、赤褐色。底部径26は4.8cm、27は5.4cm。

28は須恵器坏の底部を鏡に転用したものである。糸切り痕が残っており、その細かい起伏の凹部に墨が

付着し残る。胎土は細かい砂粒を含み、灰黒色。直径9.0cm、中央の厚さ0.4cm。

29は陶製の紡錘車である。細い棒状具により外表面に縱位直線文が施される。外表面の半分位に縁系粒がうすくかかる。中心に直径0.4cmの孔が貫通する。全長4.5cm、重さ62.3g。

(2) 9号竪穴住居址出土土器 (図35-30~45)

30・32は黒色土器壺である。ともに外面ナデ、内面ていねいなヘラミガキで特に32は光沢をもつ。ともに細かい砂粒を胎土に少量含み30は赤褐色、32は褐色。推定口径30は11.2cm、高さ3.1cm、底部径6.2cm、32は推定口径12.4cm。

31は甕の底部と思われる。内面ナデ、外面は底部も含めヘラケズリ。ややきめの荒い砂粒を胎土に含み、灰褐色。底部径5.8cm。

33~37は須恵器壺である。37はわずかに外反する口縁をもつが、他は自然に立ち上がり丸くおさめられるもの。すべての底部に糸切り痕が残るが、33はさらにその上から細い棒状具により「×」字のヘラ記号がある。ごくきめの細かい砂粒を胎土に含むものが大半を占め、36・37は灰色、ほかは黄灰色~茶灰色。33は口径13.2cm、高さ3.7cm、底部径6.5cm、残存60%。34は口径15.0cm、高さ4.1cm、底部径6.4cm、残存60%。35は推定口径12.5cm、高さ3.9cm、底部径6.2cm。36・37の推定口径ともに12.7cm。

38は須恵器の蓋である。ごく細かい砂粒をわずかに含む。黒灰色、推定直径16.0cm。

39は底部を欠損する土器壺である。受け口状口縁を有す。外面ヘラケズリ、内面ハケ。ややきめの荒い砂粒を多量に胎土に含み、淡褐色。口径20.7cm。

40・42は土器壺甕の口縁部~胴部である。40は受け口状、41・42は面を有する口縁部形態。41・42外面ヘラケズリ、40・42内面ハケ。それぞれ胎土に砂粒をかなり含み、40・41は赤褐色、42は黄褐色。推定口径40・41は22.7cm、42は20.4cm。

43は須恵器甕の口縁部~頸部である。端部はシャープな面取りがなされる。内外面ともハケでわずかに細砂を含み、青灰色。推定口径14.2cm。

44は土器壺甕の底部である。底面に糸切り痕のこる。砂粒をかなり胎土に含み、赤橙色。底部径6.2cm。

45は須恵器甕の底部。外面は平行タタキ、内面ナデ。わずかに細砂を胎土に含み、青灰色。推定底部径16.4cm。

(3) 14号竪穴住居址出土土器 (図35-46~49)

46は黒色土器壺である。底面ヘラケズリ。細砂を胎土に含み、赤褐色。焼きは硬い。推定口径13.4cm、高さ4.3cm、底部径8.0cm、残存50%。

47は小型の土器壺甕の口縁部~胴上部である。受け口状口縁。内外面ともナデ。砂粒を多量に胎土に含み、外面は灰褐色で内面は褐色。推定口径12.8cm。

48は黒色土器壺の底部である。黒色は光沢を持つ。底面に糸切り痕。ごく細かい砂粒を胎土に含み、外面は暗灰褐色。推定底部径8.0cm。

49は丸底の土器壺甕である。外面胴部はヘラケズリ、内面ハケ。砂粒を胎土に含み、外面は白灰褐色、内面は淡褐色~灰褐色。推定口径20.5cm、高さ33.0cm程。

(4) 16号竪穴住居址出土土器 (図35-50)

50は土器壺である。外面に「思」という字に近似する墨書きがある。底面糸切り痕。細かい砂粒を胎土に含み硬質で、全体に黄褐色だが口縁部は灰色にくすむ。内外面ところどころに炭化物付着。推定口径12.5cm、高さ4.1cm、底部径5.1cm、残存15%。

(5) 1号土坑出土土器 (図35-51・52)

51・52ともよく似た形態の完形の黒色土器壺である。ともに体部が開き浅く、底面は糸切り痕。ともに

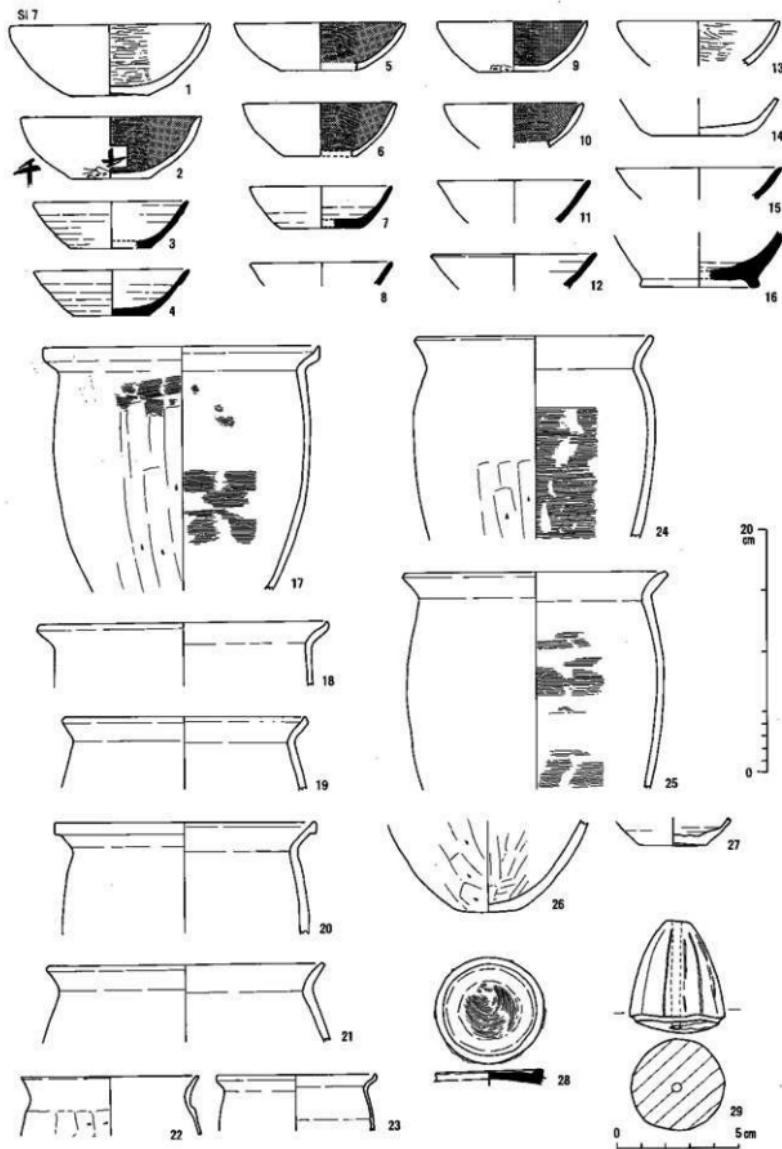


図34 平安時代の土器(I) (1:4、1:2)

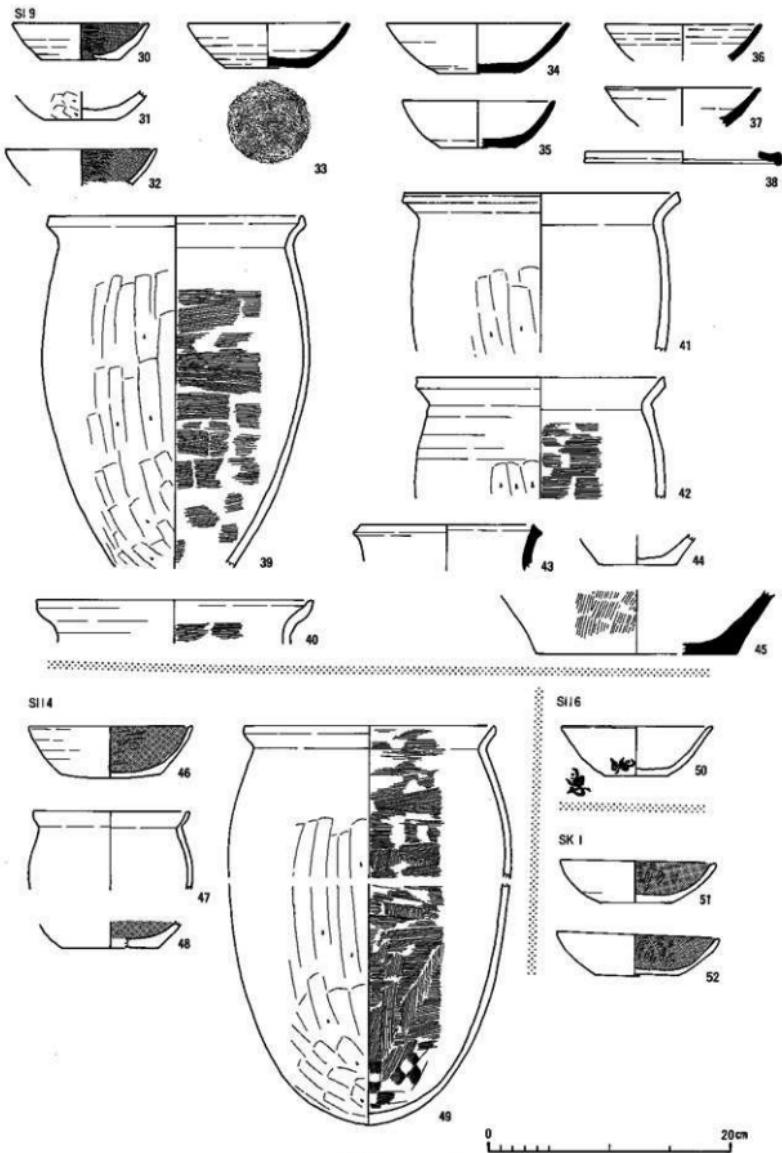


図35 平安時代の土器(2) (1:4)

細かい砂粒をかなり胎土に含み、ややもろい。暗褐色。51は口径12.9cm、高さ3.5cm、底部径6.2cm。52は口径13.3cm、高さ3.4cm、底部径6.8cm。

(6) その他 (図36-53~74)

53~59は黒色土器坏である。53は完形品で口縁部が外半するもの。54・56・57の内面の黒色は光沢をもつ。58は内外面ともヘラミガキのち黒色の珍しいもの。59の底面は糸切り痕。全て胎土に細砂を含み、素地の色調は53~56・59は黄褐色~赤褐色、57は暗灰色。53は口径14.4cm、高さ4.5cm、底部径5.6cm。54推定口径12.4cm、高さ4.0cm、底部径4.9cm。推定口径55は13.0cm、56は13.3cm、57は12.7cm、58は14.0cm。59の底部径5.1cm。

60~65は須恵器坏である。わずかに外反する口縁部をもつものが多い。それぞれ胎土に細砂を含み、60内外面とも赤橙色だが口縁部のみ灰色にくすむ。61は赤灰色だがその他は灰色。60の口径13.2cm、高さ4.0cm、底部径7.0cm。推定口径61は13.8cm、62は12.4cm、63は13.2cm、64は13.1cm、65は12.4cm。

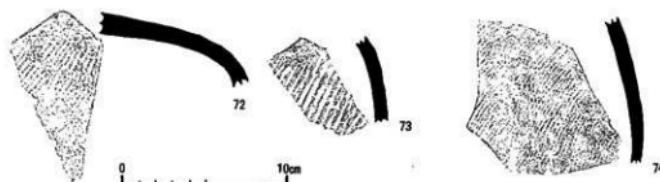
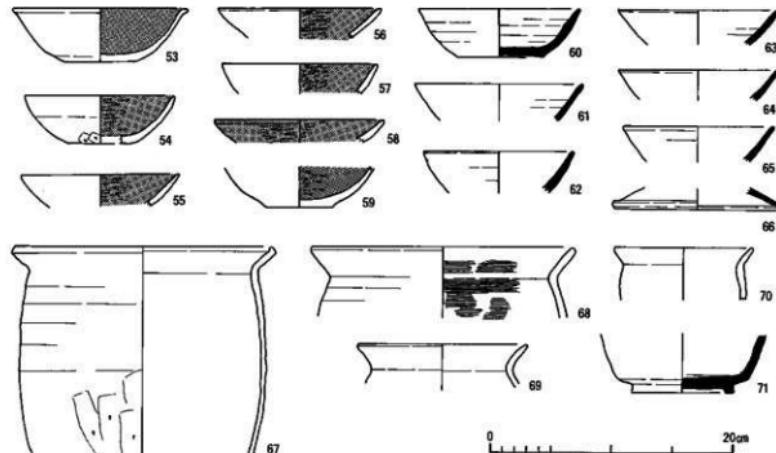


図36 平安時代の土器(3) (1:4, 1:3)

- 66は須恵器の蓋。わずかにごく細かい砂を含み、灰褐色。推定口径14.0cm。
- 67～70は土師器甕の口縁部～胴部である。67は受け口状口縁をもち、外面胴下半はヘラケズリ、内面ナデ。68は外面ナデ。内面ハケ。70外面にヘラミガキ痕。それぞれ胎土に砂粒を含み、68・70・71は赤褐色～暗褐色、69は黄褐色。
- 71は須恵器甕の胴下部～底部。胴部は明確な稜を持って立ち上がる。小石混じりの砂粒を胎土に含み、青灰色、底部径8.3cm。
- 72は須恵器甕の肩部片。外面は平行タタキ。ごく細かい砂粒を胎土に含み、内外面とも灰色。
- 73・74は須恵器甕の胴部片。外面ともに平行タタキ。73の内面ハケ。ごく細かい砂粒を胎土に含み、73は青灰色、74の外面は茶味がかる青灰色、内面は灰色。

B 鉄製品・石製品

鉄製品（図37）

麻皮削器（1・5） 1は全長9.5cmを測り、両端が角状に突出している。頭部背側に木質部の痕跡が残っている。この部分が把手であると考えられる。刃部は鋭い。7号竪穴住居址から出土している。5は全長約8cmを測り、1よりやや小型である。16号竪穴住居址より出土している。

鎌（2） 飯山地方では上野遺跡に次いで二例目の平安時代の鎌である。先端及び基部側を欠く。14号竪穴住居址から出土している。

鉄斧（3） 幅が狭いが形態から鉄斧と考えられる。鋸が著しい。15号竪穴住居址から出土している。

火燧金具（4） II区R-7出土。全長7.1cmを測る。飯山地方では初めての出土である。

石製品（図38・39）

本項では、古墳時代の遺構から出土した石製品についても一括して述べる。

1と2は1号溝式から古墳時代前期土器とともに出土したものである。1は人頭大の平石で、正面側中央にはくぼみの部分があり、その周辺には打痕が認められる。裏面は打面と磨面が半々にある。砂岩であろう。2は幼児頭大の断面三角形を呈しており、稜部および頭部には敲打痕が認められる。花崗岩系統の石材である。

3はI区H-28の出土で、表面に敲打痕が認められる。

4はボロボロとした石質で、表裏ともに磨面が認められる。III区P-3出土。

5は細長い石で、破損している。頭部と稜部などに敲打痕が認められる。III区P-2出土。

6～8は平安時代の編物石である。6は7号竪穴住居址出土。7は11号竪穴住居址出土。8は14号住居址より出土している。

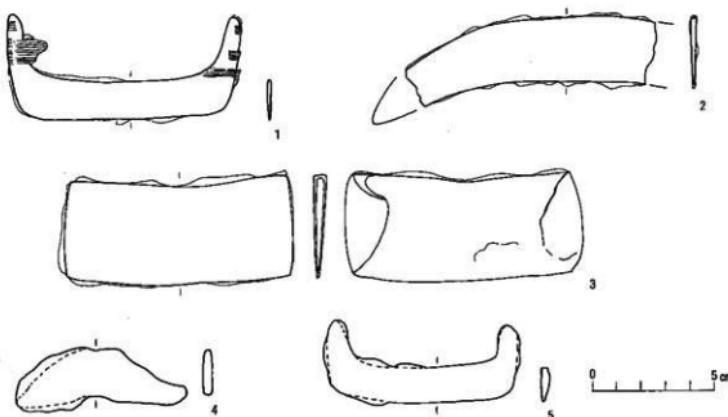


図37 平安時代の鉄製品（1：2）

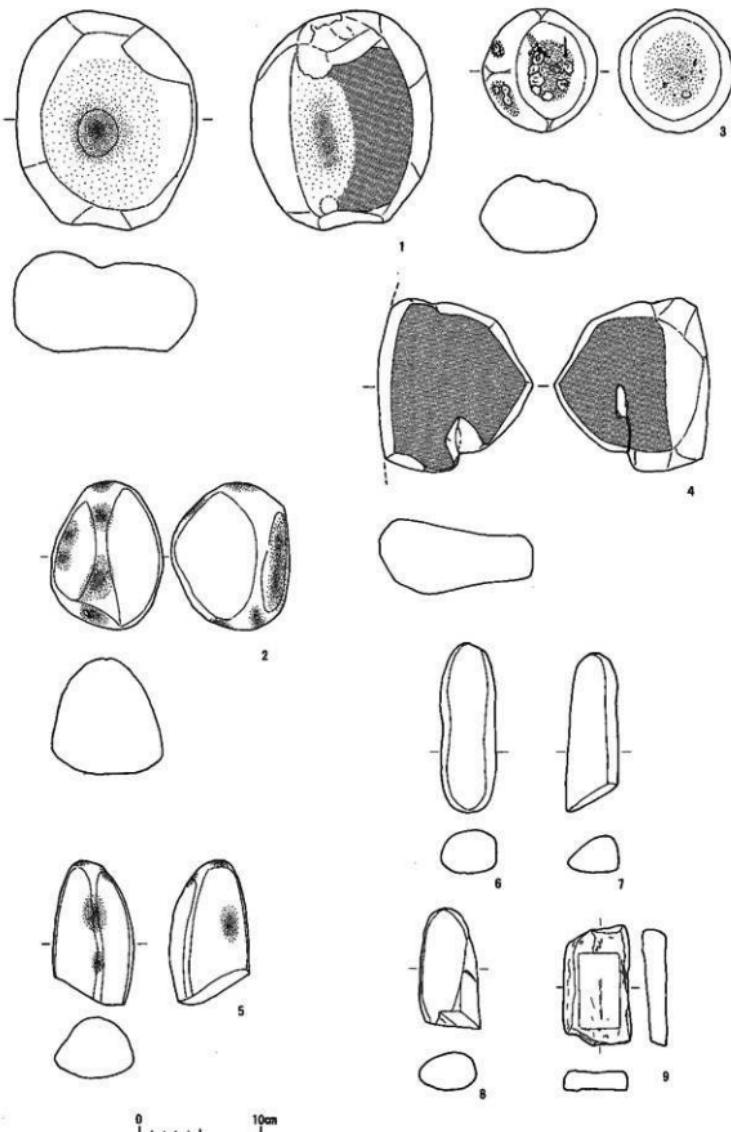


図38 石製品(1) (1 : 4)

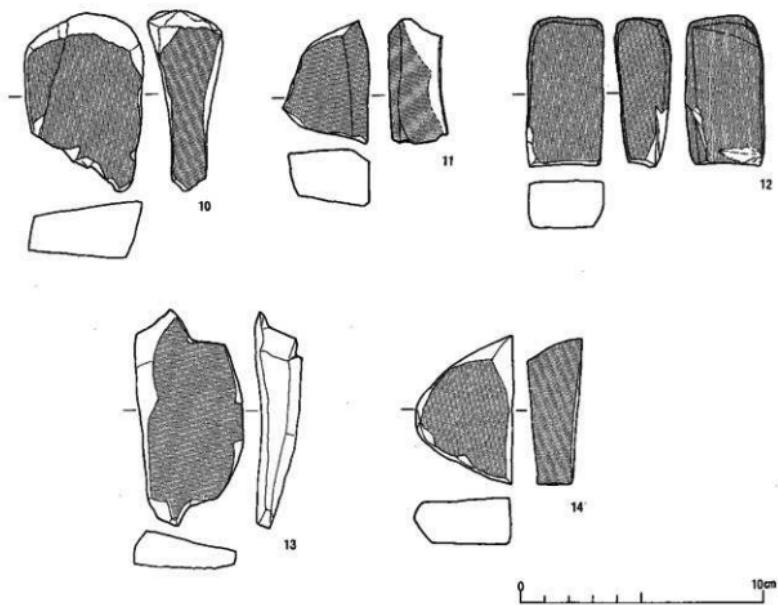


図39 石製品(2) (1:4)

9は硯である。周囲が破損している。II区Q-22出土で、平安時代か中世の所産であろう。
10~14は砾石である。10は7号竪穴住居址、11は14号竪穴住居址より出土しており平安時代の所産である。12はII区Q-32の出土で、長方体の優品である。13はII区R-14、14はII区P-6よりそれぞれ出土している。

第5章 繩文時代・中世の遺構と遺物

1 繩文時代

A 遺構

溝状土坑（図40）

トラップ・ピット（TP）とも呼ばれている深い掘り方をもつ溝状の土坑である。繩文時代であるとの根拠はないが、飯山地方の溝状土坑で確実に弥生時代遺構と思われるものが検出されていないので、ここでは繩文時代の遺構として紹介するものである。今回の調査ではII区及びIII区で合計7基発見されている。溝状土坑は一般的に列をつくって構築されることが多いが、道路幅の調査であったため1・2と6・7が同一の列と推定されるのみである。

今回発見された溝状土坑の規模は、長さ220～290cm、幅25～35cm、深さ80～100cmである。

土坑（図33-SK 9～11）

繩文時代の落とし穴と考えられる土坑である。すべてIII区において検出されている。この中で特に典型的と思われるのがSK 9で、長さ125cm、幅65cm、深さ60cmを測る。底面は平坦で、ほぼ中央には小穴がある。

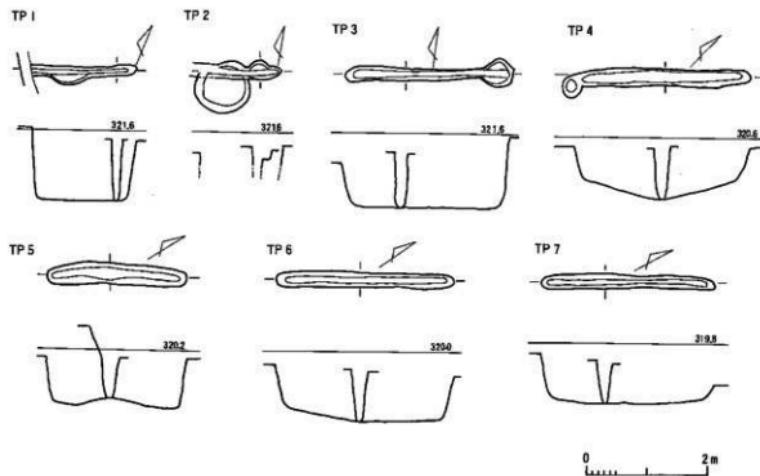


図40 溝状土坑実測図（1:80）

B 遺 物

土器 (図41)

今回検出された縄文時代の土器は、まとまって検出されたものはない。I区から1点、II区から1点、III区から13点出土した。いずれも小片である。以下土器の胎土・文様の種類等から観察してみたいと思う。

胎土 1・2・4・10は多量の纖維を含む土器片である。いずれも黄白色を呈しており焼成は悪い。その他は無纖維土器である。いずれの土器片にも砂粒が含まれているが、1・3・5・7・9・13には石英が含まれ、特に4には多く認められる。6・11・12には石英粒はない。14には金雲母が認められる。12は土の精製が悪く混入された砂粒子も不揃いである。

文様 1～4・10は絹条体压痕文土器であり、回転縄文に見られる文様の規律性は見られない。太めの縄を押圧したものと思われる。5は左下がりの斜縄文で単縄文と思われる。6は右下がり斜縄文である。7は細い縄を使用して施文している。左、右下がりの斜縄文の間は凸状帯を残して区切られている。11は右下がりの斜縄文であるが、横走させた施文の単位の境に縄の折り返し痕が見られる。12・13は細い縄を三重に折り返した縄で多重に施文したものである。14は口縁部分であるが、僅か下がった所に横に隆起部を作り、その上に沈線文を施している。

石器 (図42)

ここに掲載した石器類は、旧石器～弥生時代に所属するものと思われるが、一括して本項で説明を加える。なお、遺構に伴って出土した遺物はない。

石鎌 (1～3)

いずれも安山岩製である。3は茎が欠損しているが、本来は有茎である。弥生時代の所産であろうか。

打製石斧 (4)

正面の中ほどに自然面を有する。先端部にはあまり加工を施さず、大きな加工で鋭利な刃部にしている。側面は急斜な二次加工を施しており、後部には摩滅痕が認められる。

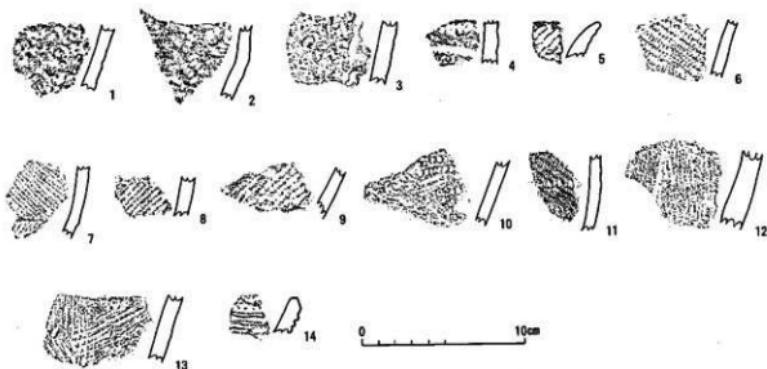


図41 縄文時代の土器 (1:3)

打製石器（5～10）

具体的な器種名で分類されないものを一括した。5は横長の剥片を素材とし、下端に刃部を作出したもので、機能的にはスクレイパーとして用いたものであろう。6はヘラ状の石器で、正面側には幅広く二次加工が施される。7も同様に二次加工が施されている。8は素材にはほとんど二次加工が施されずに、第一

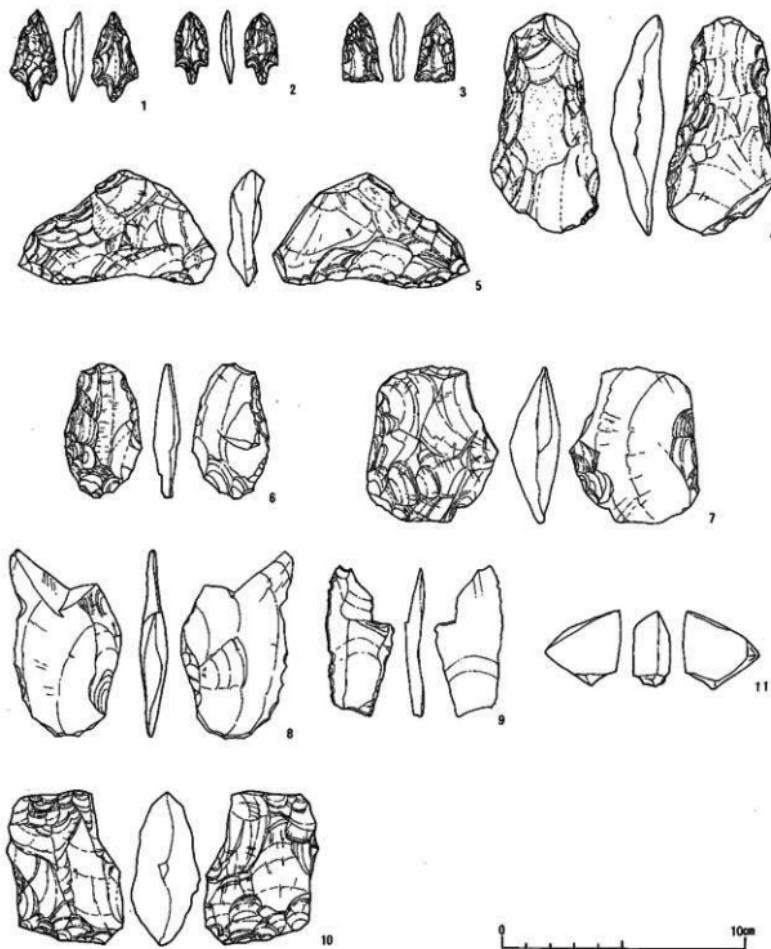


図42 石器実測図（1：2）

次加工によって作られた鋭い縁片を刃部としている。9は唯一黒曜石製で、旧石器時代の石器と思われる。縁片に小剝離痕が認められるが、明確な二次加工は施されていない。10は分厚い剥片で、あるいは石核であるかもしれない。

磨製石斧 (11)

磨製石斧の剥片であり全形は不明であるが、大型蛤刃石斧の可能性がある。

2 中世

今回の調査で中世の意向は確認できなかったが、I区を中心として中世の遺物が出土した。図示したもののは銭貨のみであるが、この他にも珠洲系陶器破片が散在して出土している。破片はたたき締痕を有する壺T種といわれるものなどがある。なお、片口鉢は発見されていない。数量的にも10点以内のごくわずかである。

銭貨は、I区1号竪穴住居址付近より8点が出土している。銭貨の一覧表は下記の通りである。

中世における当地区は、集落の名称としても残っている豪族泉(尾崎)氏の本拠地があった場所といわれ、遺跡の西北方の低湿地には五反田などの地名も残り、尾崎氏館跡と推定されている場所も存在している。今回出土した中世の遺物についても、そうした尾崎氏との関連が指摘でき、当該地の周辺においても何らかの遺構が残されている可能性がある。

図版番号	名 称	初 鋸 年	備 考
43-1	祥符通宝	大中祥符元年 1008	YMIH-26 940516
43-2	天禧通宝	天禧年間 1017~22	YMIJ-30 940518
43-3	熙寧元宝	熙寧元年 1068	YMIJ-30 940518
43-4	元豐通宝	元豐元年 1078	YMIH-26 940513
43-5	紹聖元宝	紹聖元年 1084	YMII-27 15
43-6	大觀通宝	大觀元年 1107	YMIH-26 940513
43-7	洪武通宝	洪武年間 1368~98	YMIH-26 940513
43-8	洪武通宝	洪武年間 1368~98	YMIH-26 940513

表1 中世銭貨一覧表

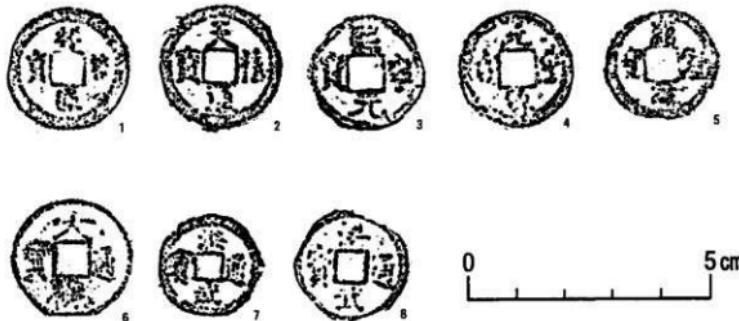


図43 中世の銭貨 (1:1)

第6章 回想・柳町遺跡の調査

桐原 健

1

中信・松本の住人である私が飯山の柳町遺跡と係りを持ったのは今から44年前のこと。

昭和26年の7月末、藤沢宗平先生と2泊3日の日程で行った栗林と長峯の弥生遺跡見学が切っ掛けになっている。藤沢先生も北信への旅は初めてで、唯一のテキストとして『考古学』7の7と8の2冊を持参されていた。

第1日目は栗林遺跡で神田五六先生宅を訪問。1泊させていただく。第2日目の7月30日は長峯遺跡で、午前中は下水内郡外様村の中学校で北沢量平氏の蒐集資料と発掘したばかりの長峯遺跡出土土器一括を見学。午後は飯山町に戻って飯山北高校の収蔵遺物の実見。校長さんが熱心な方で話が長びく。その夜は宿直室に泊めてもらった。

外様中学校が発掘した住居址は長峯8号・9号址と呼ばれていた。方形プランの2軒が並んでいて、土器は8号住からは出土せず、9号住にかたまっていたという。12点あった。(第1図)。

昭和30年4月、私は飯山南高校水田分校に赴任した。定時制なので午後の1時までに出勤すればよい。自転車を駆って長峯丘陵の遺跡を歩いた。外様中学校が発掘した地点も訪ねてみた。

今まで長峯遺跡を発掘してきたのは飯山北高校地盤部で、発掘地点は東長峯地籍だった。

だが、8号・9号住は丘陵を下った尾崎の集落に接する柳町地籍で、立地景観は大分異なっている。これは別に扱った方がよい。この頃は、尾崎の飯沢澄夫氏、下水沢の小野隆二氏にいろいろと教示を受けていた。10月には東長峯で発掘を行ったが、遺構には当らなかった。

昭和31年、飯山南高校本校に転勤、考古学クラブがあってその顧問となった。32年6月、飯山南高・北高のクラブ合同で柳町遺跡の発掘を実施する。担当者に神田先生をお願いし、飯山南高英語科の水野健児先生に参加していただく。水野先生は26年時には外様中学校に勤務され、柳町を発掘したクラブの顧問をされていた。飯山北高校からは地盤部顧問の上條耿之介先生、OBの森山茂夫・飯沢澄夫、宮沢桂氏が終始協力くださった。

外様中学校が発掘したと同じ煙(柳町354番地)にトレンチを入れ竪穴住居3軒を露呈した。長峯8・9号住を柳町1・2号住と変えたので、住居番号は3・4・5号住となる。同年11月、隣の煙(柳町357番地)で再度発掘。住居址1軒が現れた。柳町6号住である。

2

1・2号住は方形プランということだけで規模や柱穴・炉といった施設の状態はわからっていない。

3号住は隅丸方形プラン、規模は3.4×3.6m、柱穴は竪穴内に6、壁外に3ヶあるが不規則で、これでは上屋は復原し難い。床面中央から少し外れて地床炉がある。

4号住は5.3×7.7mの大きさをもつ長方形プランで、1隅に円形の張り出しがあり、同処に円形、対する壁隅に近く方形のピットが穿たれている。柱穴は3ヶほどあるが不規則である。床面は軟かく状態は良くない。

その4号住の床面を検出中、中央部分でより下方に別の床面を発見、これを追究したところ隅丸方形ら

しい住居が現われた。これが5号住で、3.5×4.5m程度の規模。床面は甚だ堅緻で同上に柱穴5ヶと地床炉が設けられていた。

ここで強調しておきたいことがある。実測図を見ると5号住の壁の状態から4号住を切って構築されたと受け取られてしまうが、作図の不手際で実際はそうではない。発掘の所見としては5号住が廃棄された後、埋め立てられ、同上に4号住がつくられたということである。

6号住は3号住の北60mと離れている。隅丸方形プランで6.2×5.2m、4本主柱で一方の桁中央下に地床炉がある（第2図）。

3

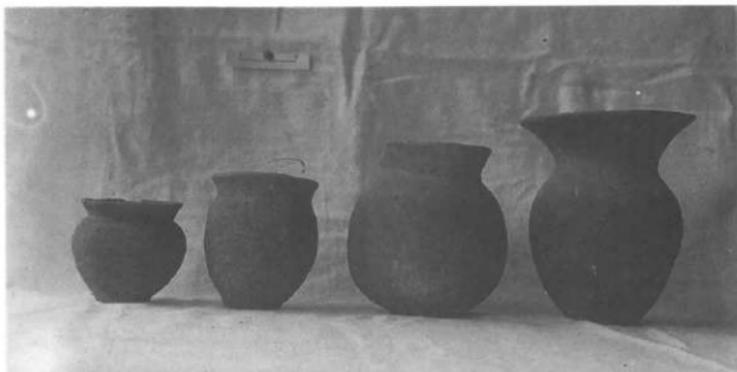
32年6月の発掘報告は同年12月の『信濃』9-12に発表し、34年6月には24年から29年にかけて飯山北高校が発掘してきた東長峯での10軒と、32年11月に発掘した柳町6号住とに合せて『考古学雑記』45-1に再発表した。

ところで今、柳町遺跡出土土器のプレートを見てみると、『信濃』に発表した5号住出土の器台1点が『考古学雑誌』では落ちていることに気付いた。「外反した口縁は強く屈曲して底部に至るが、同箇處に突出した段を構成し、段上に刻み目文帯を繞らしている。脚は挿入式をとる。色調は黒褐色で砂粒を含み焼成不良、外面は箇整形がなされている」として、当時は高坏部として扱っているが、これは器台の間違いである（第3図11）。

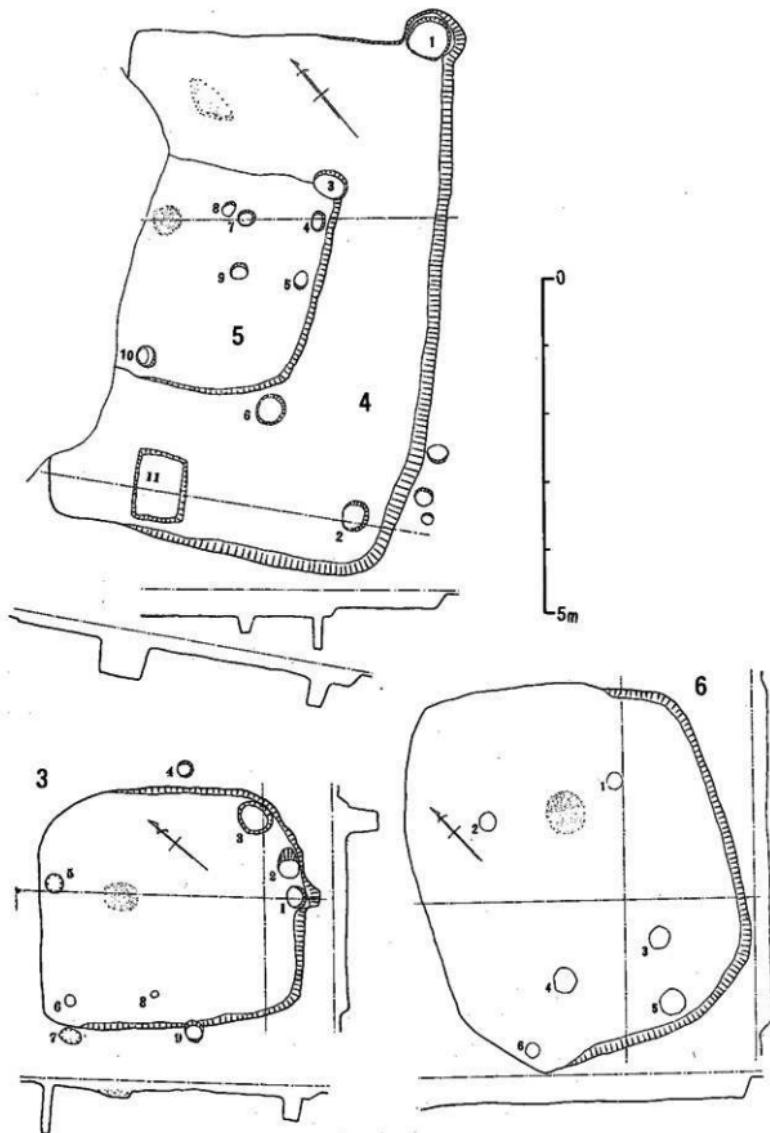
6号住出土土器は壺・甕・高坏の破片だけで図示はしていない。壺・高坏には赤色塗彩がなされ、甕には撚描文様が施されていたという程度の記憶しかない。

5号住出土は第3図に示した壺・甕・高坏・鉢と器台の11点。『考古学雑誌』では弥生後期の箱清水式として柳町I類に分類したが、改めて観察すると、壺の場合、赤色塗彩されているものは1点だけ他の5点には見られない。口縁が肥厚して外側に幅狭い口縁帯が構成されているのも特徴だろう。高坏は赤色塗彩されているが、脚部に穿たれている透し穴は三角窓ではなく丸窓である。そして、取り落してしまった器台は、これらの在地の土器に対する客体土器として扱われるものである。

2号・3号・4号住出土土器は第5図に図示した通り、壺・甕に撚描文様、赤色塗彩は見られない。3



第1図 2号住居址出土土器



第2図 柳町遺跡発見住居址

点の器台、2点の高环を飾っている透し窓は丸窓。なお、4号住の張り出し部ピット内から出土した土器は異形土器としているが、これは壺壺だろうと思っている。

4

5・6号住出土土器は箱清水式、2・3・4号住出土土器は箱清水式に後続する、越後系の影響を受けた新型式「柳町式」とし、箱清水式との間には大きなヒヤタスがあるものと考えた。この把握は大綱においては間違っていないと今でも思っている。但し、箱清水式との間にヒヤタスありとし、しかも柳町式中に小型器台の存在を認めているにも拘らず、一步進めてこれを古墳時代土器と認識することはできなかつた。私にとって柳町式土器はあくまでも弥生土器だったのである。

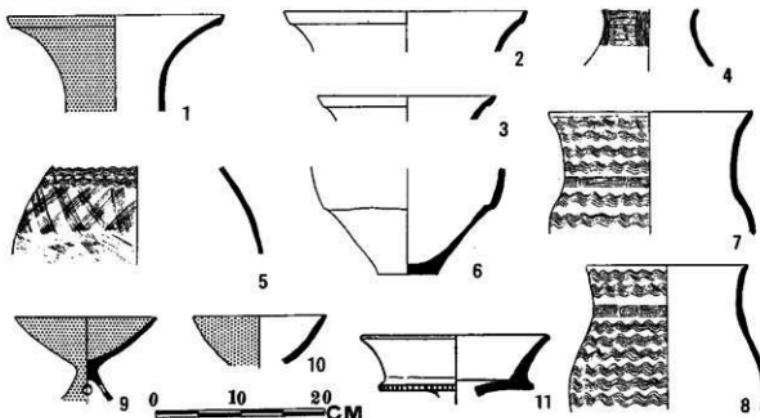
この後、昭和40年の夏には柳原・須多ヶ峯で本県最初の周溝墓が発見され、11月から12月にかけては中野市高丘の安源寺遺跡の発掘で箱清水式に越後系土器の伴うことを知った。同じ頃、飯山では須多ヶ峯遺跡の第2次調査が行われて、発見された住居址から柳町式土器が出土したとの話を聞いた。発掘に参加した学生たちが柳町式を古墳時代土器として取り扱っているとの話もきこえてきた。

そして、昭和46年2月、更級郡上山田町御屋敷遺跡の調査で、Y2号住出土土器1括をもって「御屋敷式」が設定された。小型器台は見られないが、S字状口縁甕や東海西部の壺形土器が伴っている。今にして思うと、5号住出土土器は御屋敷式に併行する時期に置かれるものだろう。

云わざもがなことだが、私が柳町式土器を古墳時代土器として理解できるまで14年の歳月が流れてしまった。事実の認識に固定観念が如可に障害となっているか、痛切に思われるところである。

昭和37年、私は飯山を離れ諏訪に移り、以来、飯山の弥生とは縁が薄くなっていく。

柳町遺跡を訪れる機会は絶えてなかった。さて、その後の柳町式土器である。『長野県史』(昭和63年刊)では「かつて、柳町式と云われた柳町遺跡出土土器は」と過去形で呼ばれてしまつて淋しかつたが、古墳時代I期に位置づけられている。また、平成5年9月に石野博信氏は「柳町遺跡で出ている土器は庄内型



第3図 第5号住居址出土土器

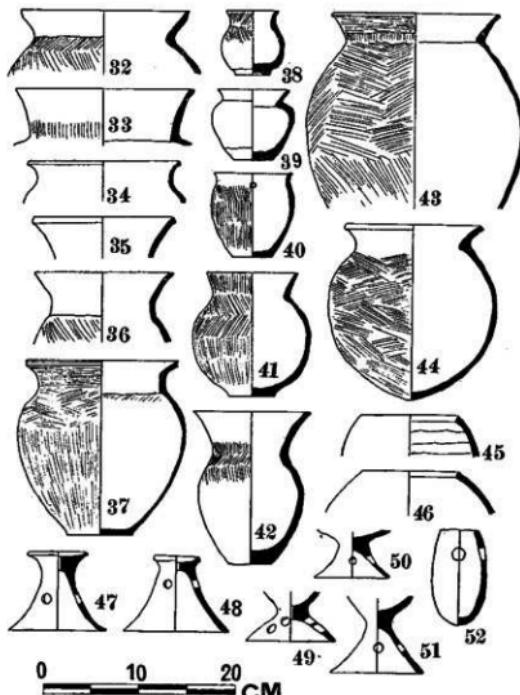
の甕ではないか、図面で見ますと庄内式の甕が長野県飯山市という信州でも北の方で出ています」と発言している。もはや柳町の土器は私の手を離れて一人歩きをはじめている。

5

平成6年5月26日、高橋桂先生よりの御招待で柳町遺跡の調査現場を見学する。先生は今、同遺跡の調査団長である。昭和32年から数えて37年ぶりに長峯丘陵を登り、下った。大分、変貌してしまったが、東長峯から尾崎へ向って下りていくところの佇まいは昔のままだった。

発掘現場は道の左側で幅40cmの溝がありシートで覆われている。中には9点の完形土器がぎしぎしと埋められてあった。箱清水の壺がある。大きな台付甕がある。鉢がある。道の右側にはアスパラガスの畑がひろがっている。あそこが37年前の発掘地点、あの時の景観が今そのままに残っていた。

1日前には水野先生が見学に来られたとのこと。顧れば往事ただ茫然として夢の如し、感無量である。



第二号址出土 38—42, 47—48

第三号址出土 37, 43, 50

第四号址出土 32—36, 44—46, 49, 51, 52

第4図 第2～3号住居址出土土器

第7章 補遺—古墳時代前期の土器について

1号溝址より出土した17個体の土器は、その出土状況より一括遺物と考えられるものである。以下に各器種別にあらためて説明を加え検討する(図44)。

壺

最も多く出土している。形態から次のように分類される。

A類 在地の箱清水系土器の要素を持つもの(92・93)。口縁部が単純に外反し、胴部下半で明確な稜をもって底部へ収束する。調整は口縁部がハケのちミガキ、胴部はハケ調整が認められる。赤色塗彩は、(93)の胴部下半から底部のみになされている。胴部には明瞭な焼が付着しており、火にかけられたことを示している。

B類 外来系土器(94~101)。箱清水系土器とは異質な土器で、形態によりさらにB₁~B₃に分類される。

B₁類 口縁部が「く」の字状に外反し、頸部への取約が強く、稜をもって胴部へ移行するもの(94・95)。胴部は球形をなし、平底の底部に至る。調整はハケが施されるが、口唇部のみナダが行われる。

B₂類 外反する口縁部から球形の胴部に緩やかに至るもので、外面はハケのちミガキ、内面はハケが施される(96・97)。

B₃類 球形の胴部に、内湾する口縁部をもつ、いわゆる内湾口頸壺(101)。

甌

個体数が少ないので分類はできないが、「く」の字状に外反するもの(102)、「く」の字口縁台付甌(103)、有段口縁甌(105)がある。台付甌は明瞭な面を持たず、丸く調整される。口縁部は外頃・外反する。

鉢

口縁部が外反する大型の鉢で、底部は平底である。底部に木葉压痕がある(104)。

高坏

1点のみの出土で、口縁形態は不明であるが坏部の下位が肥厚し、稜をもつものである(107)。

以上の土器は、器種的に偏りがあるものの一括品であることに大きな意味を持つ。壺A類(92・93)は赤色塗採がほとんどなされなかつたりハケ調整がなされるなど新しい要素があるものの、器形自体は箱清水式土器の要素である。一方、B₁類(94~100)は、球形の胴部と「く」の字状の口縁をもつもので、器形は箱清水系土器に類似する部分もあるものの新しい要素が目立つ。さらに、B₃類にいたっては箱清水系土器から系譜がおえない要素で、内湾気味の口縁部を持つ点において東海系の内湾口頸壺に類似する。ただし、形態的には多少異なる。また、台付甌(103)については、口縁部などに特色は認められないが、その系譜を東海方面に求めざるを得ない。(105)の有段口縁甌は、全体の形態は不明であるが、北陸の有段口縁甌に系譜を求められよう。高坏(107)は直線的にハの字状に開く脚部であり、東海系高坏形土器の系譜で理解できるものと思われるが、坏部が有稜となるものは北陸系にも認められる。

1号溝址出土土器は、在地系の土器と外来系の土器が混在した土器群であると考えられるが、外来系土器にしてもそのままの形態で流入したというよりもかなり融合したあり方と思われる。近隣における古式土器師について中野市七瀬遺跡で出土しており、その編年的位置についても触れられている(赤堀1994)。それに当てはめれば、第三段階土器群に含まれるものと思われ、北陸では漆町編年の5・6群の白江段階に相当しよう(田嶋1986)。これは、在地箱清水系土器の系譜が壺にわずかに認められるに過ぎな

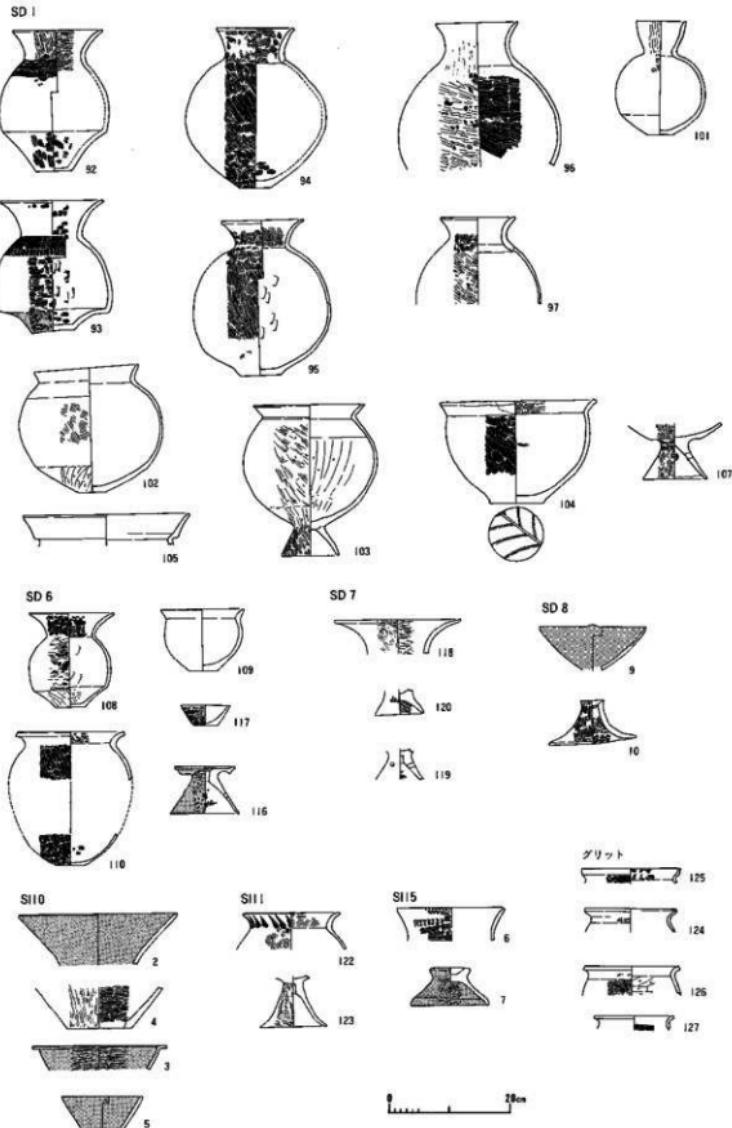


図44 古墳時代前期の土器 (1 : 8)

いこと、北陸系の土器の影響を受けたものが存在する反面、新たに東海系の影響を受けたくの字口縁台付甕、高坏などが存在することによる。もっとも、七瀬遺跡のように直接東海系の土器が流入しておらず、この時期の飯山地方は複雑な様相を呈しているようである（注）。

柳町遺跡					1号溝址	
七瀬遺跡	赤塙 1994	第1段階	第2段階 (古)	第2段階 (新)	第3段階	
漆町編年	田嶋 1986		漆町3	4	5	6
北勝	法仏	月影			白江	

表2 編年対照表

注

飯山地方における古墳時代前期土器として、上野9号住居出土土器が注目されている（飯山市教委 1989）。有段口縁の壺や口縁を面取りした甕、飾壺など北陸西部月影系に類似した土器群で構成されている。豊穴住居址も北陸系の住居址に類似し、ほぼそのままの姿で北信濃へ流入したあり方を示している。編年的には、上野遺跡9号住居址→柳町遺跡1号溝址と変遷するものと思われるが、一系列で変遷するあり方ではないということは明らかである。

なお、本稿執筆後赤塙仁氏に有益なアドバイスをいただくことができたが、理解不足のため十分に生かすことができず、また誤解もあるうかと思われる。赤塙氏にお礼と共におわび申し上げたい。

引用・参考文献

- 1986 田嶋明人 「考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」「漆町遺跡Ⅰ」 石川県立埋蔵文化財センター
 1994 赤塙 仁 「弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」「県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財調査報告書—長野県中野市内—栗林遺跡 七瀬遺跡」長野県中野建設事務所・長野県道路公社・舗長野県埋蔵文化財センター

第8章 まとめ

柳町遺跡は、外様平に突出する東長峰丘陵の先端部に所在する。明治時代から尾崎遺跡として知られていた。昭和20年代、飯山北高等学校地歴部が調査をもっぱら行っていた時には、東長峰遺跡群尾崎遺跡として、東長峰遺跡群の一つに数えられていた。昭和32年春調査を行った桐原健氏は、出土した土器の重要性に鑑み、東長峰遺跡群から分離させ柳町遺跡と命名し、今日にいたっている。

昭和32年桐原氏が調査した3号、4号住居址及び昭和26年に外様中学校が調査した2号住居址内出土土器をもとに「柳町式」なる型式を設定した。そして、箱清水式土器とは大きなヒアスが存在するしつつも、弥生式後期末に位置づけたのである。その後、柳町式土器の年代的位置について種々と論議、批判がなされ、現在では古墳時代前期の土器として定着している。私達も昭和40・41年に調査した須多ヶ峯遺跡出土土器の分析を通して、柳町式土器が古墳時代前期に位置させるのが妥当であろうと述べたことがあった。いずれにしても柳町式土器をめぐり、種々の批判や論議が活発化し、柳町式土器ひいては古墳時代前期の土器研究が大きく前進したことは事実である。見方をかえれば、このように古墳時代前期の土器研究が大きく前進したのは、桐原氏の柳町式土器設定にその要因があったといえないともない。

今回の調査は、既設農道の拡幅にともなう調査であり、幅も5~6mというごく限定されたものであり、部分的にしか遺構が検出し得ない場合もあり得るという制限つきの調査であった。このような制約をともなった調査ではあったが、以下に述べるように大きな成果が得られた。また、柳町遺跡が、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世にまたがる複合遺跡であることも判明した。

以下、調査の成果について略述していきたい。遺構面についてみると、まず住居址の発見があげられる。弥生時代、古墳時代に属するもの7軒、平安時代に属するもの4軒である。これら発見の住居址は、大部分が後世の搅乱をうけているものが多く、一部は調査区域外にのびている等明確に検出しえたものはない。後世の搅乱を多く受けているということは、一面からいえば柳町地籍が人々の居住に適したためといえよう。

次に溝状遺構が、8本発見されていることである。このうち、溝内に遺物をともない時期が明確なものは4本である。中でも圧巻は1号溝状遺構である。確認し得た溝の長さは約11m。幅35~45cm。深さ75cmの規模を有している。そして、溝内に17個体分の土器が、無作為に入れられた状態で発見された。ただ、北側は道路により削取されており、どの位のびているのか判然としない。この狭く、細長く、多量の土器をともなう溝状遺構がどのような目的で作られたのか、現状では全く不明といわざるを得ない。今後の重要な研究課題といえよう。類例をご存知の先学諸氏のご教示を切に賜りたいところである。

木棺墓も6基発見されている。墓址内から遺物が発見されていないので時期は、明確ではない。ただ、弥生後期のものは、当地域で発見されていないので弥生中期のものと考えてよいであろう。掘立柱建物址も6棟発見されているが、いずれも所属時期が不明である。そのほか縄文時代のものと思われる溝状土坑や落し穴と考えられる土坑も発見されている。更に平安時代の土坑墓1基及び土坑が7基発見されている。

以上のように各時代にわたる遺構が、限られた幅狭い範囲の調査にもかかわらず発見されたことは、柳町丘陵には全面調査が施行されたならば、もっと我々の眼を見晴らすような、遺構、遺物が発見される可能性が高いことをうかがしめるのである。と同時に丘陵の開発が進むことは、貴重な埋蔵文化財の破壊につながることもあることを市及び市民である我々が危機意識をもって知るべきであることを示唆しているといえないであろうか。

さて、遺物についてみよう。何といっても1号溝状遺構から出土した土器である。補遺の項でも記して

いるように、弥生式後期、箱清水式の伝統を有する土器及び東海系、北陸系の土器の要素をもつ土器などが存在する。換言すれば、在地系の土器と外来系（移入系）の土器が、今回の調査で存在することが判明したわけである。そして、それが各々別個に独立した存在でなくかなり融合した存在であることの予測をつくようかがしめるのである。いうなれば、箱清水系土器の伝統と外来系土器とが、各々の伝統をそれぞれ有しながら混合融合した状態を示しているということができよう。いずれにしても、桐原氏が、「柳町式土器」なるものを設定して以来、既に40年近くが経過している。今回の調査で得られた資料が在地系外来系という複雑な要素をもっていることは、飯山地域が文化交流の重要な拠点にあたっていることを我々に如実に示しているといえるであろう。いうならば文化の姿が単一的に存在するのではなく、複雑にからみ合いながらそれぞれの独自の姿を我々に示していることを今回の調査が示したといってよいであろう。従って桐原氏が設定した柳町式土器は、いろいろの論議批判を通じて古墳時代前期に年代的には定着したといいつつも、内容的には今後ますます北信濃全域を通して古墳時代前期のより深い、そして内容の濃い土器型式の検討が迫られているということができる。そういう意味では、今回の調査で私達が発見した古墳時代前期と思われる土器は、重要な資料となることであろう。このことについては、いづれ、詳細は検討と我々の考え方を示すことが近い将来にでき得ることと確信している。思えば、桐原氏が、「柳町式」なる土器型式を世に示してから既に半世紀近くの年月が経過した。ここらあたりで、我々が知り得る限りの「柳町式」土器の範疇を明らかにし、柳町式土器の眞の姿を土器を通して識者に問うべきであろうと考えている。

その他、鉄斧、鎌、砥石、紡錘車等、それぞれの時代の庶民の生活の一端を物語る遺物が出土している。更に中世では、珠洲系陶器の破片や銭貨が発見されており、尾崎を中心とした中世における幅広い経済交流、文化交流の姿を我々に示してくれると共に、豊かな沖積地を基盤にして豪族が成長しつつあったことを史料とともに今回の調査が証明しているといえようか。

今回の調査が、いくつかの制約を受けながらもスムーズに進行し得たのは、偏えに地元、一尾崎地区の皆さんの物心両面にわたるご協力と、酷暑の中黙々と発掘作業に従事された作業員の皆さま方のご協力があったからにはかならないと、改めて衷心より感謝申し上げる次第である。なお、ご多忙中にも拘らず、発掘調査にあたり、ご指導、ご助言をたまわり更には玉稿を賜った桐原健氏に深甚なる謝意を表し、つたない「まとめ」にしたい。

PLATE



▲ 遗路远景



1号沟出土器物出土状态





◀ 表土除去作業



◀ 道構検出



◀ ホップ播により搅乱されている



◆ 遗物出土状態



◆ 1号土坑坏出土状况

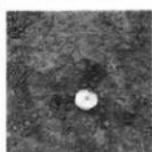
I区 A・B-1~6



◀ 重機による表土除去



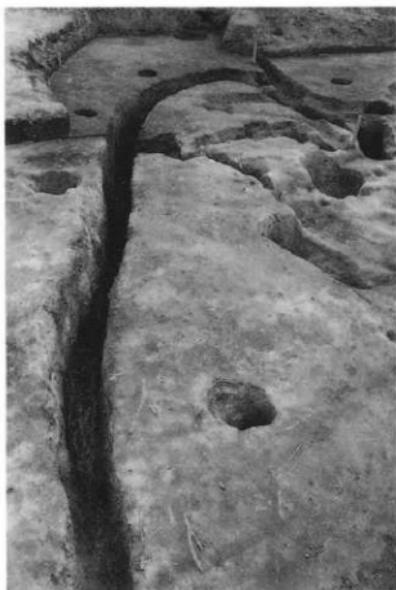
◀ 7号住居址上層面(南から)
▼ 鉄貨出土状態



◀ 7号住居址造構掘り下げ
(南から)



▲ 1区遺構全景（北から）



▲ 1号溝址（古墳）



▲ 土器出土状態



◀ 1号溝遺構調査区拡張



◀ 土器出土状態



▲ 土器出土微細調査風景



▲ 7号居住址完掘状態、北側(奥)に1号溝が見える



▲ 1号溝址土器出土狀態



▲ 1号溝址土器出土状態



▲ 1号溝址土器出土状態



▲ 8号住居址（弥生）完擺



▲ 8号住居址土器出土状態



▲ I区 I～K-33～42 (1・2号据立柱建物址)



▲ II区重機による表土除去



◀ 7号溝址
14・15住居址遺構上層面



◀ 7号溝址
14・15住居址完掘状態



◀ 15号住居址カマド



II区 P～R-22～23（北から）



7号土坑
土器出土状態



▲ II区Q～S-13～34（南から）



▲ 10号住居址遺構上層面



◀ II区5·6号溝址遺構上層面



▲ 6号溝址土器出土狀態



▼ 5号溝址上層斷面





▲ 12号住居址



▲ 13号住居址



◀ 2号土坑 遺構上層面



◀ 2号土坑二分割掘り下げる



◀ 2号土坑完掘 2号溝状土坑



◀ 6号土坑



◀ 5号土坑



◀ 田区 調査区（北から）



▲ III区P Q-10~1 (北から)



▲ III区P Q-14~1 (北から)



▲ III区P Q-8~Q-U-16 (南から)



▲ III区U-20 (北から)



▲ 16号住居址遺構上層面



▲ 重物出土状況



◀ 7号清埴土器出土状態

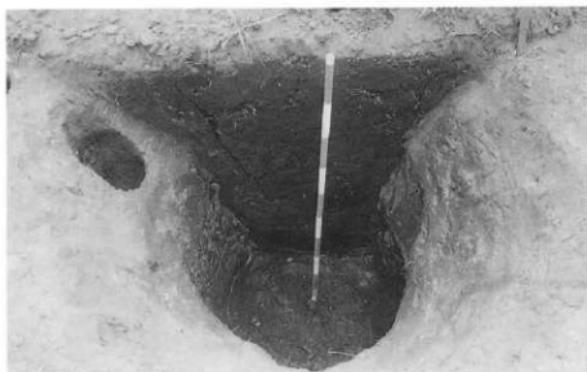


▲ S I 16麻皮削器出土状態





◀ 木棺墓（右から4～6）



◀ 2号井戸址



◀ III区Q1ピット1
土器出土状態

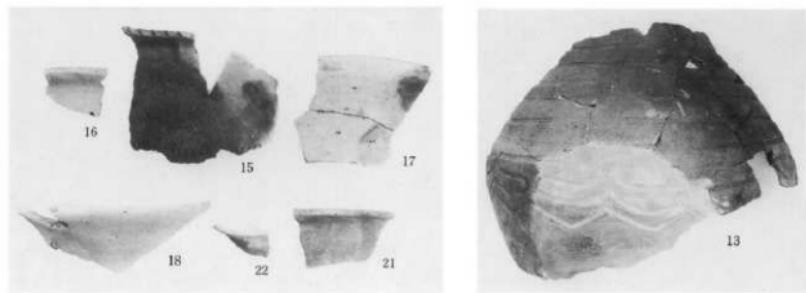
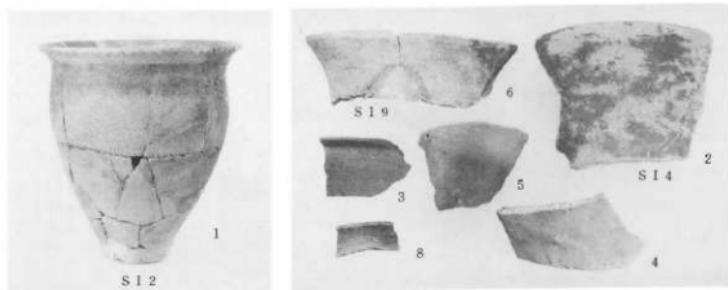


◀ III区U-19(東から)

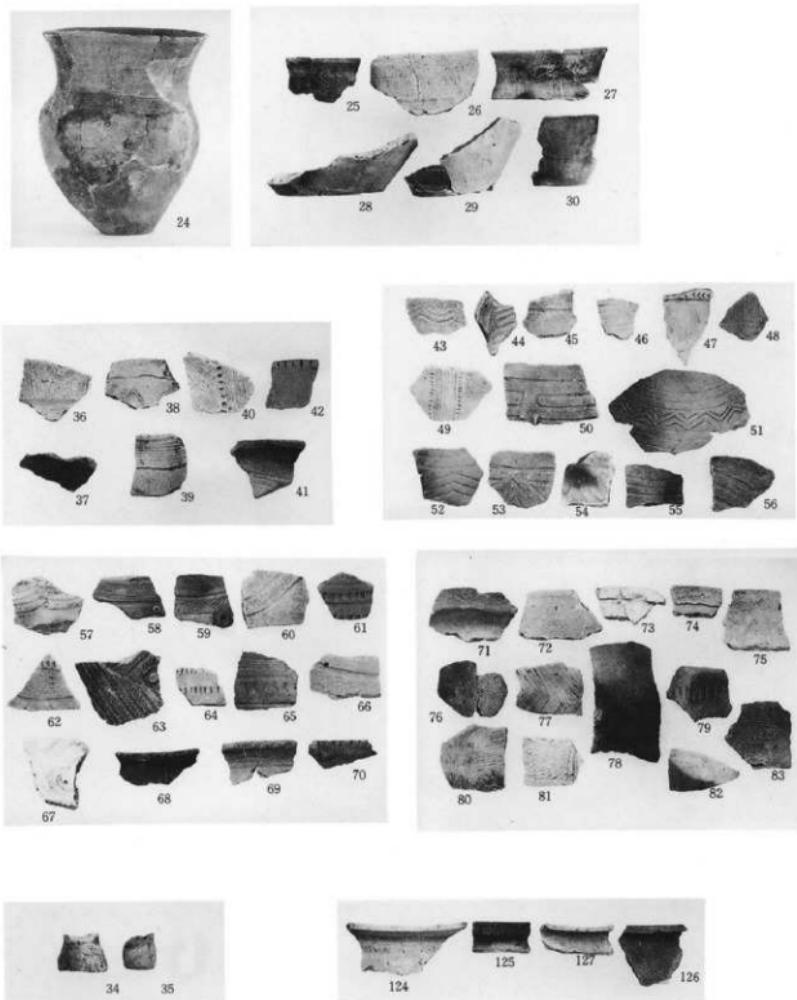


◀ III区R-24(西から)

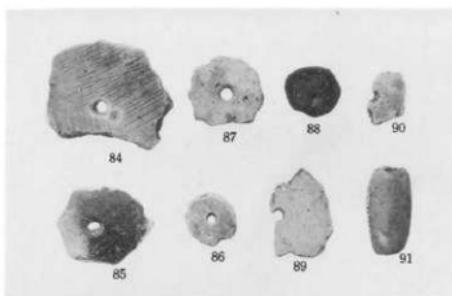




弥生・古墳時代の土器



弥生・古墳時代の土器

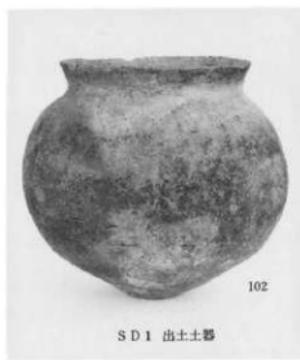
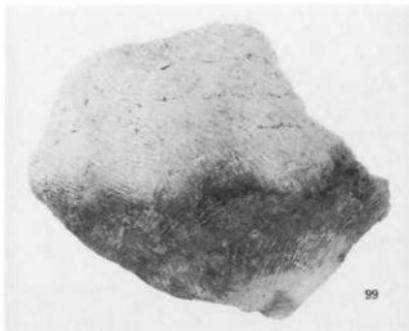


◆ 弥生・古墳時代の土製品



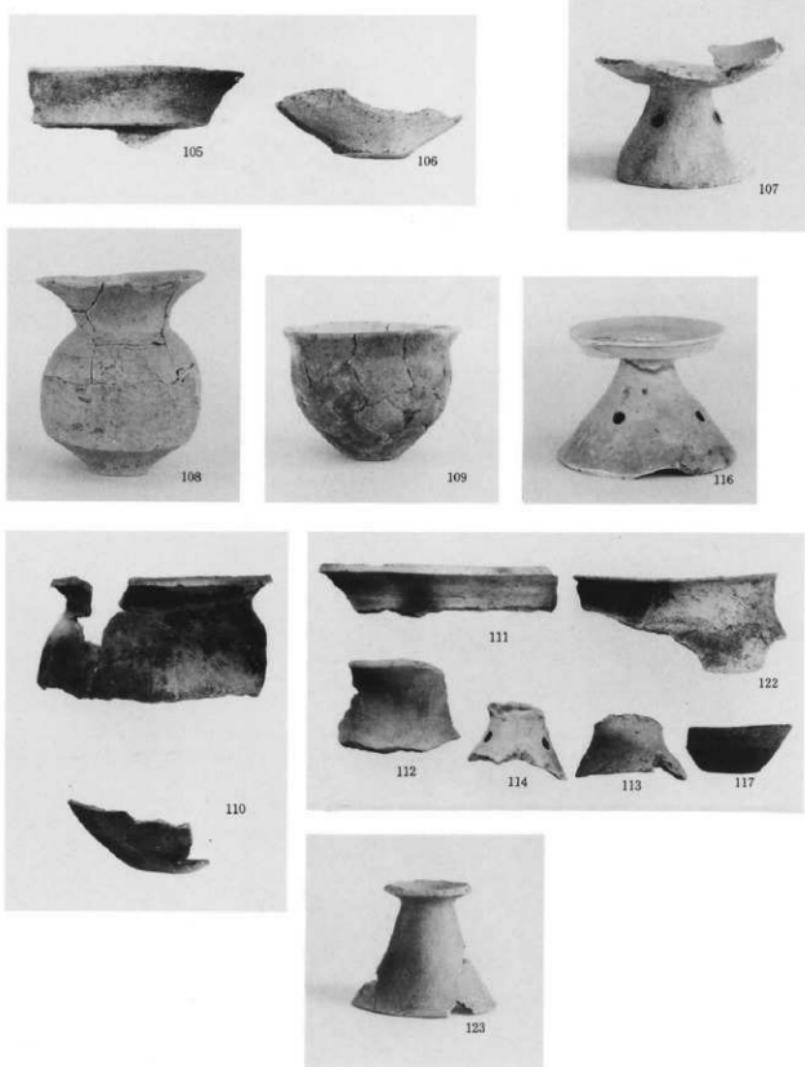
S D 1 出土土器

古墳時代の土器

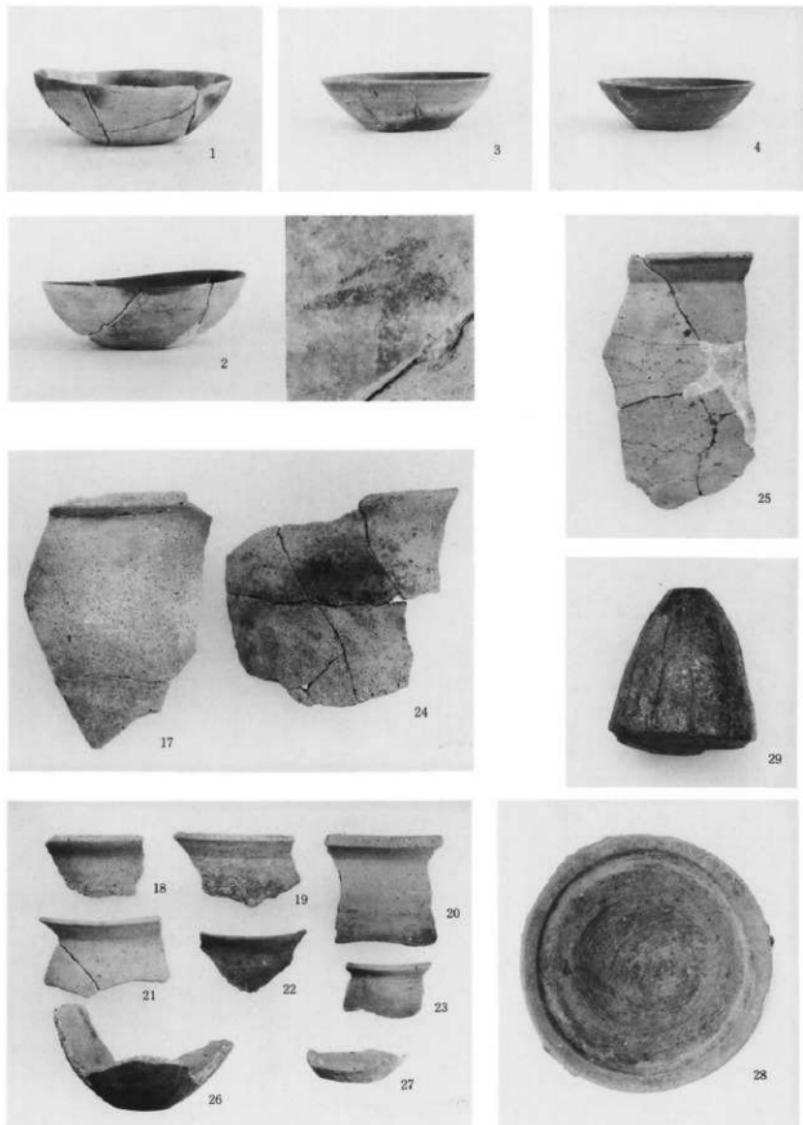


S D 1 出土土器

古墳時代の土器



古墳時代の土器



平安時代の土器・土製品



33



34



39



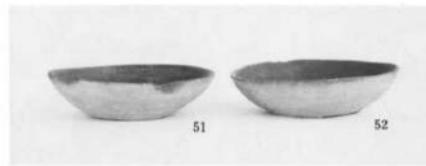
41

43

45



46

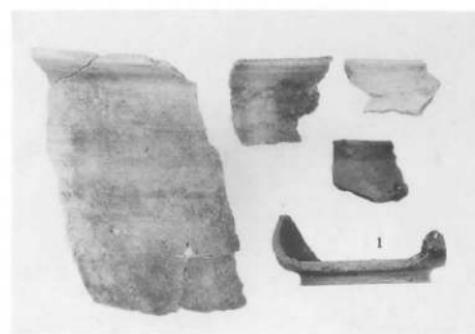


51

52



53

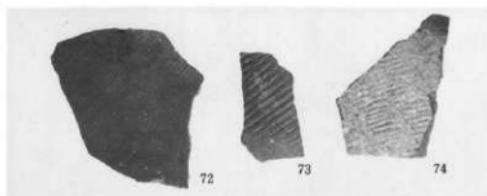


1

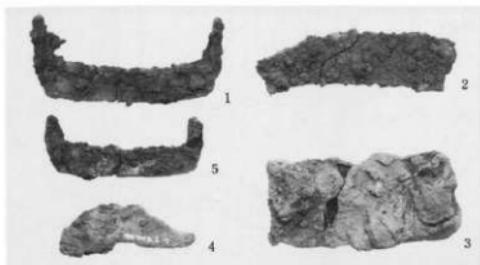


60

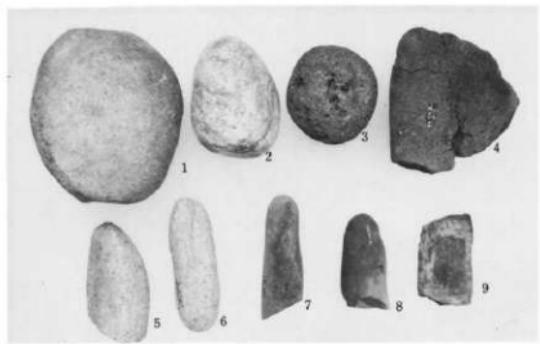
平安時代の土器



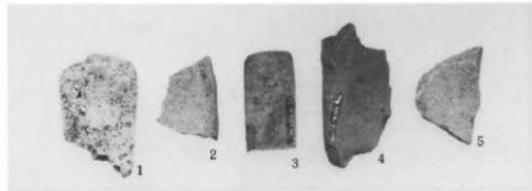
頸器

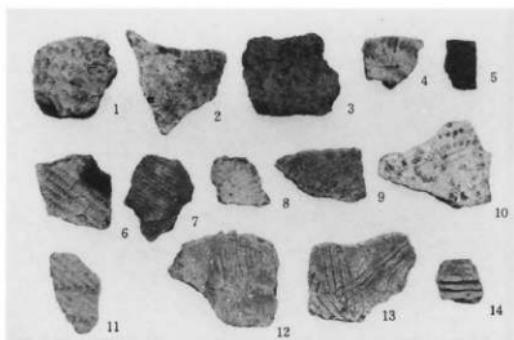


鐵製品

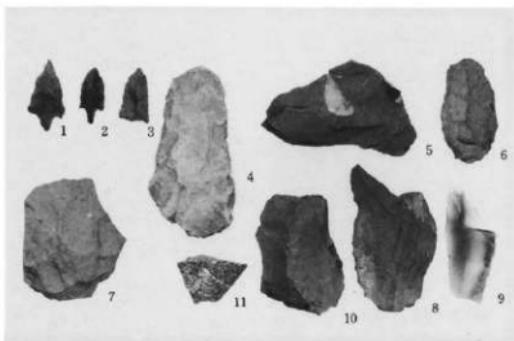


石製品

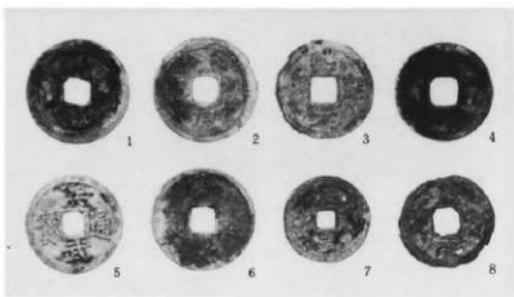




縄文時代の土器



縄文時代の石器



錢貨

飯山市埋蔵文化財調査報告 第44集

柳町遺跡

平成7年2月28日発行

発行者 飯山市大字飯山1110-1

飯山市教育委員会

編集者 柳町遺跡調査団

(団長 高橋桂)

印刷所 長野市柳原2133-5

ほおずき書籍舎

I. momoi